

熊本県文化財調査報告 第169集

# 鞠智城跡

—第19次調査報告—

1998年

熊本県教育委員会

## 序 文

鞠智城跡は、アジア情勢が緊迫した7世紀後半に、大和朝廷が築いた古代山城の一つです。九州には鞠智城跡の他に三箇所の古代山城があり、その三つの山城はいずれも国の特別史跡になっています。

このような重要性から、熊本県教育委員会では、県内で古代に築かれた唯一の山城である鞠智城跡の発掘調査を国庫補助事業や県の自主事業によって、これまで、18次にわたって実施してきました。

これまでの発掘調査の結果、貴重な文化財が残存していることが確認され、「県総合計画」の中に「歴史公園化を目指し調査と整備を促進する」と位置付けられました。文化財の保存と活用という基本的姿勢で、鞠智城跡の調査を実施しており、今回の第19次調査は、鹿本郡菊鹿町米原の長者原地区において、建物跡集中地区と池跡の調査を行いました。

この報告書は、第19次調査の結果をまとめたものです。

調査を実施するにあたりまして、文化庁、検討委員会の先生方からご指導をいただくとともに、菊鹿町教育委員会や地元の皆様など、多くの方々のご協力を承りました。ここに、厚くお礼を申し上げます。

平成10年3月31日

熊本県教育長 松尾 隆樹

## 例　　言

1. 本書は熊本県教育委員会が平成9年度に実施した国庫補助事業の発掘調査報告書である。
2. 調査現場での遺構実測・写真撮影・遺物取り上げは、各調査員が主に行い、遺構実測・遺物取り上げについては、(有)埋蔵文化財サポートシステム熊本支店の補助があった。
3. 出土した木材の同定はパリノ・サーヴェイ株式会社に委託した。
4. 本書に使用した方位とグリッドは、国土地理院用いた。
5. 遺物の整理・実測・拓本と遺構・遺物のトレースは、園村辰実・西住欣一郎・古閑敬士が主に行い、曾我敬子・三浦佐代子・川上寧子・金光里美・服部美紀子の補助があった。
6. 図版の遺物写真的縮尺は、軒丸瓦・墨書き器約1/2、平瓦・丸瓦約1/5、その他の遺物約1/4である。
7. 本書の執筆は以下の者が行った。

園村辰実	第Ⅱ章第2節6・7・第3節2
西住欣一郎	第Ⅰ章、第Ⅱ章第1節・第2節1~5・第3節1
古閑敬士	第Ⅱ章第2節8、遺物観察表
8. 第Ⅲ章については上記の3人でまとめた。
9. 付論については平川南氏(国立歴史民俗博物館教授)にお願いした。
10. 本書の編集は熊本県教育庁文化課で行い、園村・西住が担当した。

## 本文目次

### 第Ⅰ章 調査の概要

第1節 調査の組織.....	(1)
第2節 調査の進行状況.....	(2)

### 第Ⅱ章 調査の成果

#### 第1節 Ⅲ区の調査について

1. 遺構分布について.....	(6)
2. 36号～40号建物跡の周囲の調査	
(1) 遺構について.....	(7)
(2) 遺物について.....	(9)
3. 59号(65号)建物跡の調査	
(1) 遺構について.....	(12)
(2) 遺物について.....	(17)

#### 第2節 X区の調査について

1. 遺構分布について.....	(22)
2. 60号建物跡の調査.....	(25)
3. 61号建物跡の調査.....	(28)
4. 62号建物跡の調査.....	(30)
5. 63号建物跡の調査.....	(31)
6. 64号建物跡の調査	
(1) 遺構について.....	(31)
(2) 遺物について.....	(33)
7. 4号溝跡の調査	
(1) 遺構について.....	(39)
(2) 遺物について.....	(40)
8. 中世の調査	
(1) 遺構・遺物について.....	(40)

#### 第3節 池跡の調査について

1. 遺構について .....	(40)
2. 遺物について .....	(46)

### 第Ⅲ章 まとめ .....

(66)

### 付論 熊本県 葛智城跡出土木簡 .....

(69)

## 挿 図 目 次

第1図	19次調査区位置図	(3)
第2図	長者原Ⅲ・X区遺構配置図	(4)
第3図	谷部調査区位置図	(5)
第4図	長者原Ⅲ区遺構配置図	(6)
第5図	長者原Ⅲ区遺構実測図	(8)
第6図	長者原Ⅲ区出土遺物実測図	(10)
第7図	長者原Ⅲ区出土瓦実測図	(11)
第8図	59号(65号)建物跡調査グリッド設定図	(12)
第9図	59号建物跡土層断面図	(15・16)
第10図	59号(65号)建物跡実測図	(17)
第11図	59号(65号)建物跡実測図	(18)
第12図	59号建物跡出土遺物実測図	(20)
第13図	59号建物跡出土遺物実測図	(21)
第14図	59号建物跡出土遺物実測図	(22)
第15図	59号建物跡出土瓦実測図	(23)
第16図	59号建物跡出土軒丸瓦実測図	(24)
第17図	59号建物跡出土遺物実測図	(24)
第18図	長者原X区遺構配置図	(25)
第19図	60号建物跡平面実測図	(26)
第20図	61号建物跡平面実測図	(27)
第21図	62号建物跡平面実測図	(28)
第22図	63号建物跡平面実測図	(29)
第23図	64号(66号)建物跡実測図	(30)
第24図	64号(66号)建物跡実測図	(32)
第25図	64号建物跡出土遺物実測図	(33)
第26図	64号建物跡出土瓦実測図	(35)
第27図	64号建物跡出土瓦実測図	(36)
第28図	64号建物跡出土軒丸瓦実測図	(37)
第29図	瓦二次加工品実測図	(38)
第30図	64号建物跡出土鉄製品実測図	(39)
第31図	4号溝跡・出土遺物実測図	(41)
第32図	長者原X区中世遺構位置図	(42)
第33図	3号溝跡・6号～8号土坑実測図	(43)
第34図	長者原X区中世遺構出土遺物実測図	(44)
第35図	谷部トレーンチ配置図並びに池跡範囲図・池跡土層略図	(45)

第36図	池跡出土遺物実測図	(47)
第37図	池跡出土遺物実測図	(48)
第38図	池跡出土遺物実測図	(49)
第39図	池跡出土瓦実測図	(50)
第40図	池跡28トレンチ出土木製品実測図	(51)
第41図	池跡28トレンチ出土木簡実測図	(53)

## 表 目 次

第1表	調査進行表	(2)
第2表	遺物観察表	(54)
第3表	遺物観察表	(55)
第4表	遺物観察表	(56)
第5表	遺物観察表	(57)
第6表	遺物観察表	(58)
第7表	遺物観察表	(59)
第8表	遺物観察表	(60)
第9表	遺物観察表	(61)
第10表	遺物観察表	(62)
第11表	遺物観察表	(63)
第12表	遺物観察表	(64)
第13表	遺物観察表	(65)
第14表	瓦二次加工品計測表	(68)

## 図 版 目 次

図版1	長者原地区航空写真
図版2	上 6号溝跡・7号溝跡・土層断面A-B地点 中 59号(65号)建物跡 下 59号(65号)建物跡
図版3	上 60号建物跡 中 60号建物跡 下 61号建物跡
図版4	上 61号建物跡 中 62号建物跡 下 63号建物跡
図版5	上 64号(66号)建物跡

- 中 64号（66号）建物跡  
下 池跡6・7トレンチ
- 図版6 上 池跡6・7トレンチ  
中 池跡4・5・22トレンチ  
下 池跡7トレンチ取水口と池跡端部
- 図版7 上 第6図長者原Ⅲ区出土土師器  
中 第6図長者原Ⅲ区出土須恵器  
下 第7図長者原Ⅲ区出土平瓦凹面・丸瓦凸面
- 図版8 上 第7図長者原Ⅲ区出土平瓦凸面・丸瓦凹面  
中 墨書き土器  
下 第12図59号建物跡出土土師器
- 図版9 上 第13図59号建物跡出土須恵器  
中 第15図59号建物跡出土平瓦凹面・丸瓦凸面  
下 同上平瓦凸面・丸瓦凹面
- 図版10 上左 第17図59号建物跡出土鉄製品・砥石  
上右 第25図64号建物跡出土土師器  
中 第25図64号建物跡出土須恵器の一部  
下左 第26図64号建物跡出土平瓦凹面  
下右 同左凸面
- 図版11 上左 第27図64号建物跡出土丸瓦凸面  
上右 同左凹面  
中左 第28図64号建物跡出土軒丸瓦表面  
中右 同左裏面  
下 第28図64号建物跡出土軒丸瓦凹面
- 図版12 上左 第29図瓦二次加工品  
上右 第30図64号建物跡出土鉄製品  
中左 第37図池跡出土土師器の一部  
中右 第36図池跡出土土師器の一部  
下左 第38図池跡出土土師器  
下右 第37図池跡出土須恵器の一部
- 図版13 上 第38図池跡出土須恵器  
中左 第39図池跡出土平瓦凹面・丸瓦凸面  
中右 同左平瓦凸面・丸瓦凹面  
下 第40図池跡28トレンチ出土木製品
- 図版14 第40図池跡28トレンチ出土木製品

## 第Ⅰ章 調査の概要

### 第1節 調査の組織

調査主体 熊本県教育委員会  
調査責任者 豊田貞二（文化課長）  
調査・整理総括 丸山秀人（教育審議員）  
大田幸博（主幹・整備係長）  
調査担当者 園村辰実（文化財保護主事）  
西住欣一郎（文化財保護主事）  
古閑敬士（嘱託）  
調査指導 堀内清治（熊本県文化財保護審議会会長・熊本工業大学教授）  
坪井清足（（財）大阪府文化財調査研究センター理事長）  
岡田茂弘（国立歴史民俗博物館教授）  
小田富士雄（福岡大学教授）  
河原純之（千葉大学教授）  
澤村 仁（愛知みずほ大学教授）  
甲元眞之（熊本大学教授）  
北野 隆（熊本大学教授）  
平川 南（国立歴史民俗博物館教授）  
調査事務局 石原昭宏（課長補佐）  
　　総務係 江尻靖子（総務係長）  
　　岸本誠司（主事）  
　　川口久夫（主事）  
文化財整備係 緒方宣成（参事）  
　　東 修（主事）  
協力者 菊鹿町教育委員会  
菊鹿町米原地区  
菊池市壠切地区  
報告書担当者 園村辰実（文化財保護主事）  
西住欣一郎（文化財保護主事）  
古閑敬士（嘱託）

## 第2節 調査の進行状況（第1図～第3図・第1表）

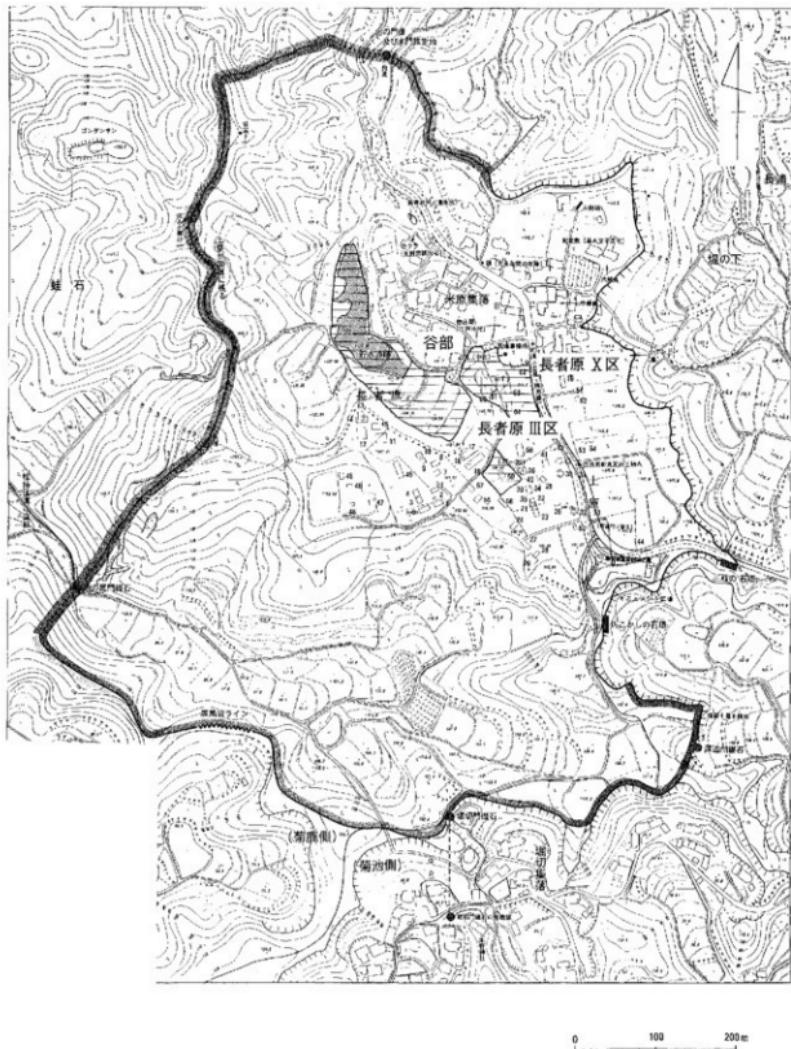
鞠智城跡で建物跡が集中する長者原地区をI区からX区に便宜的に分けて、第17次・第18次調査を実施してきた。今回の第19次調査は、長者原III区・長者原X区を実施し、さらに、長者原地区の北西側の谷部の調査を行った（第1図）。

36号～40号建物跡の周辺の未調査地区全面を対象にした長者原III区の調査では、表土剥ぎを重機で行い、表土の下位層を人力で掘り下げ、59号・65号建物跡を検出した（第2図）。長者原X区では、平坦面全ての表土剥ぎを重機で行い、その後、人力で清掃・精査を実施し、60号～64号建物跡、4号溝跡や中世の遺構を検出した（第2図）。また、長者原地区の仮造成工事に伴って、谷部に調整池を築造する必要性ができため、谷部の遺構確認調査を実施した。谷部の調査では、重機と人力でトレーンチ内の遺構・遺物の有無を確認しながら調査を進めていった。この確認調査では、水成粘土の存在が明らかになり、その粘土層端部の平面的な広がりを把握することができ、池跡を確認した（第3図）。

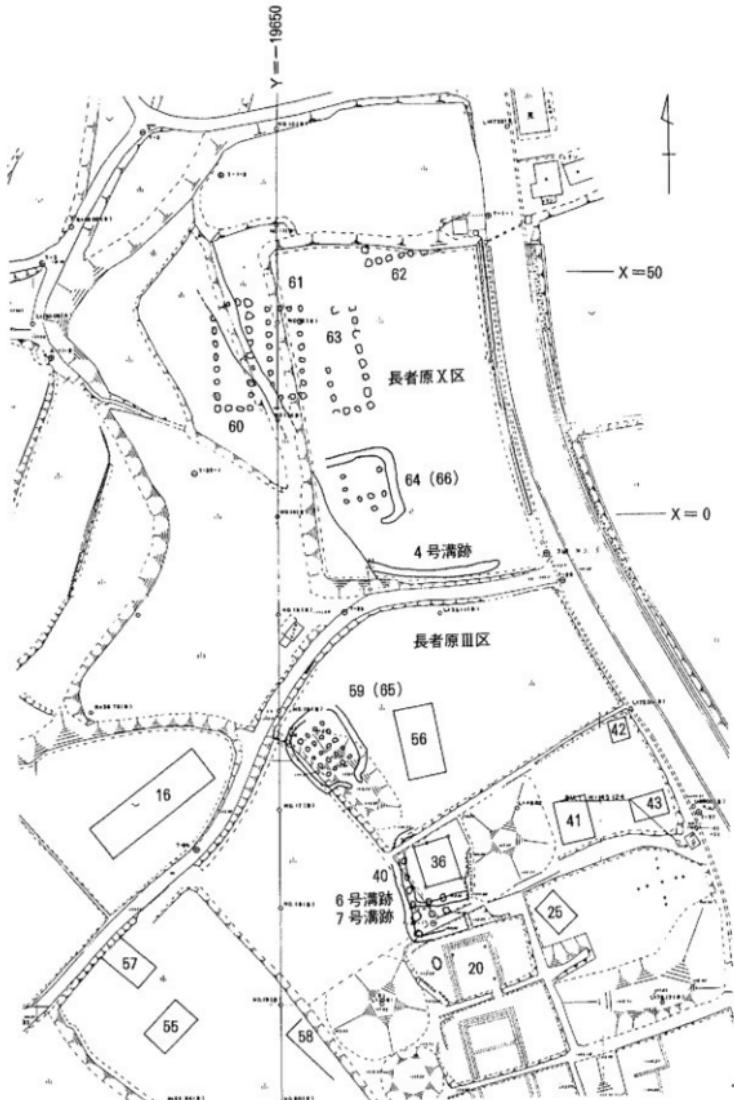
上記の発掘調査は、平成9年4月7日から調査準備を開始し、平成9年5月12日から平成10年3月31日まで行った。また、発掘調査と並行して、遺物水洗・遺物整理・遺物実測なども実施した。これらの進行状況は第1表の通りである。

第1表 調査進行表

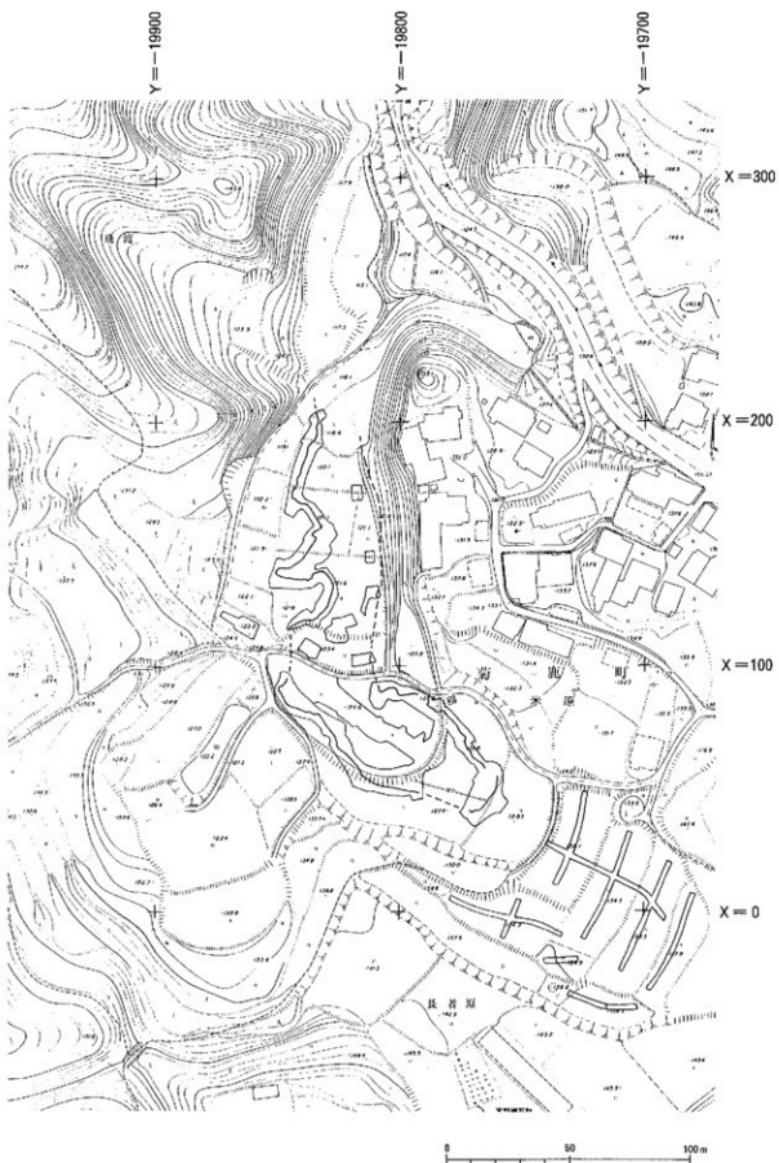
調査区・遺構等	H.9 4	5	6	7	8	9	10	11	12	H.10 1	2	3
III区 36号～40号建物跡周辺						発掘 実測						
59号・65号建物跡							発掘 実測					
X区 60号建物跡								発掘 実測				
61号建物跡								発掘 実測				
62号建物跡								発掘 実測				
63号建物跡								発掘 実測				
64・66号建物跡								発掘 実測				
谷部 確認調査												
28トレーンチ								発掘・取り上げ				
遺物整理												



第1図 19次調査区位置図



第2図 長者原Ⅲ・X区遺構位置図



第3図 谷部調査区位置図

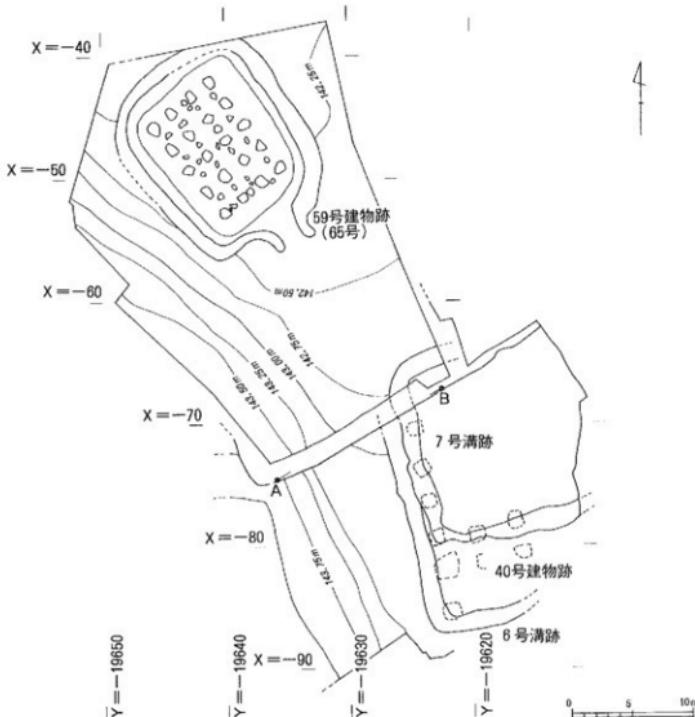
## 第II章 調査の成果

### 第1節 III区の調査について

#### 1. 遺構分布について（第4図）

長者原III区は以前の調査で検出した56号建物跡の西側及び36号～40号建物跡の西側・南側に位置する。第4図に示した長者原III区の地形は、IV層上面で測量したものである。その面での地形は、西側から東側に向かって低くなり、最も高い箇所と最も低い箇所の高低差は約1.75mある。今回検出した建物跡や溝跡は、最も低い箇所を占地して築造している。この低い箇所は、長者原地区の北西部にある谷の頭部にあたる。

新たに検出した遺構は、59号（65号）建物跡、6号溝跡、7号溝跡である。40号建物跡については、以前の調査で検出した建物跡の続きを確認できた。59号建物跡と65号建物跡とは重複した状態であり、6号溝跡・7号溝跡・40号建物跡の三者も重なり合っている。



第4図 長者原III区遺構配置図

59号（65号）建物跡と6号・7号溝跡、40号建物跡とは直線距離で約14m離れた箇所に分布しており、前者の主軸方向と後者の伸びる方向・主軸方向とは異なる。

## 2. 36号～40号建物跡の周囲の調査

### （1）遺構について（第5図）

この調査区で確認できたのは、6号・7号溝跡と40号掘立柱建物跡である。これらの遺構には切り合い関係が認められる。6号溝跡と7号溝跡とは40号建物跡の掘方を切っている。さらに、7号溝跡は6号溝跡を切っている。これらの関係を整理すると、古い順に、40号建物跡→6号溝跡→7号溝跡となる。

この7号溝跡は36号建物跡を築造する時には不要になり、溝跡の内部・上部には、36号建物跡に伴う整地層の土が故意に埋められた状態で存在する。

#### 40号建物跡（第5図）

この建物跡は掘立柱建物跡である。以前に確認されていた40号建物跡と柱筋が描うるので、40号建物跡とした（熊本県文化財調査報告第130集－第14次調査報告－）。検出できたのは建物跡の一部分で、西側端部の桁部と梁行2間分である。掘方については、検出面から約5cm掘り下げた状態で調査を終了している。未検出の掘方部分は36号建物跡の整地層の下部にあると考えられる。

桁行は5間と思われ、約15m（50尺）を測る。柱間寸法は約3m（10尺）の等間である。2間分の梁行は約6m（20尺）を測り、柱間寸法は約3m（10尺）等間である。

建物跡の掘方を検出したのが殆ど溝跡内であり、検出面が水平でない。そのために、掘方の平面形が不整な方形を呈している。本来は1～1.5mの方形を呈すると思われる。確認できた柱痕跡の直径は径約30～40cmを測る。桁部の南から2基目と3基目は柱抜き取り痕跡が確認できる。

#### 6号溝跡（第5図）

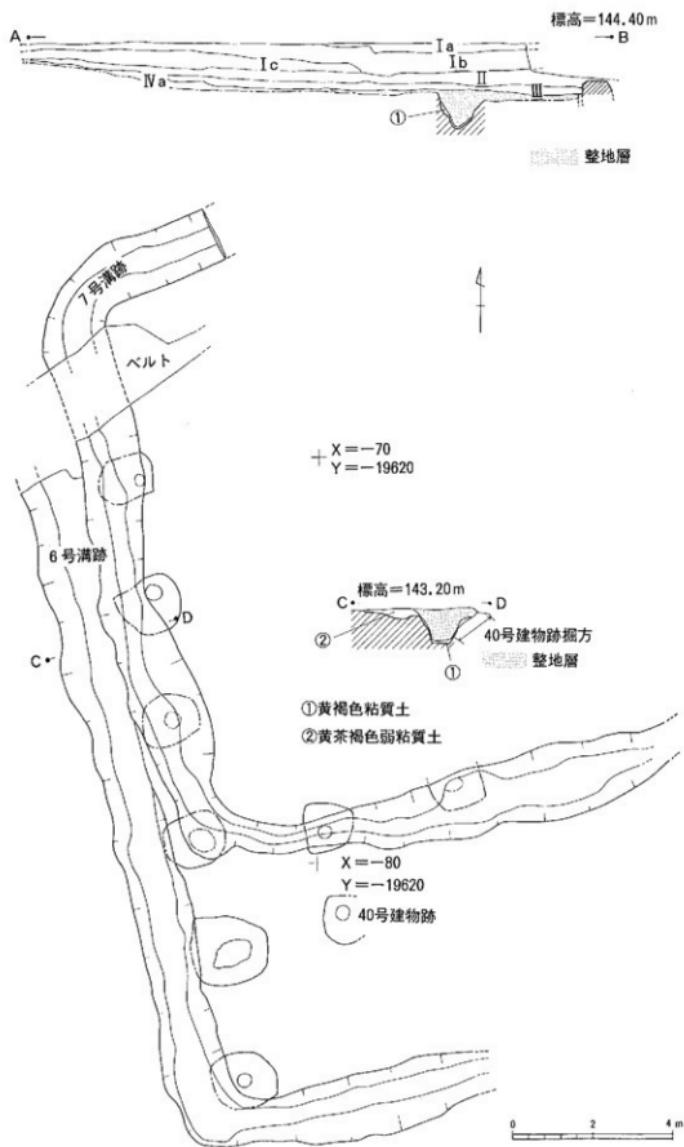
6号溝跡で検出できたのは溝跡の南北隅とそこから南北・東西方向に伸びる溝跡の一部分であり、その部分は全面発掘した。本来は以前の調査で確認されている37号・38号・39号建物跡の何れかに伴い、建物跡の周囲を巡るものと考えられる。

検出できた部分は「L」字形の平面形を呈する。南北方向に伸びる溝跡は約16m、東西方向に伸びる溝跡は約7m確認できた。7号溝跡と重複していない検出面での肩部幅約1.2～1.5m、底面幅約50～80cmを測る。断面形は略「U」形を呈し、残存している最深部で深さ約20～30cmを測る。覆土は調査の前段階で7号溝跡の覆土と区別するのが困難であったが、調査最終段階で土層断面を精査すると区別することができた。②層（黄茶褐色弱粘質土）が6号溝跡の覆土で、分層できない。②層は36号建物跡の整地層に類似しているが、それよりは粒子が粗い。

#### 7号溝跡（第5図）

確認できたのは、溝跡の南北方向に伸びる部分、北西隅・南西隅とそこから各々東西方向に伸びる部分の一部である。確認できた溝跡については全面発掘した。7号溝跡は6号溝跡と同様に、37号・38号・39号建物跡の何れかに伴い、建物跡の周囲を巡るものと考えられる。

検出面での肩部幅に狭い箇所と広い箇所があり、平面形が凸凹している。肩部幅約0.7～1.5mを測る。底面幅にも大小があり、肩部と同様に凸凹した平面形を呈している。底面幅約0.2～1.5mを測る。断面形は略台形を呈する箇所と略「V」字形を呈する箇所がある。覆土は①層と整地層の二つに分けることができる。①層は茶褐色土で、底面から壁面にかけて薄く堆積している（厚さ約2～10cm）。①層の上面には36号建物



第5図 長者原Ⅲ区遺構実測図

跡に伴う整地層が厚く覆い被さり、自然堆積状況を呈していない（厚さ約80~90cm）。

#### 土層断面について（第4図A-B・第5図）

長者原地区の基本土層については、第18次調査時に調査員全員で検討した（熊本県文化財調査報告第164集－第18次調査報告－）。その結果を踏まえて、今回はA-B地点で土層観察を行った。

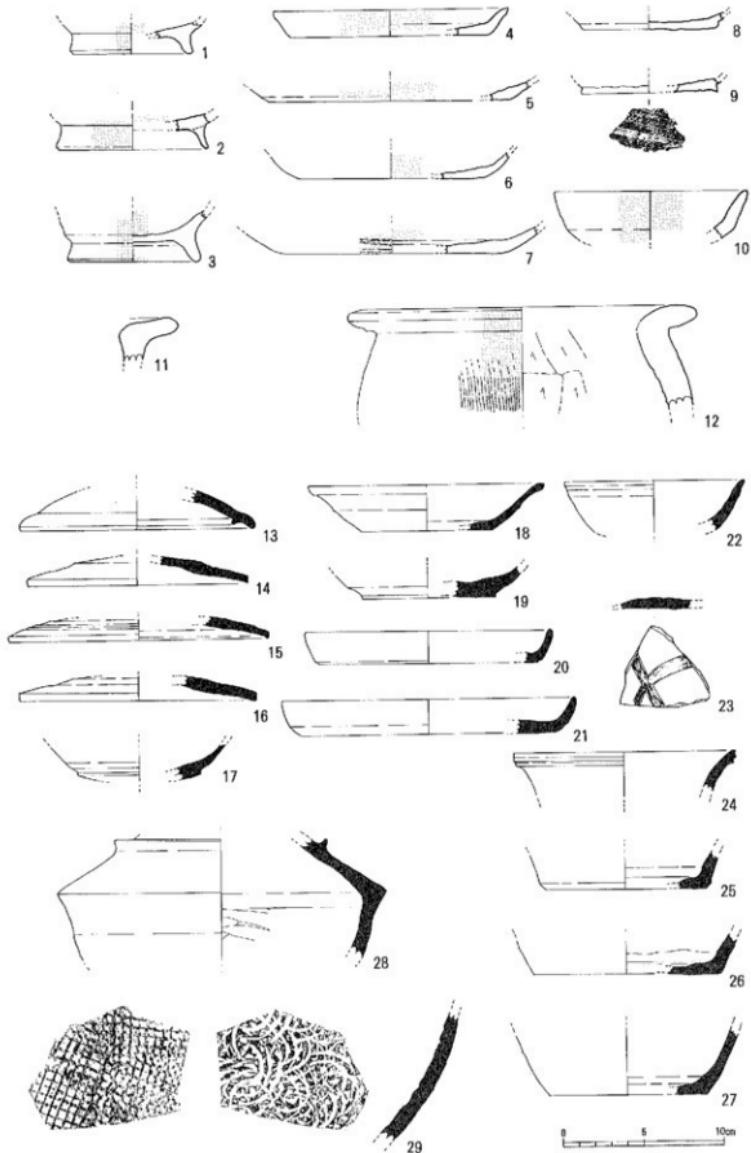
- I層 耕作土である。この地点ではa・b・cに細分できた。I c層は旧耕作土で、I b層は耕作土である。I a層はI b層がさらに搅乱を受けたものである。
- II層 淡黒褐色土。II層には近世以降の遺物が含まれる。層の厚さは、傾斜している西側端部で薄く（約4~10cm）、それ以外の東側部分で厚い（約20~40cm）。
- III層 黒褐色土。III層には須恵器・土師器・布目瓦片・炭化米などが含まれる。部分的に、少量の中世遺物が混じる。層は西側の傾斜が緩くなる付近から確認でき、厚さ約10~20cmである。
- 整地層 黄褐色粘質土。部分的に黄白色粘質土が混じる。整地層の上面は標高143.00~143.10mの高さでほぼ揃っている。整地層の西側端部では下部のIV a層を掘り込んで整地を行っている。断面図の東側端部の礎石が36号建物跡の礎石（熊本県文化財調査報告第130集－第14次調査報告－でS1と番号を付けてあるもの）であることより、この整地層は36号建物跡に伴うものである。36号建物跡を築造する際の整地が7号溝跡まで及んでいる。整地層の厚さは7号溝跡の箇所で約90cm、他の箇所で約10~30cmある。
- IV a層 淡茶褐色弱粘質土。IV a層は整地層の基盤面であり、6号・7号溝跡の地山になる。IV a層の西側部分が東側に低く傾斜しているのは、この地点が谷の頭部に位置していることに起因する。

#### （2）遺物について（第6図・第7図）

第6図・第7図には長者原III区の層、整地層、溝跡覆土などより出土した遺物実測図を掲載した。

まず、第6図の遺物について述べる。1~3は土師器の高台付坏片で、内外器面に赤色顔料が塗布される。高台は底部と体部との境付近に付き、「ハ」の字形に外側に開く。4~7は土師器の大皿片である。底部が確認できるものは回転ヘラ切りを施している。4・5・7の内外器面、6の内器面には赤色顔料が塗布される。8・9は土師器の底部片であろう。9の外底部には板状压痕が認められる。10は土師器の坏の口縁部片である。口縁部は外に開きながら伸び、端部が丸くなる。内外器面には赤色顔料が塗布される。11・12は土師器蓋片である。11は逆「L」字形を呈した口縁部片である。12は逆「L」字形の口縁部が外側にやや丸くなりながら開く体部に続く。外器面には縦方向のハケ目が施され、赤色顔料が塗布される。体部内器面には縦・斜め方向のヘラ削りが施される。

13~16は須恵器坏蓋である。13は内器面の口縁部寄りの箇所に短いかえりが付く。そのかえりは口縁部より下方には伸びない。口縁端部は丸くなる。15は体部がまっすぐに伸び、口縁端部で僅かに下方に折れ曲がる。14・16はほぼまっすぐな体部が口縁部まで伸び、端部がやや角張る。17~19は須恵器の坏身片である。17は丸底気味であり、底部と体部との境に段がある。18の体部は外に開きながら直線的に立ち上がり、口縁部が丸くなり弱い段をもつ。19は底部と体部との境に段をもち、体部がやや丸くなりながら立ち上がる。20・21は須恵器の皿片である。体部が丸くなりながら短く立ち上がり、口縁端部が丸くなる。22は須恵器高坏の底端部片であろう。体部がやや丸くなりながら立ち上がり、口縁端部が細くなりながら丸くなる。23は外底部に墨書きがある須恵器の底部片である。墨書きについては小破片であるため詳細は不明である。24は須恵器壺の口縁部片であろう。体部が外に開きながら伸び、口縁部には僅かな段が二箇所にある。25~27は須恵器壺の底部片であろう。外に開きながら立ち上がる体部が少し残っている。28は須恵器長頸壺の体部片である。

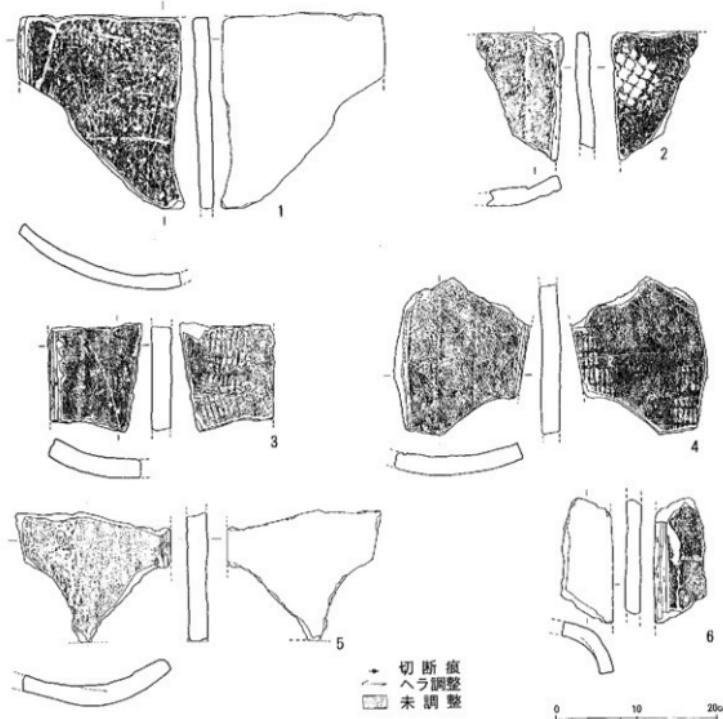


第6図 長者原Ⅲ区出土遺物実測図

体部の最も広がった部分で「く」の字形に屈曲し、その屈曲部の上部に断面形が略台形を呈する凸部がある。29は須恵器の蓋部片である。外器面には格子目タタキ、内器面には三重の同心円をもった車輪文当て具痕がある。中心円内に5条の放射線文を確認できるが、当て具痕が重複しているため正確な条数は不明である。

次に、第7図を見てみる。瓦片が小片であるため、平瓦の広端・狭端・丸瓦の上端・下端の区別が付きにくいため、便宜的に上下に配置して実測した。1～5は凹面に布目压痕と模骨痕がある瓦片である。1の側面部にはヘラ調整が施されるが、分割後の未調整面が残る。凸面のナデ調整は全面に及ぶ。2の上端部にはヘラ調整が施され、側面部にはヘラ調整が施されるが、分割後の未調整面が残る。凸面にはナデ調整が施されるが、大型の正方形格子目タタキが残る。3の側面部には切断痕があり、分割後のヘラ調整が施されるが、未調整面が残る。凸面にはナデ調整が施されるが、長方形格子目タタキが残る。4は凸面にナデ調整後の長方形格子目タタキが残る。側面部にはヘラ調整が施される。5の凸面には全面に及ぶナデ調整が施される。側面部にはヘラ調整痕がある。

6は無段の行基式丸瓦片であり、凹面に布目压痕がある。凸面のナデ調整は全面に及んでいる。側面部にはヘラ調整が施される。



第7図 長者原Ⅲ区出土瓦実測図

### 3. 59号(65号)建物跡の調査

#### (1) 遺構について

この建物跡は2基の建物跡が重複している。65号建物跡が59号建物跡の下層に築造されている。調査は59号建物跡に伴う整地面の上面までの掘り下げで終了している。それで、65号建物跡については、完全な状態で検出しておらず、殆どが整地層の下部に埋もれている。

#### 調査区の設定について(第8図)

表土剥ぎ終了後、II層以下の調査を実施している途中に、礎石の存在が明らかになった。それで、その他の礎石の存在の有無を確認するためにボーリング棒で探査を実施した。その結果、地中に礎石が存在し、並ぶことが明確になったので、礎石の並びに沿って土層観察ベルトを設け、そのベルトを使って調査グリッドを設定した。第8図にはそのグリッド設定状況を表示している。礎石の周辺は礎石間の大きさの小グリッド



第8図 59号(65号)建物跡調査グリッド設定図

数字はグリッド番号

であり、小グリッドの周囲は不規則な大グリッドにした。

24・35・42・50グリッドの南側には、擾乱溝が存在する。また、45グリッドの北側には3個、46グリッドの西側には2個の原位置を離れた礎石がⅠ層からⅡ層にかけて集められた状態で存在する。これらの礎石は59号建物跡のものでなく、別の建物跡の礎石が移動したものである。

#### 土層断面について（第8図・第9図）

土層断面を実測した箇所は第9図A-A'点とB-B'地点である。A-A'地点は59号建物跡の西側端部の桁行方向の礎石列に沿って設定した土層観察ベルト部分である。B-B'地点は59号建物跡の北側に設定した土層観察ベルト部分であり、59号建物跡の西側に築造されている56号建物跡の土層断面A-B地点に繋がる。第9図の右上に56号建物跡A-B地点の土層断面図も掲載している（熊本県文化財調査報告第164集－第18次調査報告－）。

#### 56号建物跡の土層断面について

56号建物跡に伴うのが整地Ⅰ層（赤褐色粘質土）であり、56号建物跡より一時期古い建物跡に伴うのが整地Ⅱ層（淡赤褐色粘質土）である。整地Ⅰ層の上面にはⅡ層が存在し、整地Ⅱ層の上面には④層（茶褐色土）、下面にはⅣa層がある。整地Ⅱ層の西側端部上面には⑤層（黒色土）が存在する。この黒色土層は56号・59号建物跡周辺の限られた範囲に分布し、56号建物跡と59号建物跡の両者の関係を把握する時の鍵層になる。

#### 59号建物跡の土層断面について

まず、B-B'地点の上層を見てみる。上記の56号建物跡土層断面西側端部に見られた黒色土層がⅢ層とⅣa層とに挟まれた状態で存在する。この実測地点には59号建物跡に伴う整地層の分布が見られない。A-A'地点の土層を見ると、59号建物跡に伴う整地層が存在する。整地層は黄褐色砂質土が固くしまったものである（厚さ約10~30cm）。整地層は黒色土層の下面で、Ⅳa層の上面に位置する。黒色土層は整地層の東南端部から北西端部付近にかけて存在し、上面にはⅢ層がある。

また、図面には示していないが、59号建物跡に伴う整地層の下に別の整地層が存在する。この層を確認したのは59号建物跡の周溝部の内側壁面である。この整地層は65号建物跡に伴うものであり、59号建物跡の整地層と同様に黄褐色砂質土であり、固くしまる。

#### 56号建物跡と59号建物跡との土層関係

56号建物跡土層断面で確認した整地Ⅱ層と59号建物跡に伴う整地層とは、黒色土層の下面に位置するという点からすれば、同時期と考えられる。56号建物跡は整地Ⅱ層より上面の整地Ⅰ層に伴うものであるから、56号建物跡は59号建物跡より新しい時期のものである。

土層関係より判明したことを整理し、建物跡の築造順序を考えると、65号建物跡→59号建物跡・56号建物跡の下層建物跡→56号建物跡のようになる。

#### 59号建物跡について（第10図・第11図）

59号建物跡は3間4間の礎石縦柱建物跡である。大型礎石については、第10図のようにS1~S20の番号を付した。S1~S20礎石の大きさは最大長約80~110cm、最大幅約70~90cmを測る。このS1~S20の大形礎石上面で、柱を据えることが可能な箇所を考慮しながら柱間を検討すると、桁行の柱間が約2.25m（7.5尺）の等間、梁行の柱間が約1.95m（6.5尺）の等間の一案が考えられる。調査は深掘りしたトレーナーの土層を観察しながら、整地層の平面・立面の双方の位置を確認しながら掘り下げを行い、整地層の部分はその上面で掘えている。整地層上面で、S5・S10・S11以外の大型礎石は礎石周縁部にはば沿った状態の掘方を確認することができ、S5・S10・S11の礎石は大型礎石に密接した状態の小型石も取り込んだ状態の掘方を確認した。S3・S8礎石、S8・S13礎石、S5・S10礎石の各礎石間の三箇所には小型礎石がある。これらの小型礎石の周りには掘方を確認できなかった。これらの小型礎石とS10の小型礎石を加えた4個は規則

性のある配置状況を呈しており、65号建物跡の礎石とは並びが異なるので、59号建物跡に付随するものと考えられる。S16・S20礎石は検出時には既に割れていた。

礎石の石材については田村実先生に鑑定・報告していただいている（熊本県文化財調査報告第164集－第1次調査報告－）。それを要約すると、大型礎石は溶結凝灰岩で、小型礎石に輝石・玄武岩質安山岩、花崗閃綠岩が混じる。

上層のところでも述べたように、59号建物跡の礎石には整地層が伴う。整地層の平面形は略長方形を呈しており、北側端部の幅約9m、南側端部の幅約7m、中央部の長さ約17mを測る。整地は建物規模よりやや大きめの範囲に及んでいる。

この整地層の周縁部には、整地層の端部より約0.4～1.2mの間隙を保ちながら溝跡を巡らせてている（溝跡肩部幅約0.8～1.5m、深さ約20～40cm）。溝跡を設けるのは59号建物跡が低い部分に立地していること関連すると思われる。周溝跡は周縁部全てを掘り込んでいるのではなく、南東部の短辺の一部を土橋状に掘り残しており、その部分の溝跡は幅が細くなりながら短く外に開く。土橋状の部分は幅が約2mあり、その部分が伸びる方向には建物跡の梁行3間の中央部がある。このことより、土橋状の部分は59号建物跡の入口としての機能をもつと考えられる。また、入口と考えられる部分と3間の中火部との間に小角礎を二箇所に埋め込んでいる。これは入口機能に付随する施設であろうか。また、北西側の溝跡短辺内の外壁に沿った二箇所にも角礎を埋め込んでいる。この角礎の機能については不明である。

周溝の覆土は①～④に分層できた。①層は灰黄褐色土で、整地層の土を多量に含む。②層は茶褐色土で、整地層の土を少量含む。③層は黄褐色土で、整地層の土とほぼ同一であり、整地層から流れ込んだものである。④層は淡黒褐色土で、整地層の土を少量含む。溝跡東側では下層の③・④層が覆土になる。

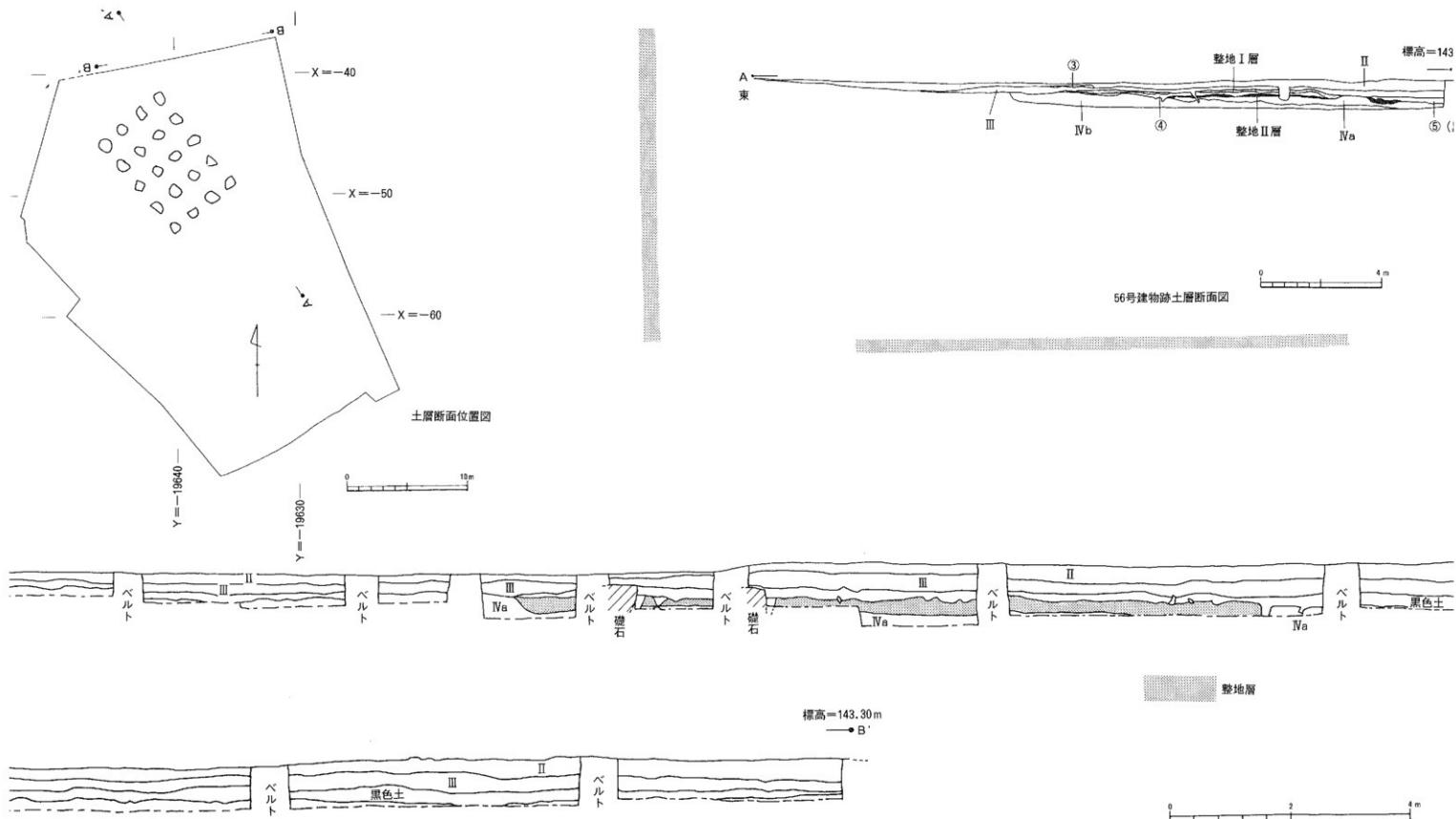
第11図には建物跡の断面図を載せた。大文字のアルファベットが59号建物跡の断面実測地点である。梁行方向の断面図を見ると、礎石各々の上面はほぼ水平になっているが、他の礎石と比較すると、標高約142.30～142.50mの範囲で、各礎石間に高低差がある。G-H地点で見ると、S9礎石上面の低さが顕著である。また、第10図E-F・第11図I-J地点を見ると、小型礎石上面は大型礎石上面と比べると、一段低い位置にある（高低差約10～15cm）。桁行方向の礎石断面の様子も梁行方向のものと同様な高低差がある。

#### 65号建物跡について（第10図・第11図）

65号建物跡は59号建物跡の下層に築造されている。調査が59号建物跡整地層までの掘り下げで終了しているため、65号建物跡は一部の礎石頭部附近が露出しており、大半は整地層の下面に埋もれた状態である。65号建物跡の礎石については、第10図にS1～S16の番号を付した（検出面での最大長約40～80cm、最大幅約35～50cm）。ただし、S2・S4・S8・S16の部分は、現状では礎石が露出していないが、ボーリング棒による探索で礎石の存在を確認している。これら以外の礎石が存在しなければ、65号建物跡は3間3間の礎石総柱建物跡と考えられる。礎石上面が露出している部分で柱間を考えると、桁行が約2.25m（7.5尺）の等間、梁行が約1.5m（5尺）の等間の一案が考えられる。

土層断面のところで述べたように、59号建物跡の周溝跡の内側壁面で確認した整地層は65号建物跡に伴うものである。65号建物跡の築造面は掘り下げ面により約10～20cm下に存在する。

礎石の石材については田村実先生に鑑定・報告していただいている（熊本県文化財調査報告第164集－第1次調査報告－）。それを要約すると、石材の殆どが花崗閃綠岩である。65号建物跡と59号建物跡の礎石石材に明確な違いが認められる。65号建物跡礎石の大きさは59号建物跡礎石より小さく、礎石の大きさの点でも両者の違いが顕著である。

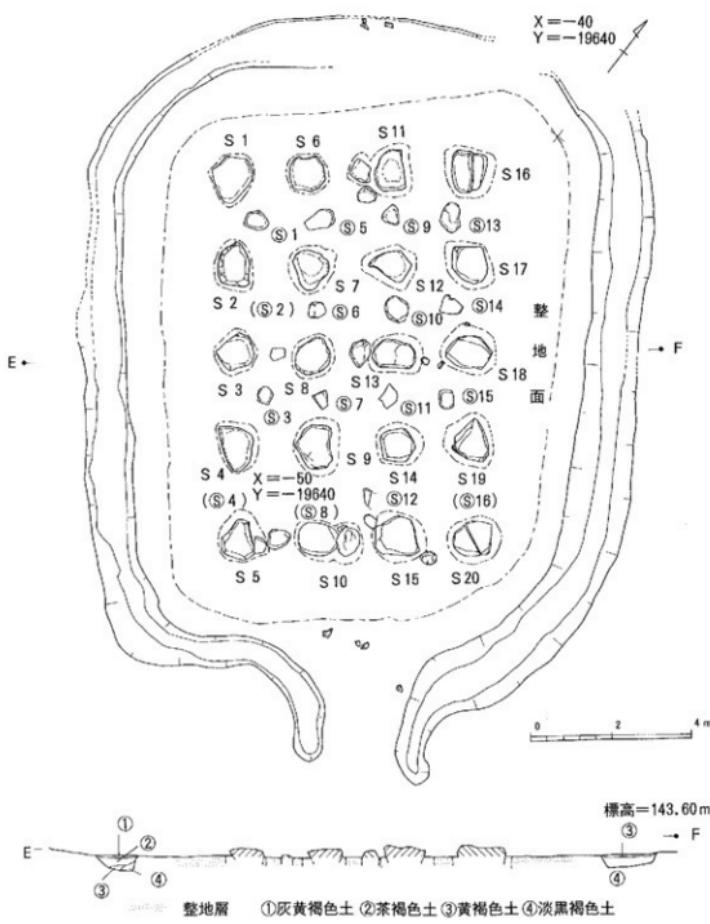


第9図 59号建物跡土層断面図

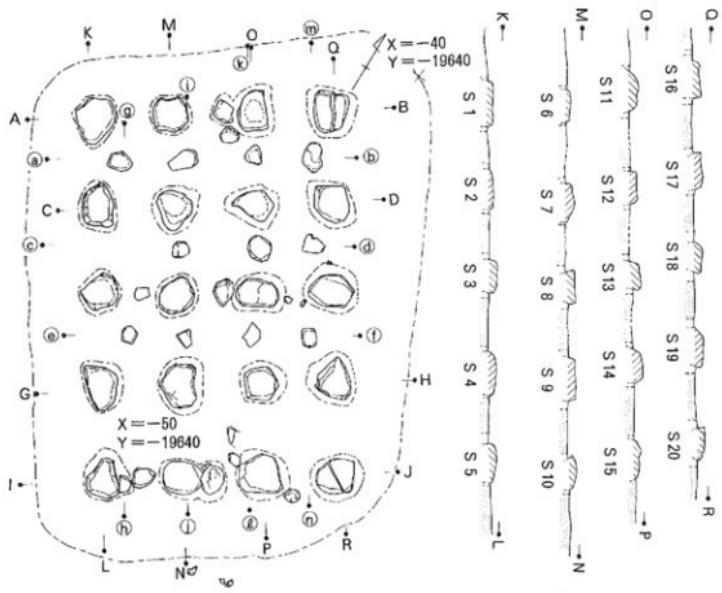
第11図には65号建物跡の礎石断面図を載せた。実測地点はⒶのように小文字のアルファベットを○で囲んで表現した。上面が露出している礎石については、標高約142.20～142.30mの範囲内で高低差がある。65号建物跡は大半が埋もれているため、上記以外の点については不明である。

## (2) 遺物について（第12図～第17図）

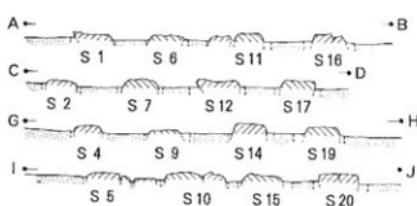
第12図～第17図には、第8図に示した59号建物跡の調査区の層や黑色土、59号建物跡の整地層、59号建物跡の周溝跡覆土より出土した遺物の実測図を掲載した。



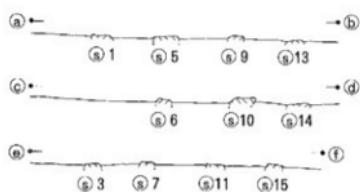
第10図 59号(65号)建物跡実測図



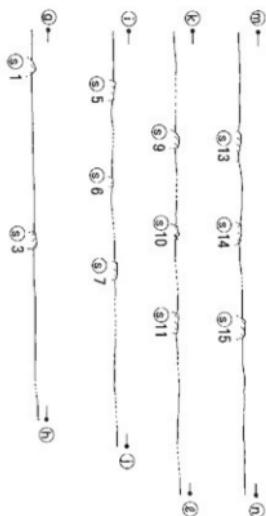
整地層



断面図の標高はすべて142.60mである。



0 2 4 m



第11図 59号(65号)建物跡実測図

### 土師器（第12図）

1は底部片であり、外底部に墨書がある。2は高台付坏の底部片である。内外器面には赤色顔料が塗布され、外底部に墨書がある。1・2の墨書は文字としては認識できるが、判読はできない。3～5・15は坏身片である。3～5の体部は丸くなりながら立ち上がり、口縁端部で丸くなる。内外器面には赤色顔料が塗布される。4・5の内外器面にはヘラ磨研が施される。3の内器面と外器面の口縁部近くにはヘラ磨研が施され、外器面の磨研は帯状になる。15は体部が底部より直線的に立ち上がり口縁端部が丸くなる。6は瓶の把手で、先端部は丸味を帯びる。7～14は高台付坏片である。「ハ」の字形を呈する高台は底部と体部との境付近に付き、7～11の高台は高く、12～14の高台は低い。8・9・12～14の内外器面には赤色顔料が塗布される。14の外底面には板状压痕が残る。16は皿片であり、体部が外に開きながら短く立ち上がり、口縁端部が丸くなる。

### 須恵器（第13図・第14図）

第13図1～14は坏蓋である。天井部が残っているものには外器面に回転ヘラ削りが施される。1には端部が角張った輪状つまみが付く。2～5はボタン状のつまみが付き、体部が丸くなりながら口縁部に伸びる。2のつまみは大型であり、4はつまみ頂部と体部内器面にヘラ記号が施される。5の口縁部近くの内器面にはかえりが付くが、先端部が欠損している。6にはつまみを貼付した痕跡があり、天井部はほぼ直線的に伸び、体部は丸くなりながら口縁部に至る。口縁部付近の内器面にはかえりが付いた痕跡が残る。7～13の口縁部近くの内器面には断面形が略三角形の短いかえりが付く。かえりは端部が尖っているものと丸くなるものがあり、口縁部より下方には伸びない。7・11の体部は天井部との境で屈曲している。8～10・12・13の体部はほぼ直線的に伸びている。14の天井部外器面にはヘラ記号が施される。第13図15～20は坏身片である。15・16の口縁部には蓋受けのかえりがあり、斜め上方に立ち上がる。17～20は底部～体部片である。体部は丸くなりながら伸びる。底部は17・18がやや丸味を帯び、19・20が平らである。21は皿片であり、体部が丸くなりながら伸び、口縁端部が丸くなる。第13図22～32は高台付坏片である。22・23・28の高台は底部と体部との境よりやや内側に入った箇所に付く。22は断面形が台形を呈する短い高台である。23・28の高台は「ハ」の字形に開いており、接地面は23が平らで、28が斜め上方に跳ね上がる。28の体部はやや丸くなりながら立ち上がり、口縁端部が丸くなる。24～27は底部と体部との境付近に「ハ」の字形に開いた高台が付く。25の高台は断面形が台形であり、短い。24・26の高台端部は斜め上方に跳ね上がる。27の高台は端部付近でさらに屈曲する。29～32には高台の貼付痕跡がある。その痕跡は29・30・32が底部と体部との境より内側に、31が底部と体部との境付近にある。32の体部は丸くなりながら立ち上がっている。第13図33・34は平瓶の口縁部片であり、外に開きながら伸び、端部がまるくなる。34は端部付近でやや内側に入り込む。第13図35～38は高坏片である。35・38は坏部分で、底部付近が厚く、体部は丸くなりながら伸び口縁部に行くにつれて薄くなる。38は口縁端部付近で弱く外反し、内底面にヘラ記号がある。36・37は脚部である。36は「ハ」の字形に開きながら伸び、体部下半で強く外反し端部が跳ね上がり、接地面がやや尖る。37は体部が「ハ」の字形に開きながら伸び、端部付近が細くなりながら弱く外反し段をもつ。体部外器面にはヘラ記号がある。

第14図1～5は壺片である。1は頸部が「く」の字形に屈曲し、口縁部が外に開きながら伸び端部でさらに屈曲し上方に短く立ち上がり、端部がやや尖る。内器面には同心円文の當て具痕が残る。2の口縁部は僅かに外反しながら伸び、端部付近で屈曲し斜め下方に折れ曲がり端部が丸くなる。外器面に格子目タタキ、内器面に同心円文の當て具痕が残る。3の肩部は外に開きながらほぼ直線的に伸びる。外器面に格子目タタキ、内器面に同心円文の當て具痕が残る。4は外反しながら立ち上がる口縁部が端部で斜め下方に折れ丸くなる。5の口縁部は外反しながら立ち上がり端部が角張り段をもつ。

瓦（第15図）

1～9は凹面に布目圧痕がある平瓦片である。9以外の瓦は広端・狭端の判断が付きにくく、便宜的に上下に配置して実測を行った。

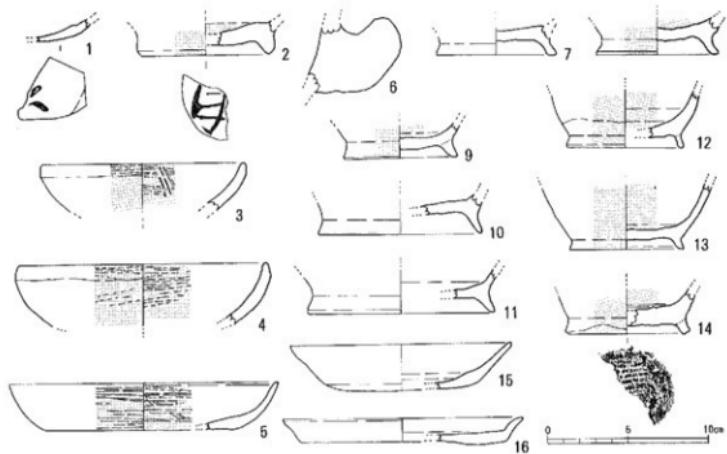
1～3は凸面にナデ調整が施され、側面部には切断痕と分割後の未調整面が残り、上・下端部にはヘラ調整が施される。1の凹面下端・3の凹面上端には縦横のヘラ調整が施され、その部分が薄くなり段になる。

1の凹凸両面下端付近には横位の沈線がある。凹面の沈線は窪んだ箇所にも布目圧痕があり、布端痕と思われる。3の凹面には模骨痕が残る。4～6の凸面にはナデ調整が施されるが、長方形格子目タタキが残る。

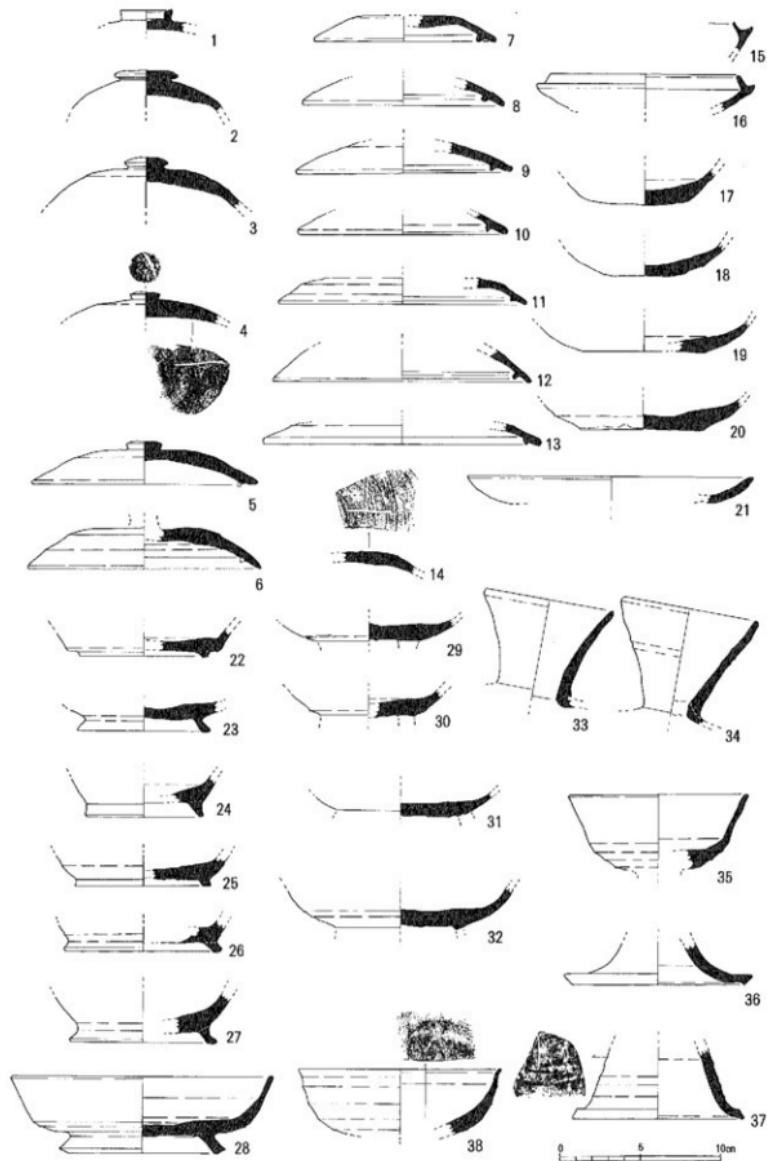
4の下端・5の上端にはヘラ調整が施される。4の凹面下端・5の凹面上端には横向方向のヘラ調整が施され、5のヘラ調整の下位には布端痕と思われる横方向の沈線がある。5・6の側面部には切断痕と分割後の未調整面が残っている。

5の凹面の側面に沿った箇所には部分的に突起痕がある。4・6の凹面には模骨痕が残る。7～9の凸面にはナデ調整が施されるが、大型の正方形格子目タタキが残る。7の側面部には切断痕があり側面部に沿った凹面に部分的な突起痕が確認できる。凹面には縦方向の紐状圧痕が残る。8の凹面下端部には横方向のヘラ調整が施され、その部分が薄くなり段を形成している。凹面には模骨痕が残る。9は残存部が大きく広端・狭端の判断ができる。凹面の広端部寄りの箇所には粘土を削り取った跡が帯状にあり、その上位に横方向のヘラ調整が施され、その部位が薄くなり段になっている。広端部上面にはヘラ調整が施される。側面部には切断痕と分割後の未調整面とがあり、側面部に沿った凹面には突起痕が部分的に残る。凹面には模骨痕がある。

10～12は凹面に布目圧痕がある無段の行基式丸瓦片であり、凸面にはナデ調整が施される。10は上端部上面にヘラ調整が施され、側面部に切断痕があり分割後の未調整面が残る。11の凹面下端部付近には帯状のヘラ調整が施される。側面部には切断痕があり、下端部寄り側面部には分割後の未調整面が部分的に残る。凹面には模骨痕がある。12は上端上面にヘラ調整が施され、側面部には切断痕が確認できる。凹面の上端部寄りの箇所は粘土を削り取っており、その部分が薄くなり段になっている。



第12図 59号建物跡出土遺物実測図



第13図 59号建物跡出土遺物実測図

### 軒丸瓦（第16図）

第16図の軒丸瓦片は凹面に布目压痕があり、凸面にナデ調整が施される。凹面の下端部より約1cm内側に入った箇所には瓦当を接合するための横方向の沈線4条が施される。その部分よりさらに内側に入った凹面には瓦当接合の補充粘土塊が残る。

### その他の出土遺物（第17図）

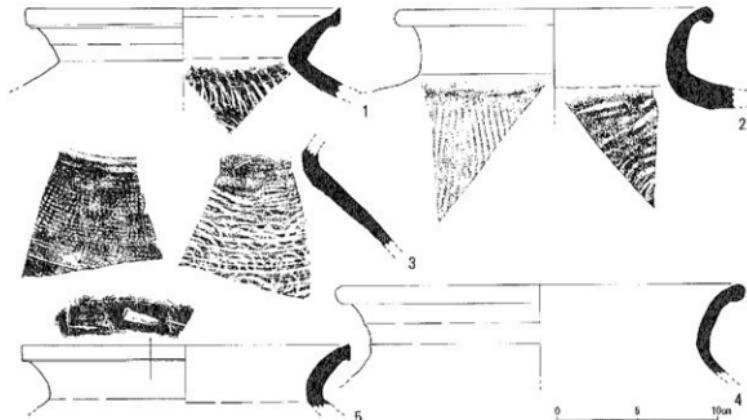
1～7は鉄製品である。1は片丸造りの長頸鎌片である。刃部の平面形は柳葉状を呈する。茎部の断面形はほぼ中央部で略正方形、下端近くで横長方形を呈する。2～4は釘片である。2・3は断面形が略正方形を呈する下端部付近で、2は先端部が折れ曲がり、3は先端部が欠損する。4は断面形が略長方形を呈する頭部付近であり、頭端部が左側に折れ厚くなる。5～7は刀子片である。5は茎部の一部を欠いており、体部は先端部ほど細くなる。背部は平らで、刃部は両刃である。茎部の断面形は略長方形を呈する。6は体部から茎部にかけて、7は先端部付近の破片である。6の茎部断面形は略長方形を呈し、7の刃部は両刃である。6・7は出土地点が同じであり同一個体の可能性がある。

8は砂岩製の砥石片であり、断面形が略長方形を呈する。四面とも中央部が窪んでおり、磨痕が全面に及ぶ。部分的に敲打痕と筋状の擦痕が確認できる。

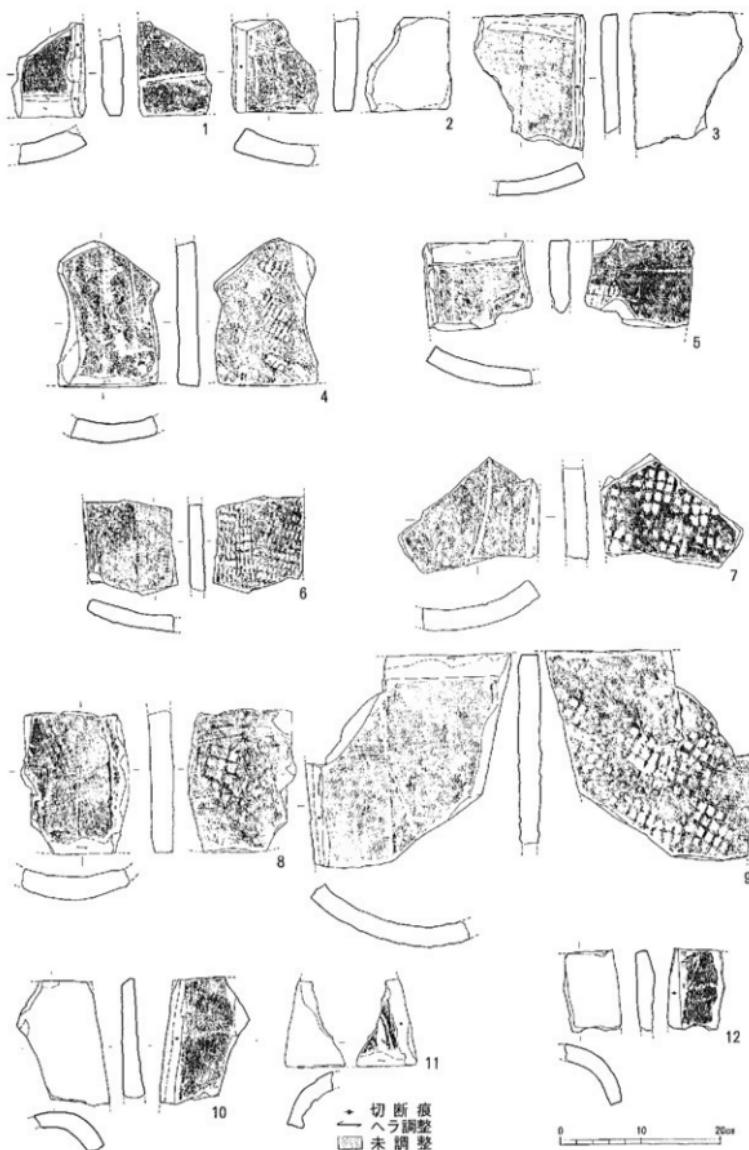
## 第2節 X区の調査について

### 1. 遺構分布について（第2図・第18図）

長者原X区の調査は表土を重機で剥ぎ取り、その後、人力で遺構検出作業を実施した。64号（66号）建物跡周辺を除いて、長者原X区が長者原地区の他の調査区と異なるところは、表土以下に存在するⅡ層・Ⅲ層が存在しない点である。長者原X区は畠地のために段々に削平され（第2図）、表土直下にⅣ層以下の層が存在する。



第14図 59号建物跡出土遺物実測図



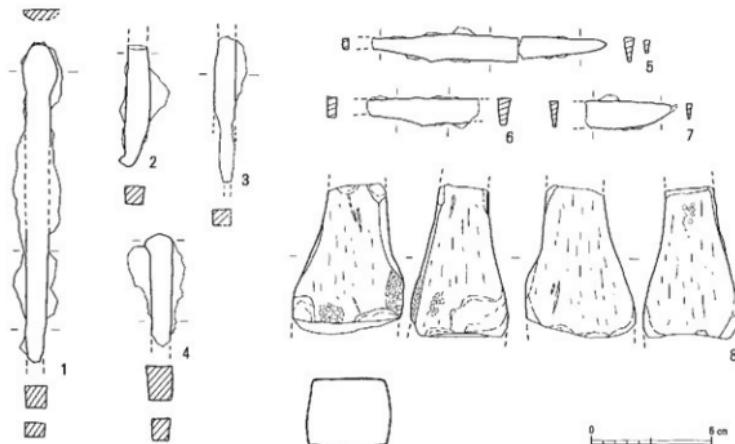
第15図 59号建物跡出土瓦実測図

第18図は表土直下層で検出した遺構配置図である。検出したのは、60号～63号掘立柱建物跡・64号礎石建物跡・4号溝跡である。60号・61号掘立柱建物跡の主軸方向は座標の南北であり、その軸よりやや北西方向に振れた主軸をもつのが63号掘立柱建物跡・64号(66号)礎石建物跡である。この63号掘立柱建物跡の主軸方向に直交する主軸をもつのが62号掘立柱建物跡である。また、4号溝跡は62号掘立柱建物跡の主軸方向と同じ方向に伸びており、西側部分が削平されているが、建物跡群を区画していると思われる。

62号掘立柱建物跡の北側は宅地に伴う削平が行われており、遺構が残存していない。また、63号掘立柱建物跡の西側は三段の段々畑になっている。61号掘立柱建物跡は畑の上から一段目と二段目とに、60号掘立柱建物跡は畑の上から二段目と三段目とに跨った状態で検出した。このような検出状況であるので、60号・61号・63号掘立柱建物跡の一部が確認できていない。63号建物跡の北西部の掘方は削平され残存していない。また、60号・61号建物跡は段々畠境界の排水溝で削平された掘方以外は辛うじて確認できた。



第16図 59号建物跡出土軒丸瓦実測図



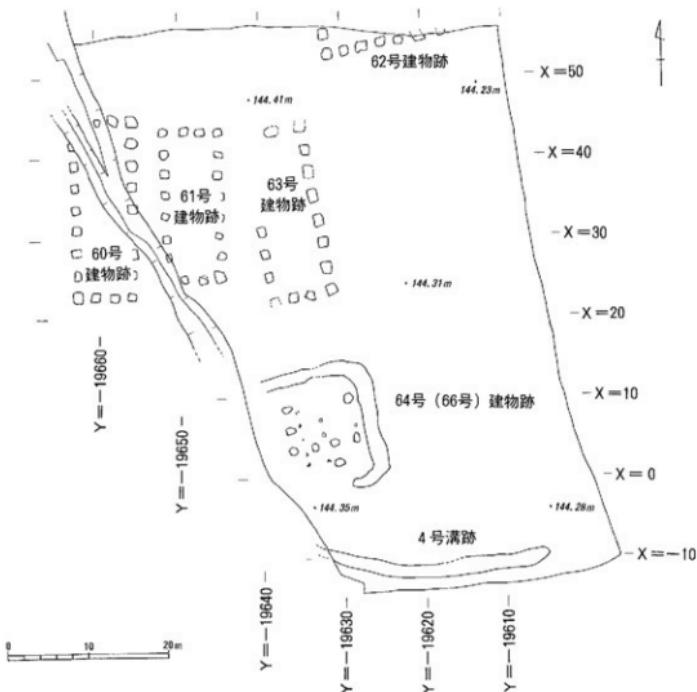
第17図 59号建物跡出土遺物実測図

62号～64号（66号）建物跡や4号溝跡が立地する長者原X区の一段目の畠の地形については、表土直下層の標高が143m前後のほぼ平らであり、等高線が引けない。

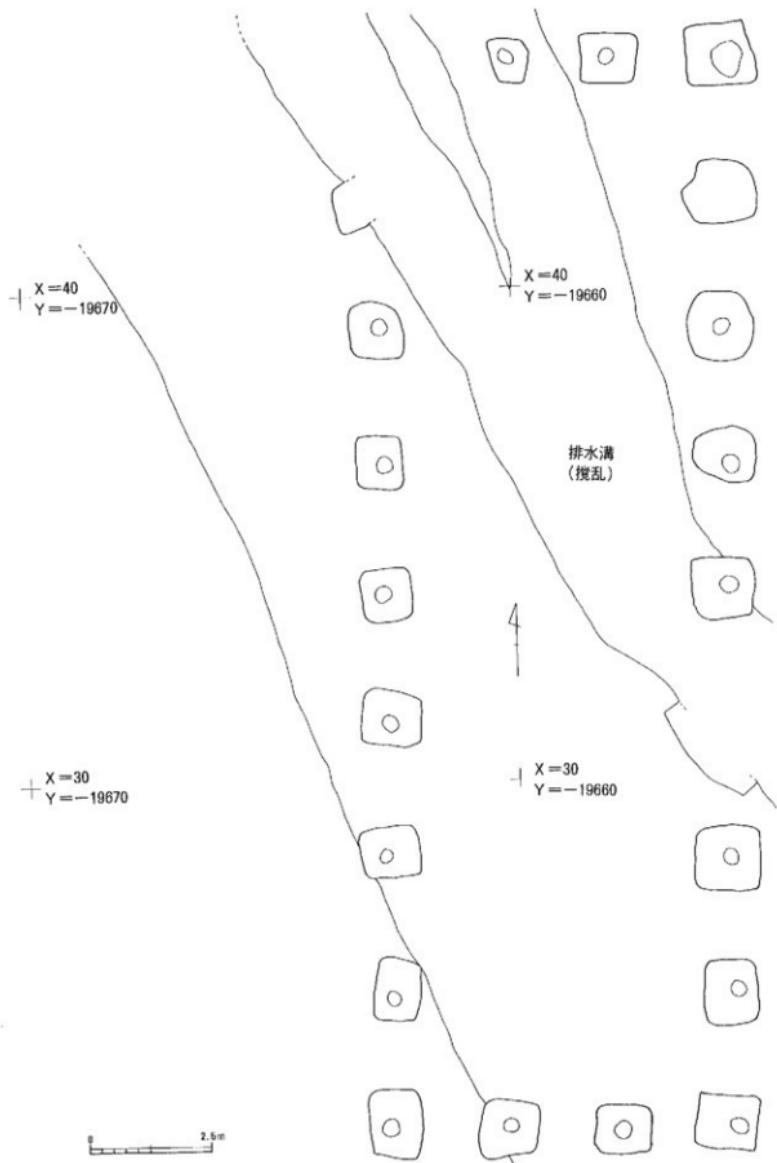
## 2. 60号建物跡の調査（第19図）

調査は掘方を検出し、掘方内を検出面から約5cm掘り下げた状態で終了している。60号建物跡は上記のように検出面が他の建物跡より低いので、掘方の下部付近を検出しているものと考えられる。

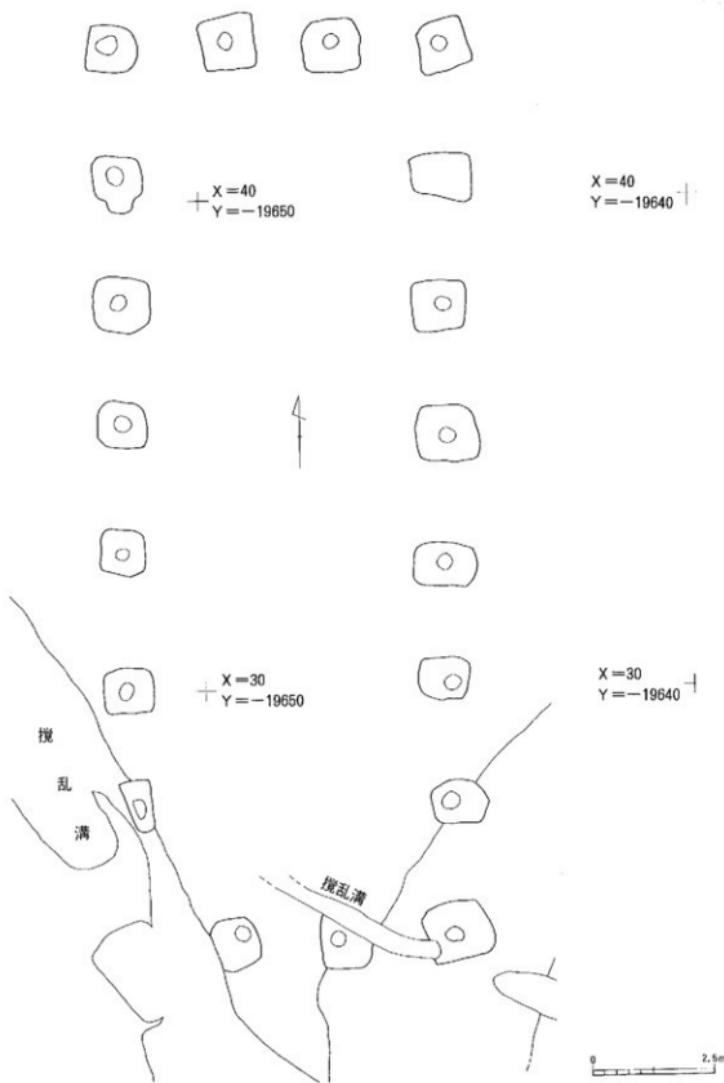
60号建物跡は3間8間の掘立柱建物跡である。建物跡の主軸方向は座標南北である。2基の掘方が排水溝の攪乱によって確認できず、北側梁行は2間分を確認した。3基の掘方が排水溝内にある。これらの3基以外の掘方は、方形・長方形の平面形を呈する（約80～110cm×約75～110cm）。確認できた柱痕跡は直径約20～30cmを測る。柱間は桁行が約210cm（7尺）の等間、梁行が約180cm（6尺）の等間となる一案が考えられる。



第18図 長者原X区遺構配置図



第19図 60号建物跡平面実測図

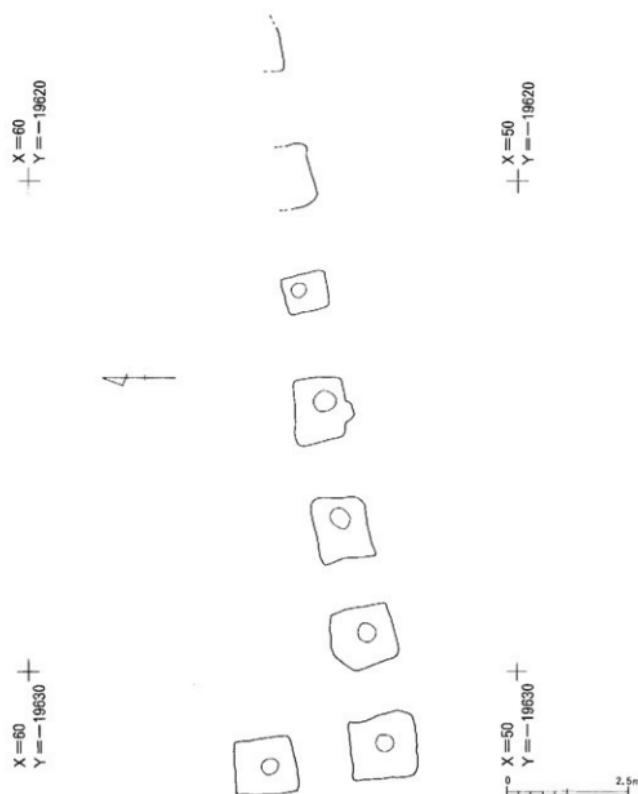


第20図 61号建物跡平面実測図

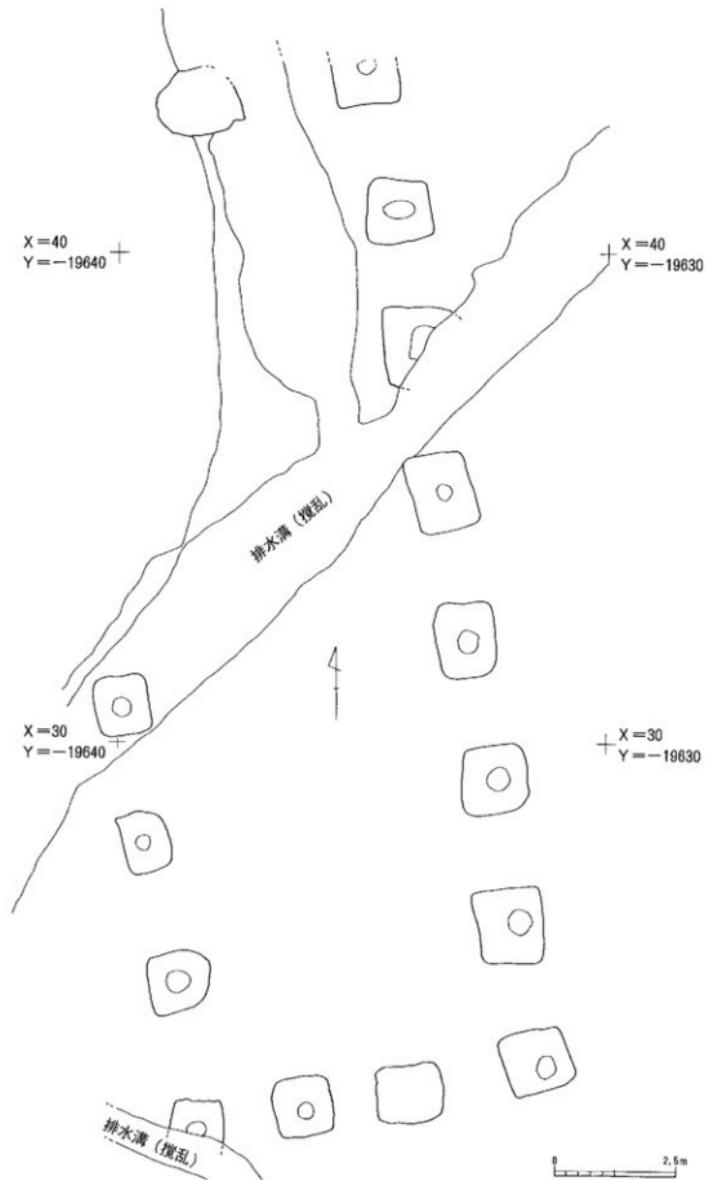
### 3. 61号建物跡の調査（第20図）

61号建物跡も60号建物跡と同様に、掘方の下部付近を検出しているものと考えられる。調査は掘方を検出し、掘方を検出面から約5cm掘り下げた状態で終了している。

61号建物跡は3間7間の掘立柱建物跡であり、建物跡の主軸方向は60号建物跡と同じ座標南北である。南西隅の掘方は擾乱溝により削平されている。また、3基の掘方の一部が擾乱溝で削平されており確認できなかつた。削平されていない掘方の平面形は方形・長方形を呈する（約70~95cm×約70~100cm）。確認できた柱痕跡の大きさは直径約20~35cmある。柱間は次の二案が考えられる。桁行が約210cm（7尺）の等間、梁行が約180cm（6尺）の等間である。



第21図 62号建物跡平面実測図

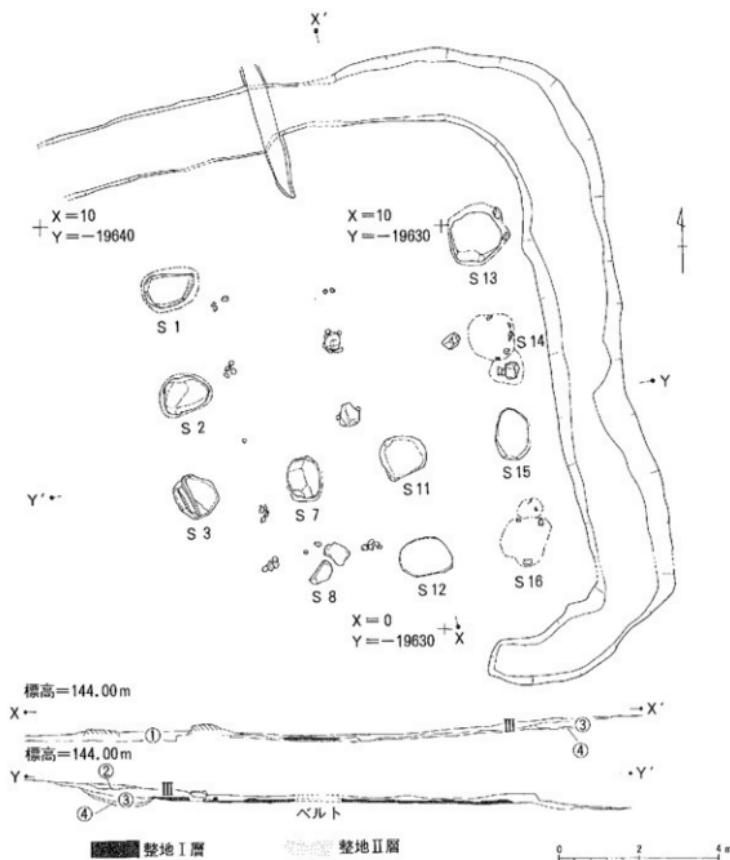


第22圖 63号建物跡平面実測図

#### 4. 6号建物跡の調査（第21図）

62号建物跡の北側は宅地のために削平してあり、検出できたのは桁行6間、梁行1間である。調査は、検出した掘方を検出面から約5cm掘り下げた状態で終了している。62号掘立柱建物跡は高い位置の段々畑の面で検出しているため、60号・61号掘立柱建物跡に比べると、残存部は多いと思われる。

桁行の西隅より5基目の掘方は他の掘方よりやや小さめで、長方形の平面形を呈する（約60×70cm）。これ以外の掘方の平面形は方形・長方形である（約90～110cm×約80～110cm）。確認できた柱痕跡の直径は約25～35cmを測る。柱間については、桁行・梁行とも約195cm（6.5尺）の等間であろう。



第23図 64号（66号）建物跡実測図

## 5. 63号建物跡の調査（第22図）

63号建物跡は北側梁行と西側桁行の一部の掘方が畠地の段により消滅している。また、4基の掘方の一部が排水溝により削平されている。調査は検出した掘方を検出面から約5cm掘り下げた状態で終了している。

63号掘立柱建物跡は62号掘立柱建物跡と同様に、60号・61号掘立柱建物跡よりは残存部が多いと思われる。

63号建物跡は3間7間の掘立柱建物跡である。掘方の平面形は方形・長方形を呈する（約100～135cm×約80～110cm）。確認できた柱痕跡の直径は約25～40cmを測る。柱間は梁行が約195cm（6.5尺）の等間、桁行は約240cm（8尺）の等間となる一案が考えられる。

## 6. 64号（66号）建物跡の調査

### （1）遺構について（第23・24図）

64号建物跡は長者原X区西側に位置する3間3間の総柱礎石建物跡で、Ⅲ層直下に整地層が確認でき、その整地層上面で礎石を確認した。礎石については北西端部より南側に番号を付けている。礎石のS4、S5 S6、S9、S10、S14、S16は後世の耕作等で抜き取られており残存しない。S14、S16については礎石の据え付けの掘り込みと根固めの礎が確認できた。残存する礎石については番号を付して図示した。

S1は花崗岩で上面は水平に加工してある。S2は硬質凝灰岩で、自然の石をそのまま使用しており、加工の痕跡は見られない。S3は硬質凝灰岩で、上面全体にノミによる加工痕が確認できる。一部後世の掘削により壊されているが、現位置を保っている。また上面の一部に、火災によるものと思われる赤変がみられる。S7は硬質凝灰岩で、上面にノミによる加工痕が残り、一部に赤変がみられる。S8は花崗岩で、後世の掘削で破壊されており、現位置は保っていないが根固めの礎が確認できた。S13は花崗岩で、上面は平らであるが、僅かに北側に傾斜する。S15は花崗岩で、上面は平らであるが、僅かに南側に傾斜する。東側の一部は、土層観察のベルトにかかるため図示していない。

S1、S2、S7、S13については、整地層上面で据え付けの掘り込み（一点破線で示す）を確認したが礎石の形状とほぼ一致しており、意図的に礎石の形にあわせて掘り込んだと考えられる。

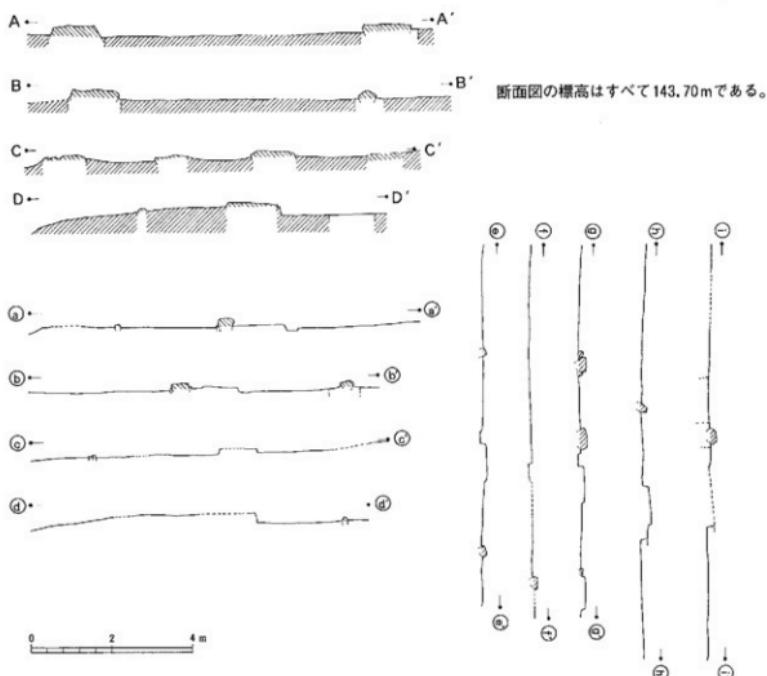
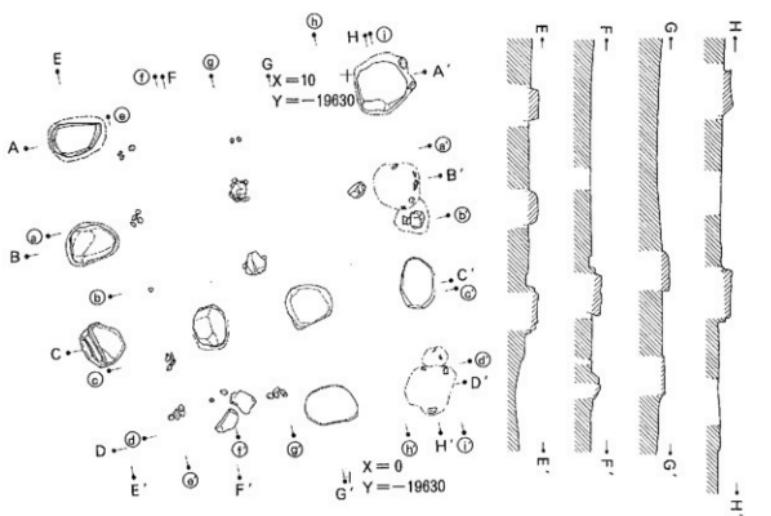
また、建物跡に伴う周溝が確認できた。周溝は南側で切れており、この建物跡の入口（陸橋部）であろうと思われる。西側及び南西側は、後世の削平による傾斜がみられ、周溝は確認できなかつたが、おそらく建物跡を巡るものと考えられる。

礎石の断面（第24図）を見てみると、その上面レベルは僅かな差はあるものの、ほぼ揃っている。

### 66号建物跡（第23・24図）

64号建物跡と重複し、主軸も一致する。64号建物跡構築時に壊されたと思われ、小型の礎石が3個残存するのみである。しかし礎石の根固め石が軸上に残存しており、建物跡を復元すると、3間4間の礎石建物跡になるものと思われる。また礎石据え付けの掘り込みの切り合い関係をみても、66号建物跡が64号建物跡に先行することがわかる。

### 層序について（第23図）



第24図 64号(66号)建物跡実測図

64号建物跡の土層については、2箇所で実測した。その実測地点は第23図に示したX-X'・Y-Y'である。

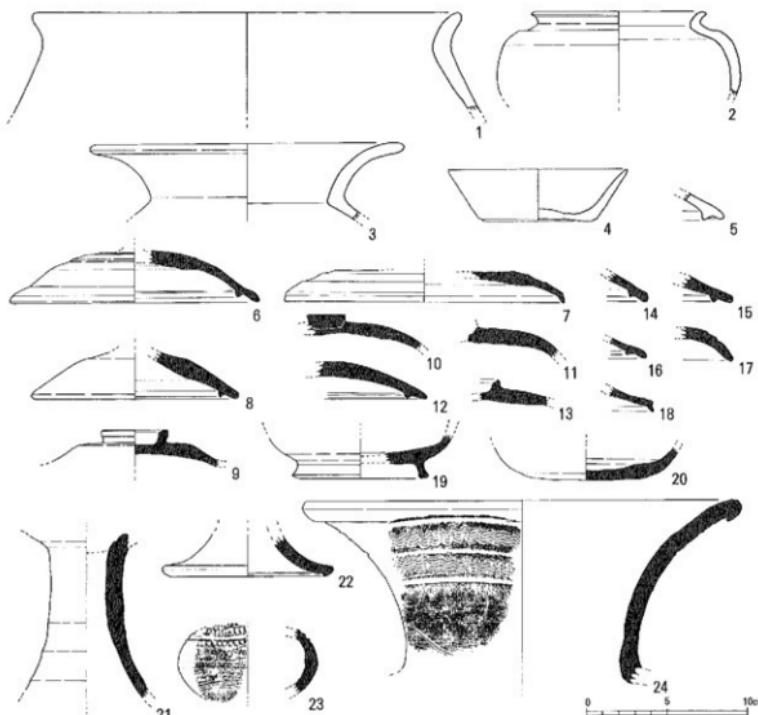
- ①層 64号、66号の南西側にある擾乱土。黄褐色土で粘性が強い。
- ②層 黒っぽい茶褐色土。遺物の細片、炭化物を含む。
- ③層 赤っぽい茶褐色土。溝部は比較的遺物を含み、白色砂粒を多量に含む。
- ④層 黄褐色土。溝の覆土で、黄褐色土塊を含み、ざらざらしている。
- 整地I層 64号建物跡の整地層。暗い茶褐色土。
- 整地II層 64号建物跡の整地層。明るい茶褐色土。

## (2) 遺物について (第25~30図)

### 土器・須恵器 (第25図)

第25図は64号建物跡から出土した遺物である。

1は土器器の壺の頸部から口縁部にいたる破片である。頸部はゆるく、口縁部はゆるやかに短く開き、内外



第25図 64号建物跡出土遺物実測図

器面はナデ調整を施す。2は土師器の壺で、体部から口縁部にいたる破片である。肩部が張り、頸部から口縁部は大きく外反して開き、内外器面ともナデ調整を施す。3は土師器の壺で、肩部から口縁部にいたる破片である。頸部はしまり、口縁部は大きく外反して開く。内外器面はナデ調整を施す。4は土師器の壺で、底部から口縁部にいたる破片である。底部はヘラ切りで、体部はほぼ直線的に開き、口縁部にいたる。底部中央部は厚く、内外器面は横ナデ調整を施す。5は土師器の壺蓋である。口縁部よりやや内側に断面が三角形のかえりをもつ。外器面には赤色顔料を塗布する。6~18は須恵器の壺蓋である。6はつまみ部が欠損しており、口縁部は膨らみ、かえりは口縁部より上位に位置する。内外器面とも横ナデ調整を施す。7はかえりを持たない壺蓋で、口唇部は内側に屈曲する。外面上位はヘラ削り、下位及び内器面は横ナデ調整を施す。8は肉厚の体部を持ち、かえりの断面は略三角形を呈する。内外器面とも横ナデ調整を施す。9は輪状のつまみで、肩が張る。内外器面とも横ナデ調整を施す。10はボタン状のつまみで、口縁部及びかえりは欠損する。内外器面とも横ナデ調整を施す。12はつまみ部が欠損し、体部はゆるやかにのび、口唇部は丸みをおび、かえりの接合部分が僅かに内側にくぼむ。内外器面とも横ナデ調整を施す。13は輪状つまみを持つ壺蓋で、内外器面とも横ナデ調整を施す。14~18は口縁部の小片で、調整はすべて横ナデである。14の口唇部は三角形を呈し、15・16は丸みをおびる。17・18はかえりを持たず、18は口縁部が屈曲する。19は須恵器の高台付壺である。高台部から体部にかけては、ゆるやかに立ち上がる。高台はやや外に開き、その断面は台形を呈する。内外器面とも横ナデ調整を施す。20は須恵器の壺片で、底部から体部にかけて残存する。内外器面ともナデによる調整を施す。21は須恵器の高壺の脚部で、壺部との接合面で剥離している。外器面は横ナデ、内器面は斜め方向のナデ調整を施す。22は須恵器の高壺の脚片で、脚端部は水平に広がり、先端部は内側にやや屈曲する。内外器面とも横ナデ調整を施す。23は須恵器の龜の体部片である。体部の上位に一条の沈線と、その上下に刺突文がめぐる。外器面は粗い横ナデ、内器面はナデ調整を施す。24は須恵器の大甕の頭部から口縁部にいたる破片である。口縁部は大きく開き、口唇部は外に大きく屈曲する。口縁部外器面上位には二段に櫛描波状文を施す。内外器面とも横ナデ調整を施す。

#### 平瓦（第26図）

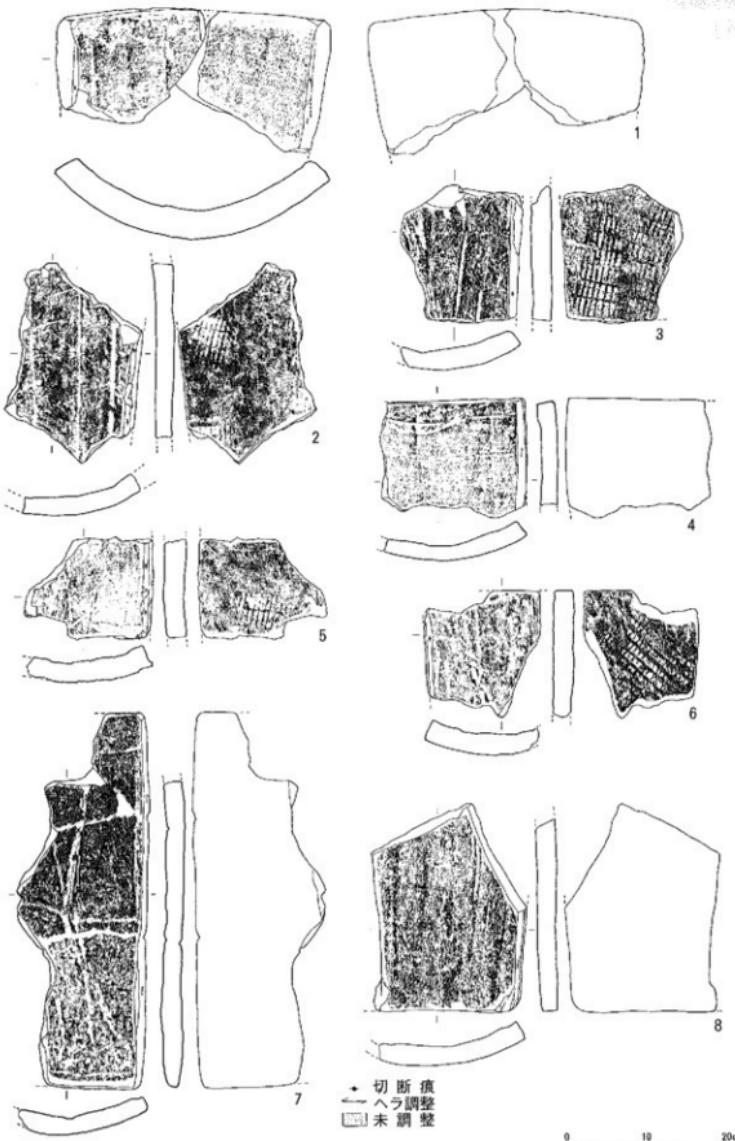
第26図は64号建物跡から出土した平瓦の実測図である。

1は大型の瓦で、凹面は布目圧痕及び模骨痕が観察でき、広端部は布目圧痕をナデにより消している。凸面は磨耗により、タタキの形状は不明であるが、一部にヘラナデが観察できる。側面部は一部に切断痕と、分割後のヘラナデが観察でき、未調整面も残る。2~5は凹面に布目圧痕と模骨痕が観察でき、3・4・5には紐状圧痕が残る。2・3・5の凸面は長方形の格子目タタキが観察でき、4は磨耗のためタタキは観察できない。また、2・3・5の側面部は、切断痕と折り取り後の未調整面が観察できる。4の側面部はヘラナデを施す。6の凹面は布目圧痕、模骨痕、紐状圧痕が観察できる。凸面は小型の正方形格子目タタキであるが、一部に布目圧痕も残る。7・8は磨耗がひどく、布目圧痕と紐状圧痕、模骨痕がわずかに観察できる。側面部はヘラナデ調整を施している。

#### 丸瓦（第27図）

第27図は64号建物跡から出土した丸瓦の実測図である。

1は下端部の瓦片で、凸面は縦横方向のナデ調整を施し、凹面には布目圧痕と紐状圧痕が観察でき、側面部には切断の目安の突起痕を持ち、先端部はヘラによるナデ調整が見られる。側面部は鋭い刃物で半分切断し、折り取っている。折り取った面は未調整である。2の凸面は縦方向のヘラナデ調整を施している。凹面は布目圧痕と、一部に指頭による押圧が観察できる。側面はヘラナデの調整を施す。胎土・色調が軒丸瓦の瓦当（第28図1）と同じことから、軒丸瓦の可能性が高い。3の凸面はナデ調整、凹面は布目圧痕と突起痕が観察できる。側面は切断痕があり、折り取った後はヘラナデ調整を施す。4は磨耗がひどく、凹凸面と



第26図 64号建物跡出土瓦実測図

も調整や圧痕は観察できないが、一部に突起痕が残る。側面は切断痕とヘラナデが観察できる。5の凸面はヘラナデ調整で、凹面にはわずかに布目圧痕が観察できる。側面は二段の切断痕をもつ。

#### 軒丸瓦（第28図）

1は軒丸瓦の瓦当部で、64号建物跡に伴う周溝の東側、底部よりやや浮いた位置で、表面を下にした状態で出土した。瓦当の文様は単介八葉蓮華文で、中房には中心に1個、周囲に6個計7個の蓮子、周囲の8葉の花弁は深い反りを持っている。中房は高く盛り上がり、全体が非常に厚い。半截した丸瓦に瓦当を接合する接法で製作されており、上位半分は丸瓦の先端部が周縁をなし、下位半分は周縁を持たない特殊な形態である。表裏面ともナデによる丁寧な調整が施されている。

2から4は軒丸瓦の丸瓦の先端部の破片である。凹面には数条の刻み目が彫り込まれており、一部は交差する。先端部及び凸面はナデによる調整が施される。2には接合のための補充の粘土が付着している。

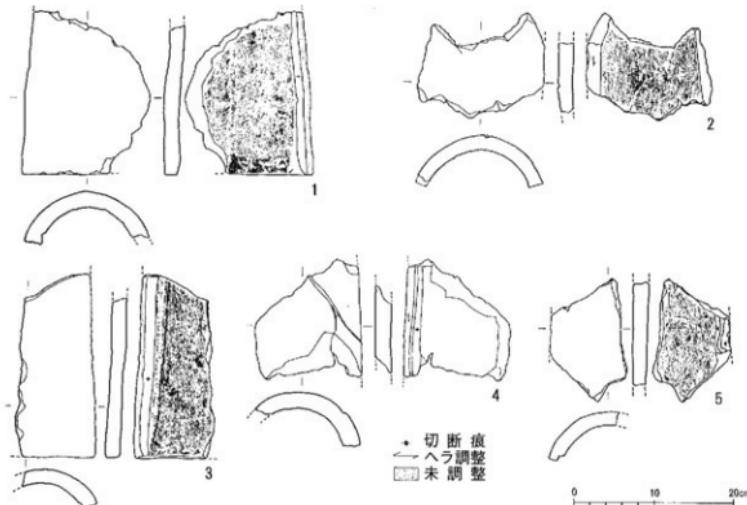
#### 瓦二次加工品（第29図）

第29図は瓦二次加工品で、平瓦を打ち欠き円形にしたものである。64号建物跡から出土した瓦二次加工品は1・6・7であるが、ここでは他の遺構及び調査区から出土したものも併せて掲載した。

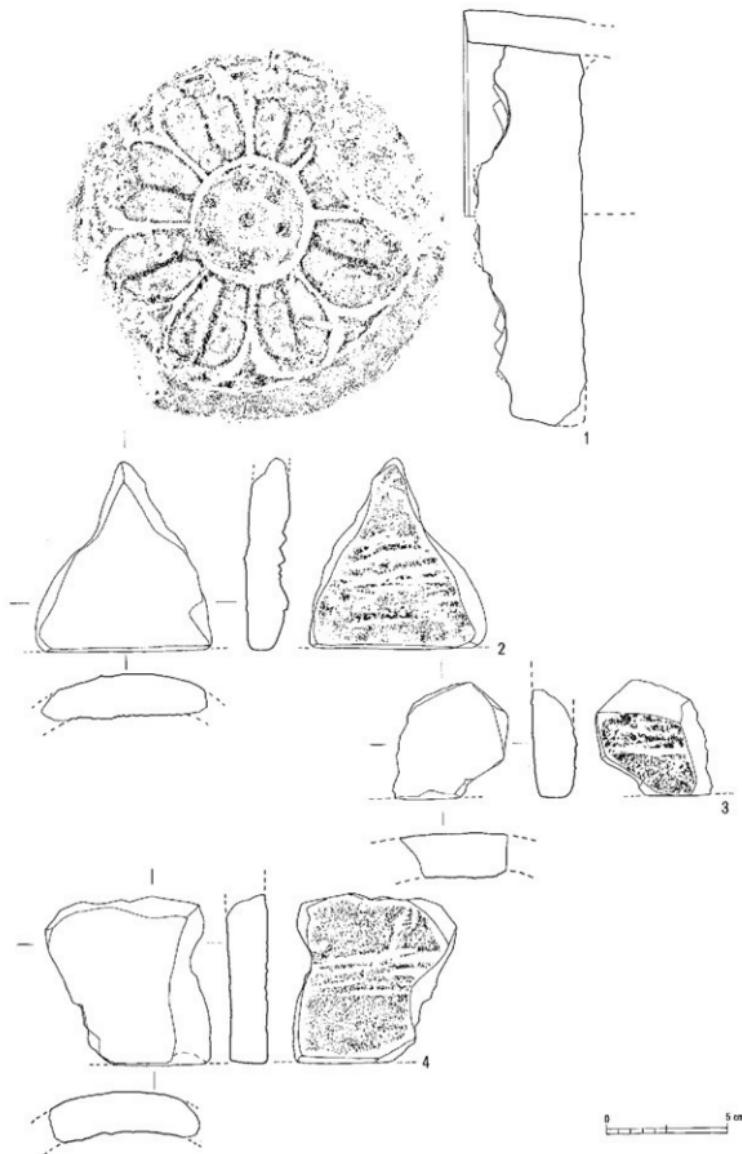
1・2は径が6~7.6cmになる大形の瓦二次加工品である。1は64号建物跡の攪乱部分で出土し、上及び下端部を加工している。2は59号建物跡墨色土層より出土し、側面部を残し加工している。3~8は径が5cm程の小形品で、3~6は円形に加工しており、7は凸面を方形に加工している。8は両面とも六角形に見え、未製品の可能性もある。3は59号建物跡の周溝、4は長者原Ⅲ区整地面、5は池跡28トレンチ、6は64号建物跡Ⅲ層、7は64号建物跡周溝、8は長者原Ⅲ区Ⅲ層より出土した。

4・7の色調は灰色で硬い須恵質の瓦を利用しているため、加工痕が明瞭に残っているが、これら以外は軟らかい土師質の瓦を利用しているため、磨耗が目立つ。細部については観察表に記載した。

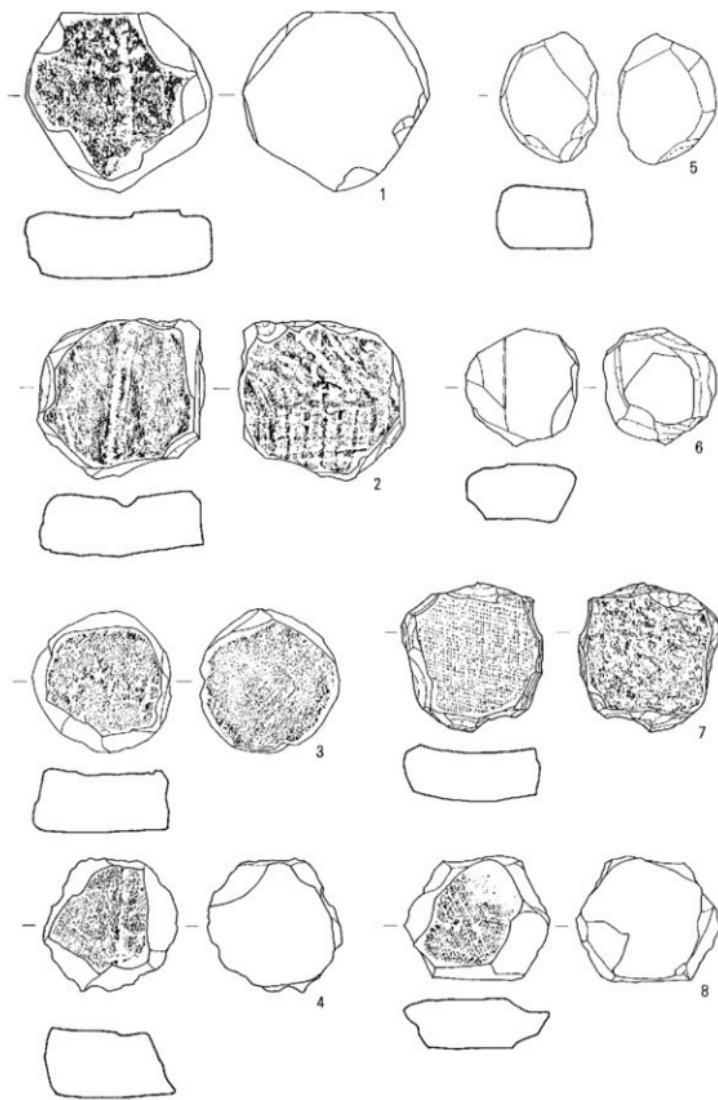
瓦二次加工品の用途は現在の段階では不明である。



第27図 64号建物跡出土瓦実測図



第28図 64号建物跡出土軒丸瓦実測図



第29図 瓦二次加工品実測図

### 鉄製品（第30図）

2は長者原X区から出土した鉄製品であるが、64号建物跡出土と合わせて記載した。

1は整地層から出土した鉄鎌である。刃部は円弧をなし、柄は直線的で先端部は内側に曲がる。柄部の断面は長方形を呈する。2は長者原X区から出土した刀子である。刃部の先端部と基部の一部を欠損する。刃部の断面形は、刃先部の磨耗で細長い逆台形を呈する。3～5は鉄釘である。3は頭部を欠損しており、断面は長方形で、やや曲がり、ねじれが見られる。4・5は頭部及び先端部を欠損する体部片である。その断面は、共に方形に近い台形を呈する。

### 7. 4号溝跡の調査について

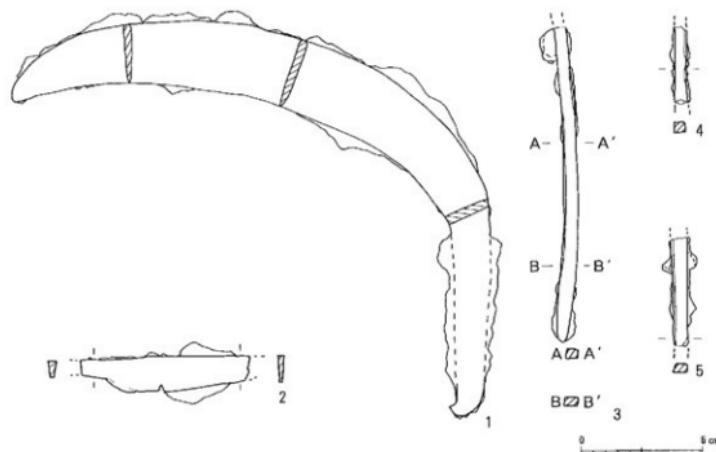
#### （1）遺構について（第31図）

長者原X区南端に位置し、ゆるやかに弧をえがきながら西に延びる溝である。幅は140～210cmで、底面は部分的に段を持つ。その断面は2か所で観察した。①層は暗褐色土、②層は暗黄褐色土である。

遺構確認面は東から西に傾斜しており、東側の方が残存度がよく、西側にいくにしたがって浅くなっている。これは後世の耕作等で旧地表面が削平されたためと考えられる。さらに畑の段落ち等で、西側の延長部分は残存しなかった。

この溝跡は62・63号建物跡に伴う区画溝と考えられ、この建物群の南側正面にあたる部分（4号溝東端部）で途切れている。長者原X区の東側は、本調査が実施されていないため、この溝がどう続くかは不明であるが、おそらくこの建物群の入口にあたる陸橋部となる可能性が高い。

さらに、溝の内側に2列に並ぶ直径約10cmの杭列跡が確認された。杭列の幅は約1m75cmで、間隔は70～75cmである。この杭列も西に行くにしたがって、残存状況が悪くなっている。この杭列は、4号溝及び62・63号建物跡に伴う塁的施設であろうと推定される。



第30図 64号建物跡出土鉄製品実測図

## (2) 遺物について（第31図）

4号溝からの遺物の出土は少なかったが、凶化に耐えうる須恵器片3点と瓦片1点を掲載した。1は覆土から出土した壺の蓋片である。つまみ部は欠損しており、肩部で屈曲し口縁部にいたる。器面上位はヘラケズリ調整、他は横ナデ調整を施す。2は須恵器の壺身である。底部は丸く、体部で屈曲し口縁部にいたる。内面底部にはヘラ記号を付す。底部はヘラ切り後ナデ、他は横ナデ調整を施す。3は須恵器の大甕の体部片である。外器面は平行タタキ、内器面は同心円文の当て具痕を持つ。4は平瓦片で、凹面は布目压痕が残り、模骨痕も観察できる。凸面は小型の格子目タタキが観察できる。側面には切断痕が残り、折り取り後はヘラナデ調整を施す。

## 8. 中世の調査

### (1) 遺構・遺物について（第32図・第33図・第34図）

長者原X区の中世の遺構としては3号溝跡、6号～8号土坑がある。

3号溝跡は長者原X区の南端近くに4号溝跡と並行するように存在する。西側へ行くにつれ後世の削平が著しいが、西端部はさらに伸びると考えられる。確認できる全長は20.4m、幅は0.8～1.6mである。覆土は黒褐色土のみである。3号溝跡の東端部は4号溝跡と一部重なっているが、3号溝跡のA-A'断面図（第33図）にあるように、破線で示した深い4号溝跡を浅い3号溝跡が切っている。

第34図1・2は3号溝跡より出土した遺物である。1は青磁雷文帯碗で、内器面は無文、外器面には蓮弁文と雷文を二条の沈線で区画した文様の配置で、口縁部は直口している。2は瓦質土器のすり鉢で、条線はまず歯の間隔が小さい二種の櫛で、そのあと逆方向へ間隔が大きい櫛で条線を入れている。

6号土坑は長者原X区の南東隅に位置する不整な長梢円形の遺構（長軸約6.2m、短軸約3.4m）で、後世の削平や擾乱を受けているが、断面を見ると深さ16cmほど平坦に掘りこんでいる。覆土は暗褐色の土で青磁などが出土した。4は6号土坑より出土した青磁碗の底部で、見込みは平坦面を広めにとり、陽圧線とスタンプによる菊の文様を施している。高台は断面四角形で、疊付と高台内の一帯は釉がはぎ取られている。

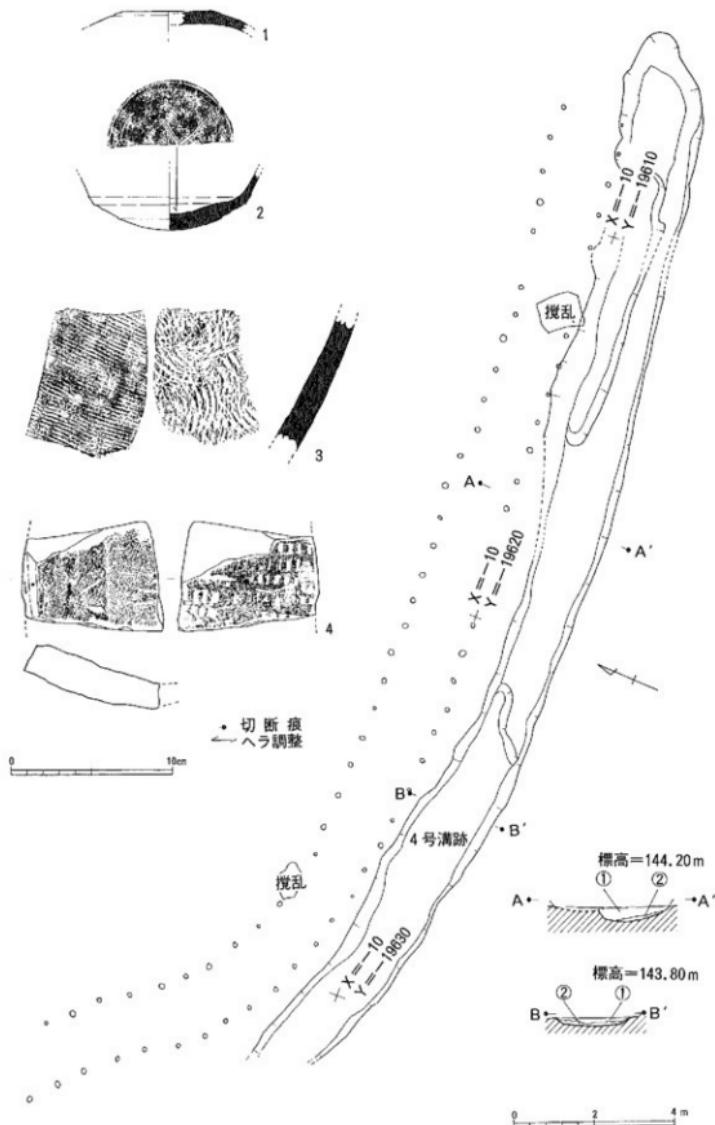
7号土坑も長者原X区の南東隅にあり、6号土坑に隣接している。遺構は西端が2.5m×1.2mの範囲で検出したが、東側は道路による擾乱を受けている。深さは20～40cmで、東端には長梢円形、南側には円形の掘り込みがある。3は7号土坑より出土した青磁碗底部で、高台は断面が台形になる。体部へは急な角度で立ち上がる器形と見られる。見込みと高台内疊付までは無釉である。

8号土坑は長者原X区の中央西側にあり、64号建物跡の周溝北側部分と重なっている。長さ約4m、幅約2m、深さ18cmほどの隅丸方形の土坑で、北側が高い地形に沿って傾斜している。覆土は黒褐色土で焼け土、炭化物や遺物（鞠智城時代の瓦、中世の青磁・瓦器）、20cm大の凝灰岩などを含んでいる。8号土坑から出土した瓦器を第34図5に図示した。火舎の底部付近の資料で、突帯を一条めぐらす。内面にはスヌが多く付着している。

## 第3節 池跡の調査について

### 1. 遺構について

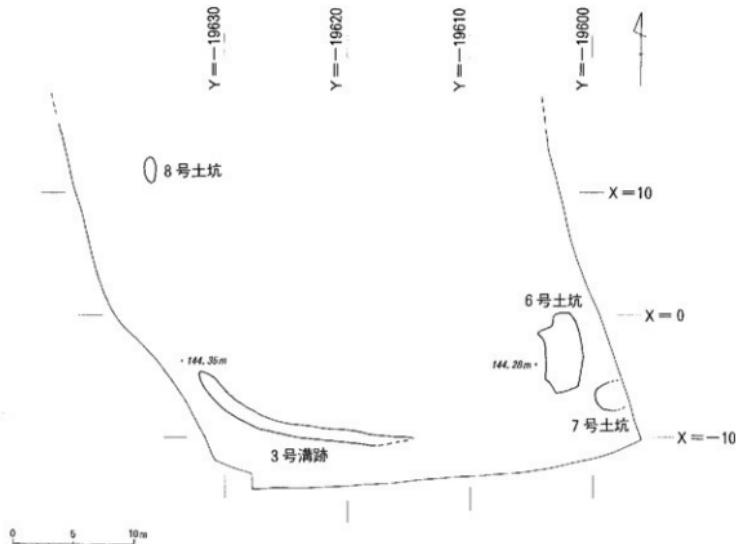
#### (1) 確認調査について（第1図・第3図・第35図）



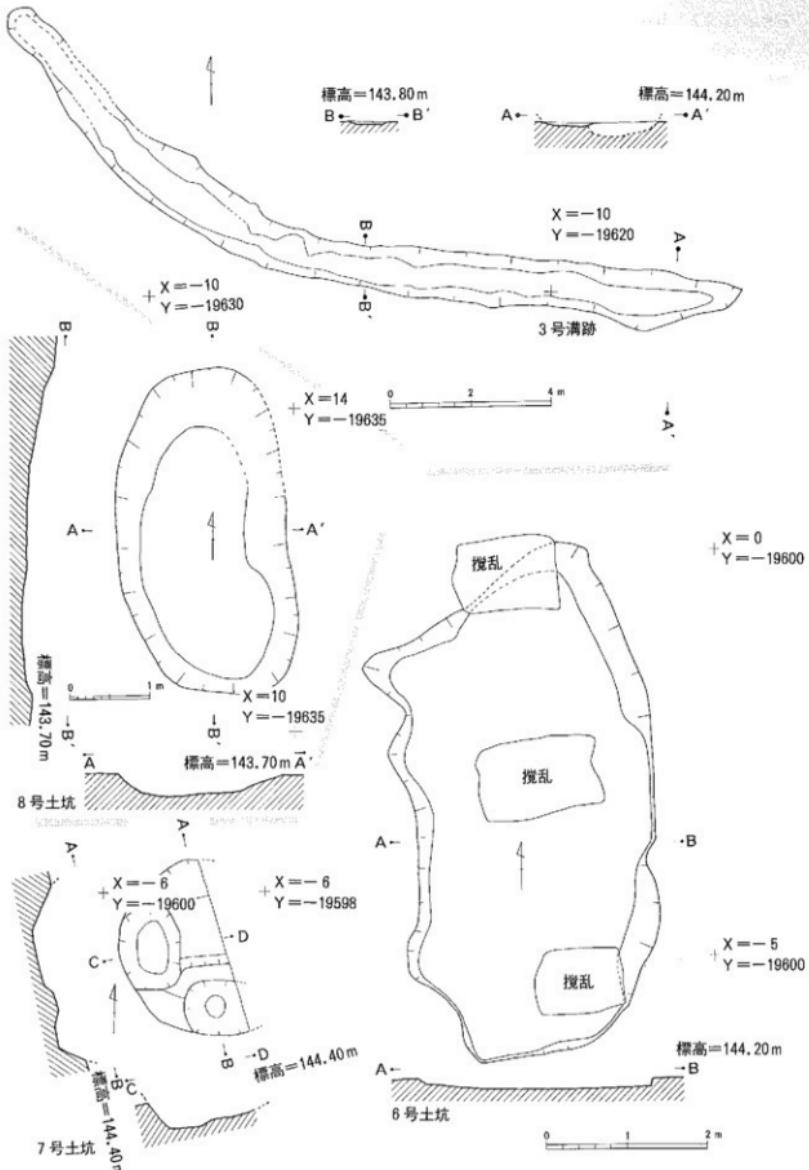
第31図 4号溝跡・出土遺物実測図

長者原地区の遺構保存のために、遺構の上に盛り土をする造成工事を実施することになった。この造成工事に伴って調整池を設置する必要性がでてきて、その候補地が長者原地区の谷部になった。そのために、谷部の確認調査を実施することになった。調査範囲の現状が段々の水田や畑地であるため、確認調査は第35図に示したように、水田や畑地の地形に沿ってトレンチを設定して実施した。第35図にはそのトレンチに1～32の番号を付して表示した。調査の最初は1トレンチで実施した。重機を使って、表土から約2～3m掘り下げた時点で、青灰色粘土層を確認した。次に2～4トレンチも同様に掘り下げ、青灰色粘土層を確認した。この時点で、粘土層に須恵器・土師器が含まれされることに気がつき、粘土層の成因が何であろうかとの疑問をもった。そこで、粘土層成因の調査を県水保全対策室・田北成樹氏と千代田工業株式会社・古澤二氏に依頼し、粘土層は水成層であるとの返答をいただいた。この青灰色粘土層が水成粘土であることや立地から、谷部には池跡が存在する可能性を考え、1～4トレンチを拡張して粘土層の広がりを確認することにした。その結果、粘土層が面的な広がりをもつことが判明した。第35図の1～4トレンチの部分の太線より西側が青灰色粘土層で、東側が地山の黄褐色土である。この両層の境が池跡の水成粘土堆積層と地山との境であると認識し、その後の調査では両層の境を探し、池跡の範囲を確定することに努めた。このようにして、5～23トレンチの調査を実施した。

第35図の5～23トレンチ内の太線は、青灰色粘土層と黄褐色土との境を示している。1～8・22・23トレンチでは、図に示したように小さく凹凸する境を確認できた。8・9トレンチの間、7・10トレンチの間に市町道があり、トレンチを設定できなかった。その部分の東側端部は、8・9トレンチで境を確認できたので破線のように推定した。西側端部は10・17トレンチで境を確認できなかつたため、両トレンチの間を7・21トレンチで確認した境を結んで破線のように考えた。1・23トレンチの間は重機の搬入・搬出や排土運搬のためにトレンチを設定しなかつたので、破線のように推定した。9トレンチより北側で東側端部の境を確



第32図 長者原X区中世遺構位置図



第33図 3号溝跡・6号～8号土坑実測図

認できたのは14トレンチのみである。15・16トレンチでは境を確認できなかつたので、これらの東側に境が存在すると考えられるが、未取得用地であるためトレンチを設定できなかつた。しかし、14~16トレンチの東側の地形が斜面になつてゐるので、14トレンチの境よりやや東側に入った所で、斜面の下部に沿つた状態で境が存在すると思われる。また、18~21トレンチで確認した西側端部の境は、18・21トレンチ部分で大きく湾曲している。北側端部については、20トレンチの端部よりさらに北側に伸びているが、その部分が未取得用地であるため確認できていない。現時点で確認した範囲と上記のように推定した範囲を合わせると、約5300m<sup>2</sup>の広さがある。この広さは池跡本来のものではなく、水成粘土が堆積した範囲である。

また、範囲の確認調査中に7トレンチの北端部付近の西側斜面に取水口跡を検出した。取水口跡は池跡の壁面に略台形の掘り込みがあり、その掘り込みより池跡に伸びた小さな溝跡がある。掘り込みと溝跡との内部、それらの周囲には濃緑色の粘土が堆積している。この取水口跡の西側には池跡の谷とは別の小規模の谷が存在する。おそらく、この谷に集まつた水を池跡に導くための施設であろう。池跡は谷の自然地形を有効的に利用しながら、一部を人工的に加工したものであると考えられる。

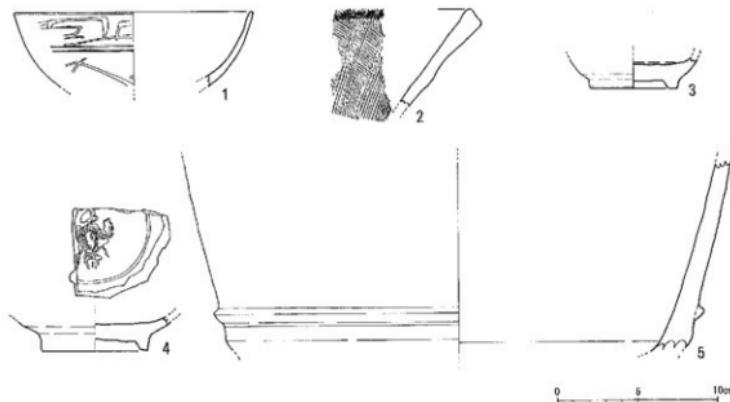
24~27・29~32トレンチは先述した池跡の南東方向の段々畑に設定した(第3図)。これらのトレンチでは地山の黄褐色土の上に攪乱された客土の茶褐色土があり、遺構・遺物は確認できなかつた。後世の地形の変更が著しい。

確認調査の結果、谷部には池跡が存在することが判明したので、造成工事に伴う調整池は池跡の今後の調査に影響がないような位置・工法で仮に建設することになった。

#### (2) 池跡内部の調査について(第35図)

池跡の頭部(2・3トレンチ部分)と尾部近く(20トレンチ部分)との比高差は約8mある。このような勾配のある池跡に貯水するには堰堤や同等の役割を果たす何らかの施設が必要である。調査に先立ち、専門調査員の先生方より池の構造を把握する必要があるとの指導を受けた。それで、池跡の底の状態を確認するために、28トレンチを設定した。

池跡内部の調査を実施したのは28トレンチのみで、他のトレンチは青灰色粘土層を確認した深さで掘り下げを終了した。第35図の右端には28トレンチの土層略図を載せた。池跡の調査が部分的であるので、今後調



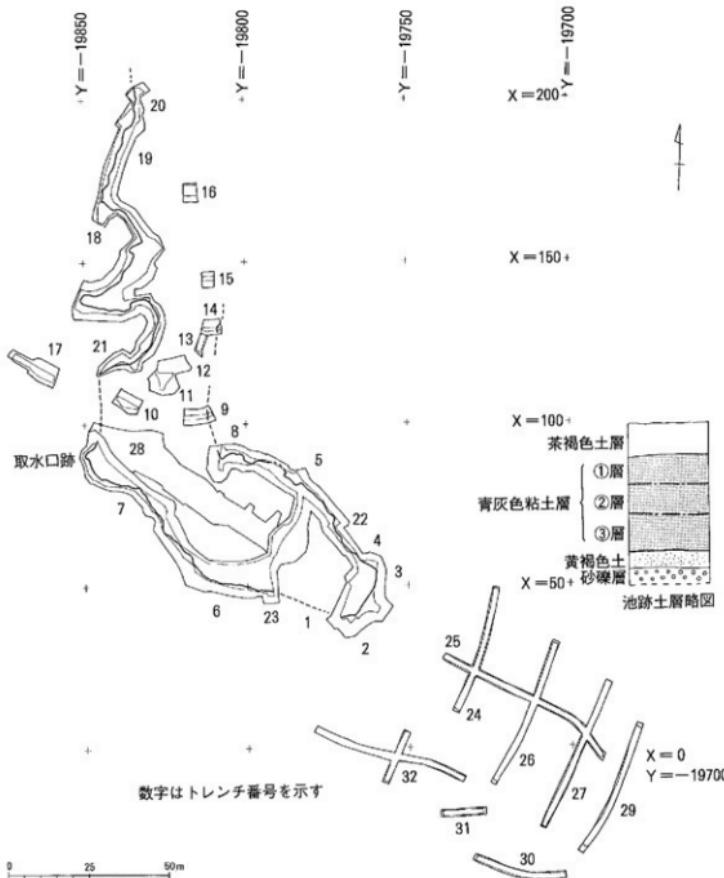
第34図 長者原X区中世遺構出土遺物実測図

査範囲が広がると、この土層略図を修正する可能性がある。

今回確認できた土層を上層から順々に述べる。茶褐色土層から掘り下げた砂礫層までの深さは約4~5mある。

茶褐色土層—粘土層の上面にある層であり、深さが約1~2mある。略図には図示していないが、この層の上面には耕作土がある。茶褐色土は客土であり、包含される遺物で最も新しいものが近世・近代のものである。

青灰色粘土層—厚さ約2~3mの水成層である。この層はの三つに細分でき、上から①層・②層・③層とした。遺物の殆どは③層から出土しており、後述する木簡・木製品などもこの層より出土している。①層・②層の出土遺物は少数である。①層・②層からは黒色土器Bが出土している。



第35図 谷部トレンチ配置図並びに池跡範囲図・池跡土層略図

黄褐色土層－この層は粘質で、池跡の底面である。部分的に白色が濃い箇所もある。この層には縄文・弥生時代の遺物が包含される。厚さは約20~50cmある。

砂礫層－この層は下部まで掘り下げていないので、厚さは不明である。この層にも縄文・弥生時代の遺物が包含される。砂礫層まで掘り下げると、常に水が湧き出る状態である。

上記のような土層堆積状況から考えると、谷部は縄文・弥生時代には低湿地のような環境であり、鞠智城跡が築造されると谷部は池としての機能をもつようになり、水成粘土が堆積したと考えられる。

調査は粘土層の堆積が厚く、調査中の湧水量が多く、遺物も多量に出土した。また、トレンチ壁の崩落の危険性があり調査を中断せざるを得なかつた。それで、予定していた調査期間を大幅に越してしまつた。このような状況であるので、トレンチ設定の当初の目的である池跡の構造を把握するまでは至っていない。

## 2. 遺物について（第36~40図）

第36図1~7は1トレンチ出土の遺物である。1は縄文晚期の浅鉢片で、波状口縁である。外器面には僅かに条痕が観察できる。2~6は縄文中期の深鉢の底部である。底面には回転台の圧痕とみられる凹凸が僅かに観察できる。7は壺の底部片で、体部は鋭く屈曲し立ち上がる。底部はヘラ切りで、器面は横ナデ調整を施す。外面には僅かに赤色顔料が観察できる。

8は2トレンチ出土の縄文中期の深鉢の底部片である。底面には回転台の圧痕とみられる凹凸が観察できる。

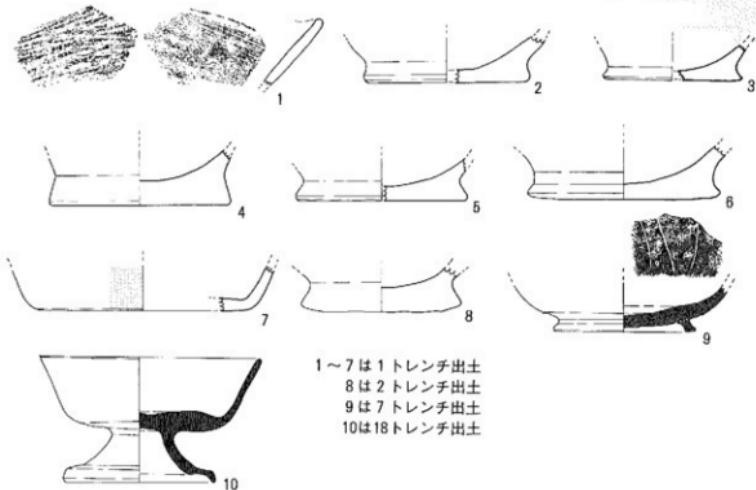
9は7トレンチ粘土層出土の須恵器の高台付壺である。高台は低く、外反しする。体部はゆるやかに立ち上がる。器面調整は丁寧な横ナデを施し、内面には3本の沈線が観察できる。

10は18トレンチ青灰色粘土層出土の須恵器の高壺である。全体に歪みが見られ、脚部は大きく開き、先端部は薄く渦曲する。壺部の底面は厚く、体部はわずかに外反して口縁部にいたる。内外器面とも横ナデ調整を施す。

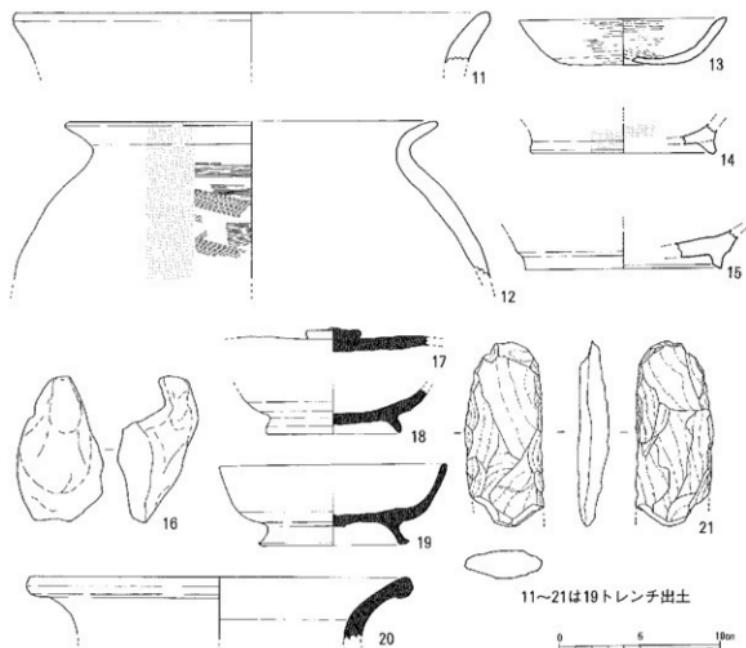
11~21は19トレンチ青灰色粘土層出土の遺物である。11・12は土師器の壺片である。11は口縁部片で、横ナデ調整を施す。12は土師器の壺の体部から口縁部にかけての破片で、口縁部は大きく開く。外器面はハケメ調整の後、赤色顔料を塗布する。13は黒色土器の壺である。器厚は底部が薄く、体部から口縁部にかけて厚くなる。14・15は土師器の高台付壺の高台部片である。高台は低く、15は高台の外側が尖る。16は壺の把手で先端部に反りを持つ。17は須恵器の壺蓋で、偏平な宝珠状のつまみを持ち、体部はほぼ水平にのび、外器面には自然釉が観察できる。18・19は須恵器の高台付壺である。18は高台が内湾し、先端部は尖る。19は高台が高く、大きく外反する。器面調整は横ナデを施す。21は打製石斧で、刃部は欠損する。20は須恵器の壺の口縁部片で、口唇部は丸みを帯びる。器面調整は丁寧な横ナデを施す。

第37図1~11は21トレンチ青灰色粘土層出土の遺物である。

1は土師器の壺の口縁部片である。体部中央部が厚く、口縁部にいくにしたがってうすくなり、口唇部は尖る。外器面には赤色顔料を塗布する。2は黒色土器の壺の口縁部片である。体部はゆるやかに内湾しながら口縁部にいたる。器面はヘラ磨研を施す。3は土師器の壺片である。平底で口縁がわずかに立ち上がる。底部及び外器面には赤色顔料を塗布する。4は土師器の壺の口縁部片である。口縁部は外反しながら開く。外器面には赤色顔料が残る。5~7は須恵器の壺の高台片である。5は高台先端部が外に屈曲し、6・7は外反し、先端部は尖る。8・9は須恵器の壺蓋片である。8の器形は偏平で口縁部は尖り、かえりの断面は三角形を呈する。9は体部からゆるやかにのび、口縁部で段を持つ。かえりの断面は三角形を呈する。10は須恵器の高台付壺の底部から体部にかけての破片である。高台は欠損し、体部でわずかに屈曲する。口縁部



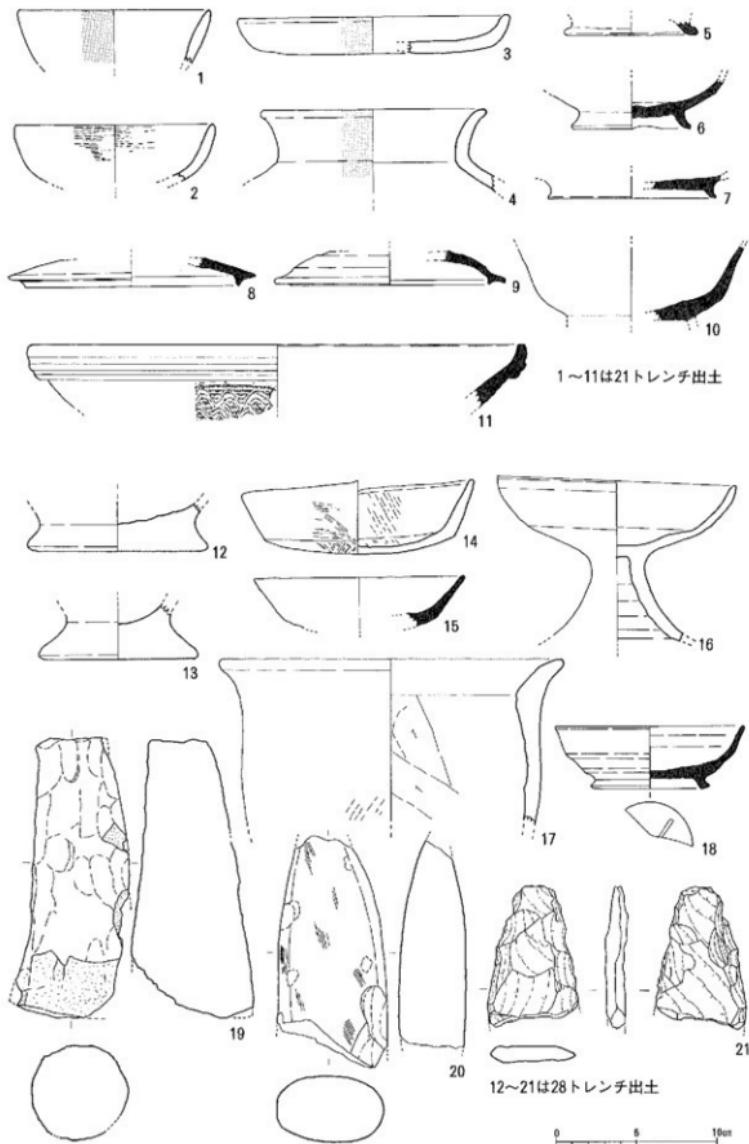
1～7は1トレンチ出土  
8は2トレンチ出土  
9は7トレンチ出土  
10は18トレンチ出土



11～21は19トレンチ出土

0 5 10cm

第36図 池跡出土遺物実測図



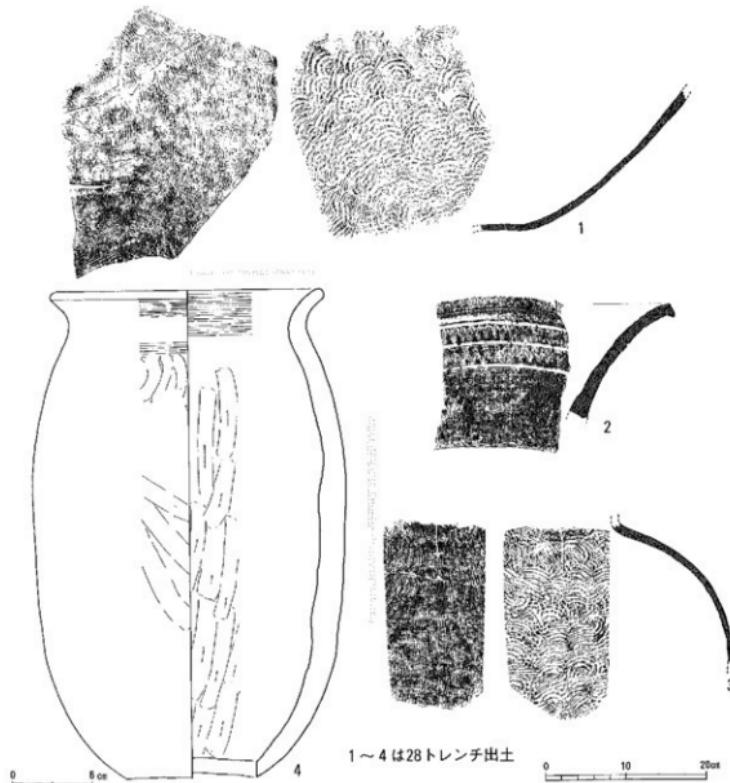
第37図 池跡出土遺物実測図

はやや外反する。内外器面は横ナデ調整を施すが、外器面は粗い。11は大甕の口縁部片である。口縁部は肥厚し、2本の沈線がめぐる。肥厚部の下位には樹描波状文を描く。

12~21は28トレンチ粘土層出土の遺物である。

12・13は縄文中期の深鉢の底部片である。平底で回転台の痕跡か、僅かに凹凸が観察できる。

14は黒色土器の坏で、ほぼ完形品である。底部は丸みを帯びており、体部は底部から屈曲して直線的に開く。器面は内外ともヘラ磨研を施し、底部は多方向のヘラ調整を施す。黒色部分が部分的に残存する。15は須恵器の坏で、底部から体部にかけて残存する。体部は直線的に開き、口唇部はうすくなる。器面は粗く、剥離が目立つ。16は土師器の高坏で、脚部はゆるやかに開き、坏部は内渉して口縁部にいたる。脚部外面以外はロクロ成形の凹凸が残る。17は土師器の甕片である。体部の膨らみは弱く、頭部の締まりではなく、口縁部にいたる。体部の外器面にはタタキが残り、口縁部は横ナデ、内器面は斜め方向のヘラ削りを施す。外器面には部分的に煤が、内器面には一部有機物が付着する。18は須恵器の高台付坏で、高台は低く外に開く。体部



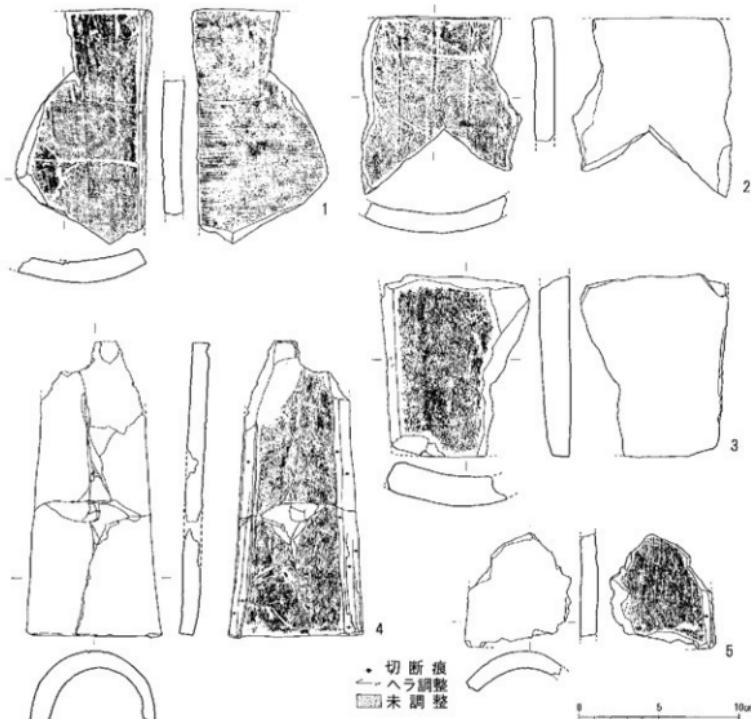
第38図 池跡出土遺物実測図

の一部に自然釉が観察でき、高台内部にはヘラ記号を刻む。19は土製の支脚で反りを持ち、その断面はほぼ円形である。表面の調整は粗く、指頭によるナデを施し、二次的に火を受けて赤変し、部分的に煤が付着する。20は蛇紋岩製の磨製石斧で、刃部は欠損する。断面は梢円形で、部分的に使用中にできたと思われる剥離が見られる。21は安山岩製の打製石斧で、刃部は欠損する。

第38図1～3は須恵器の大甕である。1は底部から体部にかけての破片で、器厚はうすい。外器面は平行タキで、内器面の當て具痕は同心円文である。2は口縁部で大きく開き、上位に3本の沈線があり、その間に櫛描波状文を描く。3は体部から頸部にかけての破片で、外器面はタタキを横ナデで消している。内器面の當て具痕は同心円文である。4は土師器の大甕で、器形は砲弾状で、口縁は矧くゆるやかに開く。底部は意図的に打ち欠いてあり、概に転用したものであろう。外器面はヘラナデ、口縁部は横ナデ、内器面はヘラケズリを施す。外器面には多量の煤が、内器面には有機物が付着する。

第39図は池跡出土の瓦で、1～3は平瓦片である。

1・2の凹面は布目圧痕、紐状圧痕、模骨痕が確認でき、凸面は横方向のヘラナデを施す。側面は切斷痕と折り取り痕を残す。1には切斷の目安となる突起痕も観察できる。3は非常に厚い平瓦で、狭端部を残す。凹凸面の圧痕や調整は観察できないが、模骨痕と突起痕が観察できる。側面はヘラナデ調整である。4・5



第39図 池跡出土瓦実測図



第40図 池跡28 トレンチ出土木製品実測図

は丸瓦である。4は上端部を欠損するが、おおむね完形品に近い。厚さは左右で大きく異なり、やや歪みがある。凸面は縦方向のヘラナデ調整、凹面は布目圧痕が明瞭に残り、突起痕も観察できる。側面は数面の切断痕を持ち、一部に未調整の折り取り痕を残す。5は下端部片で、凸面は縦方向のヘラナデ、凹面には布目圧痕が残る。

#### 木製品（第40図）

第40図は池跡28トレンチ粘土層出土の木製品である。

1は建築部材と思われる角材の一部である。長方形の角材であるが角部が剥離し、断面は台形を呈する。残存する3面はきれいな面加工を施しており、上下端部は粗く切断されている。工具等の痕跡は確認できない。2は板材で、上面及び両側面は丁寧な面取りを施しているが、下面は割ったままの状態である。両端は欠損しているが、折れ口はさざくれており、折った後に廃棄されたものである。3は横樋である。敲打部は丸木の皮を剥いだままの状態で、加工の痕跡はない。柄部の加工は、幅約2.2cmの工具よって、主に敲打部の方向から行っているが、柄の端では一部逆向きに行う。柄部の握る部分には手擦れの跡と思われる磨耗が観察できる。柄部先端は工具により切断され、敲打部の先端部は、一部に切断のための刃物の痕跡が確認できる。4は建築部材と思われる木材片である。この部材は丸太を使用し、先端部は加工により尖らせているが、その反対部分は欠損して残存しない。この部材の先端部は、丸太の半分を取り除き、約6.5cmの幅のホゾを削り出している。5は鉤の膝柄である。全体が4つに折れているが、完形の木製品である。鍔装着部の先端部は加工により尖らせており、その基部及び柄部の先端部は、鋭い刃物で切断している。また、一部に樹皮が残存する。6・7は曲柄平鉤である。身部はうすくやや内側に反り、先端部は磨耗が見られる。6の柄部の断面は梢円形で、柄から身にかけては、なで肩状を呈する。7の柄部の断面は長方形で、柄から身にかけては、一度肩が張りながらかに身部にいたる。共に柄の先端は刃物で切断されており、柄を装着するための加工は見られず、柄の装着方法は不明である。このことから鍔の可能性もあることを、ここに記しておく。



第41図 池跡28トレンチ出土木簡実測図

#### 木簡（第41図）

木簡は池跡調査の28トレンチより出土した。出土した層は三つに細分した青色粘土層の最下層である。木簡はほぼ中程で折れ、上下端部が下になった「逆V」字状態で出土した。木簡が出土した箇所の北西側隣接地点より、第40図6・7の鉢が出土した。

第41図には木簡の実測図と釈文を掲載した。木簡の実測・釈読は平川南氏（国立歴史民俗博物館教授）によるものである。木簡の樹種はヒノキである。木簡についての詳細は付論に述べてある。

第2表 遺物観察表

第6図

No.	出土地点	層	器種・部位	法面 (cm)	色調 (内/外)	胎土	調整・文様		焼成	備考
							外器面	内器面	口唇・底部	
1	36号建物跡 東側溝	覆土	土師器高台付环 底部	高台径(7.6) 高台高 1.3 器高 (1.9)	内 黄褐色 赤色顔料 外 茶褐色 赤色顔料	細砂粒少量 赤色砂粒少量	ヨコナデ ナデ	ヨコナデ	ヨコナデ	良
2	長者原田区 一括	Ⅲ層	土師器高台付环 底部	高台径(9.0) 高台高 1.2 器高 (2.1)	赤褐色 赤色顔料	細砂粒中量	ヨコナデ ナデ	ヨコナデ	ヨコナデ	良
3	長者原田区	表面探集	土師器高台付环 底部	高台径 8.0 高台高 1.2 器高 (3.1)	茶褐色 赤色顔料	赤色砂粒微量 金黄母少量	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ ヘラ切り ヘラ切り ナデ	良
4	長者原田区 一括	Ⅲ層	土師器直 底部~口縁部	底径(12.4) 器高 1.6	赤褐色 赤色顔料	細砂粒少量 赤色砂粒微量	ナデ	ナデ	ナデ	良
5	長者原田区 一括	Ⅲ層	土師器直底部	底径(15.0) 器高 (1.2)	淡茶褐色 赤色顔料	細砂粒少量	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ	良
6	長者原田区 No666	Ⅲ層	土師器直底部	底径(11.0) 器高 (1.6)	内 茶褐色 外 茶褐色	細砂粒少量	ヨコナデ	ヨコナデ	ヘラ切り?	良
7	36号建物跡 西側	Ⅲ層	土師器直底部	底径(14.0) 器高 (1.6)	黄褐色 赤色顔料	赤色砂粒微量 金黄母微量	ヘラ磨研	ヨコナデ	ヘラ磨研	やや 良
8	長者原田区 No900	整地層東	土師器环底部	底径(8.2) 器高 (0.9)	赤褐色	細砂粒中量	ヨコナデ	ヨコナデ	ナデ	良
9	長者原田区	Ⅲ層	土師器环底部	底径(8.4) 器高 (0.8)	淡茶褐色	細砂粒少量	ナデ	ヨコナデ	板状圧痕	良
10	長者原田区 No19	Ⅲ層	土師器环 底部~口縁部	口径(12.0) 器高 (3.1)	赤褐色 赤色顔料	細砂粒中量 黑墨母微量	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ	良
11	36号建物跡 西側	Ⅲ層	土師器环 口縁部	器高 (2.6)	内 赤褐色 外 黄褐色 スズ付着	大型砂粒少量 細砂粒少量	ヨコナデ	ナデ	ナデ	良
12	長者原田区 No529	Ⅲ層	土師器直 底部~口縁部	口径(20.6) 器高 (6.5)	内 淡茶褐色 外 赤褐色 赤色顔料	細砂粒多量 大型砂粒少量	ヨコナデ タテハケ→ ヨコナデ	ヘラ削り	ヨコナデ	良
13	36号建物跡 東側溝	覆土	須恵器环 底部~口縁部	口径(14.8) 器高 (2.4)	灰色	中型砂粒多量	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ	良
14	長者原田区 No729	Ⅲ層	須恵器环 底部~口縁部	口径(13.6) 器高 (1.7)	淡灰黑色	大型砂粒微量	ヨコナデ	ヘラ削り	ヨコナデ	良
15	長者原田区 No866	整地層東	須恵器环 底部~口縁部	口径(16.0) 器高 (1.4)	内 灰色 外 灰黑色	細砂粒中量	ヨコナデ	ヘラ削り	ヨコナデ	良
16	長者原田区 一括	Ⅲ層	須恵器环 底部~口縁部	口径(14.6) 器高 (1.5)	灰色 黒灰色	細砂粒少量	ヘラ削り ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ	良
17	36号建物跡 西側	Ⅲ層	須恵器环 底部~体部	底径(7.6) 器高 (2.2)	青灰色	細砂粒少量	ヨコナデ	ヨコナデ	ヘラ切り	良
18	長者原田区	Ⅲ層	須恵器环	底径(8.0) 底部~口縁部	灰白色	細砂粒少量	ヨコナデ	ヨコナデ	ナデ	不良
19	長者原田区 No726	Ⅲ層	須恵器环 底部~体部	底径(8.2) 器高 (1.9)	灰色	細砂粒多量	ヨコナデ	ヨコナデ	ヘラ切り→ ナデ	良
20	長者原田区 No455	Ⅲ層	須恵器直 底部~口縁部	底径(13.4) 器高 (15.0)	灰黑色	細砂粒多量	ヨコナデ	ヨコナデ	ヘラ切り	良
21	長者原田区 No889	整地層東	須恵器直 底部~口縁部	器高 2.0 底径(15.8) 器高 (18.0)	灰色 灰黑色	細砂粒中量	ヨコナデ ヘラナデ	ヨコナデ	底部 ヘラ切り 口唇部 ヨコナデ	良
22	長者原田区 No726	Ⅲ層	須恵器环 底部~口縁部	口径(11.0) 器高 (3.1)	内 灰色 外 灰黑色	細砂粒中量	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ	良
23	長者原田区 No727	Ⅲ層	須恵器环 环?底部	器高 (0.6)	灰色	細砂粒少量	横方向 ナデ	不定方向 ナデ	ヨコナデ	無
24	長者原田区 No460	Ⅲ層	須恵器直 底部~体部	口径(13.6) 器高 (2.6)	内 灰白色 外 灰黑色	細砂粒少量	ヨコナデ 沈繪文	ヨコナデ	ヨコナデ	良
25	長者原田区 No733	Ⅲ層	須恵器环 底部~体部	底径(9.8) 器高 (2.5)	灰色	細砂粒中量	ヨコナデ ヘラ削り	ヨコナデ ナデ	ヘラ切り→ ナデ	良

第3表 遺物觀察表

第6図

No	出土地点	層	器種・部位	法量 (cm)	色調 (内/外)	胎土	調整・文様			焼成	備考
							外器面	内器面	口唇・底部		
26	長者原Ⅲ区 No730	Ⅲ層	須恵器壺 底部～体部	底径(11.6) 器高(2.5)	灰色	細砂粒 中量	ヨコナデ	ヨコナデ	ヘラ切り ナデ	良	
27	長者原Ⅲ区 No592	Ⅲ層	須恵器壺 底部～体部	底径(9.8) 器高(4.2)	灰色	細砂粒 中量	ヘラ削整	ヨコナデ	ヘラ切り ナデ	良	
28	36号建物跡 西側	Ⅲ層	須恵器長颈壺 体部～肩部	体部最大径 (20.4) 器高(7.5)	内 外 灰色 黑色	細砂粒 粒量 黑色 粒微量	突帯	ヨコナデ	ヘラ調整	良	
29	長者原Ⅲ区 表面採集		須恵器壺？ 体部	器高(8.0)	内 灰褐色 外 白灰色	細砂粒 微量	格子目	車輪文	当て具痕	良	

第7図

No	出土地点	層	器種・部位	法量 (cm)	色調 (凹/凸)	胎土	調整・文様			焼成	備考
							凹面	凸面	侧面		
1	36号建物跡 西側	Ⅲ層	平瓦広縫部	現存長 23.7 現存幅 20.2 最大厚 2.0	灰白色	細砂粒 少量 中型砂粒少量	布目压痕 横骨痕	ナデ	ヘラ調整 未調整	やや 不良	
2	36号建物跡 No830	整地層東	平瓦広縫部	現存長 15.8 現存幅 10.5 最大厚 2.2	灰色	細砂粒 多量	布目压痕 横骨痕 ヘラ調整	正方形格子目 タキ→ナデ	ヘラ調整 未調整	良	
3	長者原Ⅲ区 No806	整地層東	平瓦側縫部	現存長 13.0 現存幅 11.5 最大厚 2.5	淡黃褐色	細砂粒 多量 黒雲母微量	布目压痕 横骨痕 斜めのナデ	長方形格子目 タキ→ナデ	ヘラ調整 切削痕 未調整	やや 良	
4	長者原Ⅲ区 No754	整地層北	半瓦側縫部	現存長 18.6 現存幅 16.0 最大厚 2.4	灰白色 灰色	細砂粒 多量 中型砂粒少量	布目压痕 横骨痕 斜めのナデ	正方形格子目 タキ→ヨコナデ	ヘラ調整 未調整	良	
5	長者原Ⅲ区 No768	整地層北	平瓦端部	現存長 15.7 現存幅 18.8 最大厚 2.6	凹 灰白色 凸 淡褐色	中型砂粒 多量	布目压痕 横骨痕	ナデ	ヘラ調整 切削痕	良	
6	36号建物跡 周辺	表面採集	丸瓦側縫部	現存長 14.0 現存幅 6.5 最大厚 2.0	凹 黑灰色 凸 灰白色	細砂粒 多量 中型砂粒少量	布目压痕	ナデ	ヘラ調整	良	

第12図

No	出土地点	層	器種・部位	法量 (cm)	色調 (内/外)	胎土	調整・文様			焼成	備考
							外器面	内器面	口唇・底部		
1	59号建物跡 61G	Ⅲ層	土師器壺 底部	器高(1.4)	赤褐色	細砂粒 少量 赤色砂粒微量	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ	良	外底部に 墨書き
2	59号建物跡 6 G	Ⅲ層	土師器壺 高台付环	高台径(7.8)	赤褐色	細砂粒 少量 赤色砂粒 黒雲母微量	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ	良	外底部に 墨書き
3	59号建物跡 24G	Ⅲ層	土師器壺 底部～口縫部	器高(2.0)	赤褐色	細砂粒 少量 赤色顔料	ヨコナデ	ヘラ磨研	ヘラ磨研	良	
4	59号建物跡 24G	Ⅲ層	土師器壺 体部～口縫部	器高(3.8)	赤褐色	細砂粒 少量 赤色顔料	ヨコナデ	ヘラ磨研	ヘラ磨研	良	
5	59号建物跡 西ベルト	Ⅲ層	土師器壺 底部～口縫部	器高(12.0)	赤褐色	細砂粒 少量 赤色砂粒微量	ヘラ磨研	ヘラ磨研	ヘラ磨研	良	
6	59号建物跡 南東側	Ⅲ層	土師器壺 把手	器高(4.8)	内 淡褐色 外 黑褐褪色	細砂粒 多量 黒雲母少量	ナデ	縦方向の ヘラ削り	ヘラ削り	良	
7	59号建物跡 43, 44aG	黑色土	土師器壺 高台付环	高台径(7.4)	赤褐色	細砂粒 少量 赤色顔料	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ	良	坏身と高台 接合面で坏 身に3条の 浅い沈線
8	59号建物跡 38G	黑色土	土師器壺 高台付环	高台径(7.4)	赤褐色	細砂粒 少量 赤色顔料	ヨコナデ	ヨコナデ	ヘラ切り	良	
9	59号建物跡 南東側	Ⅲ層	土師器壺 高台付环	高台径(6.7)	赤褐色	細砂粒 少量 赤色顔料	ヨコナデ	横方向の ナデ	ヨコナデ	良	
10	59号建物跡 48G	Ⅲ層	土師器壺 高台付环	高台径(10.0)	赤褐色	細砂粒 多量 赤色砂粒微量	ヨコナデ	ヨコナデ	ヘラ切り	やや 良	
11	59号建物跡 47G 北ベルト	黑色土	土師器壺 高台付环	高台径(11.5)	赤褐色	細砂粒 多量 赤色砂粒少量	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ	やや 良	

第4表 遺物觀察表

第12図

No	出土地点	層	器種・部位	法量 (cm)	色調 (内/外)	胎土	調整・文様			焼成	備考
							外器面	内器面	口唇・底部		
12	59号建物跡 南東側	Ⅲ層	土師器 高台付坏	高台径(7.0) 高台高 0.8	赤褐色 赤色顔料	細砂粒少量 赤色砂粒微量	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ	良	
13	59号建物跡 東側	Ⅳ層	土師器 高台付坏	高台径(7.0) 高台高 0.7	赤色顔料	細砂粒中量 黒雲母微量	ヨコナデ	ヨコナデ	ヘラ切り →ナデ	良	
14	59号建物跡 46G-a	黑色土	土師器 高台付坏	高台径(7.0) 高台高 0.6	赤色顔料	細砂粒少量 黒雲母微量	ヨコナデ	ヨコナデ	板状压痕	良	
15	59号建物跡 17a 北ベルト	黑色土	土師器 底盤～口縁部	高台高(2.8) 底径(9.4) 口径(13.6) 器高 2.8	赤褐色	細砂粒少量 大型砂粒微量	ヨコナデ	ヨコナデ		良	
16	59号建物跡 29a 北ベルト	Ⅲ層	土師器 底盤～口縁部	底径(12.6) 口径(14.8) 器高 1.6	内 淡褐色 外 茶褐色	細砂粒少量 大型砂粒微量	ヨコナデ	ヨコナデ	ヘラ切り	良	

第13図

No	出土地点	層	器種・部位	法量 (cm)	色調 (内/外)	胎土	調整・文様			焼成	備考
							外器面	内器面	口唇・底部		
1	59号建物跡 51G	黑色土	須恵器坏蓋 つまみ部	つまみ径 (3.2)	灰色	細砂粒微量	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ	良	
2	59号建物跡 43,44b G	黑色土	須恵器坏蓋 つまみ部	つまみ径 4.0 器高(2.8)	内 淡赤褐色 外 灰白色	細砂粒少量	ヘラ削り ヨコナデ	ヨコナデ	つまみ部 ナデ	やや 良	
3	59号建物跡 37G西ベルト	Ⅲ層	須恵器坏蓋 体部～つまみ部	つまみ径 2.6 器高(3.2)	内 淡黒色 外 灰色	細砂粒微量	ヘラ削り ヨコナデ	ヨコナデ	つまみ部 ナデ	良	
4	59号建物跡 43,44a G	黑色土	須恵器坏蓋 体部～つまみ部	つまみ径 1.9 器高(1.9)	内 灰白色 外 淡灰黑色	細砂粒微量	ヘラ削り →ヨコナデ ヨコナデ	ヨコナデ	ヘラ記号 ナデ	良	
5	59号建物跡 43,44b G	黑色土	須恵器坏蓋 口縁部～つまみ部	つまみ径 2.2 器高 2.6 口径(14.0)	灰白色	細砂粒多量 黒雲母微量	ヘラ削り ヨコナデ	ヨコナデ	口唇部 ヨコナデ つまみ部 ナデ	不良	
6	59号建物跡 49G西ベルト	Ⅲ層	須恵器坏蓋 口縁部～体部	つまみ径 2.2 器高 2.6 口径(14.4) 器高(2.5)	内 灰白色 外 灰色 つまみ部 灰黑色	細砂粒少量	ヘラ削り ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ ヨコナデ	良	
7	59号建物跡 43,44a G	黑色土	須恵器坏蓋 口縁部～体部	口径(11.2) 器高(1.6)	内 灰白色 外 灰色	細砂粒微量	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ	良	
8	59号建物跡 35G	Ⅲ層	須恵器坏蓋 口縁部～体部	口径(12.4) 器高(1.6)	灰白色	細砂粒微量	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ	やや 良	
9	59号建物跡 43,44b G	黑色土	須恵器坏蓋 口縁部～体部	口径(13.2) 器高(1.8)	灰褐色	細砂粒微量	ヘラ削り ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ	良	
10	59号建物跡 43,44b G	黑色土	須恵器坏蓋 口縁部～体部	口径(13.0) 器高(1.3)	灰黑色	細砂粒微量	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ	良	
11	59号建物跡	雙地層	須恵器坏蓋 口縁部～体部	口径(15.2) 器高(1.6)	内 灰色 外 灰黑色	細砂粒微量	ヘラ削り ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ	良	
12	59号建物跡	黑色土	須恵器坏蓋 口縁部～体部	口径(16.0) 器高(2.0)	灰黑色	細砂粒微量	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ	良	
13	59号建物跡 19G	黑色土	須恵器坏蓋 口縁部～体部	口径(17.2) 器高(1.3)	内 灰黑色 外 淡灰黑色 淡灰黑色	細砂粒微量	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ	良	
14	59号建物跡 35G	Ⅲ層	須恵器坏蓋 口縁部～体部	器高(1.5)	内 灰黑色 外 淡灰黑色 淡灰黑色	細砂粒微量	ヘラ記号 ヘラ削り ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ	良	
15	59号建物跡 43G	黑色土	須恵器坏蓋 口縁部～体部	器高(1.7)	淡灰黑色	細砂粒微量	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ	良	
16	59号建物跡 60G西ベルト	Ⅲ層	須恵器坏 体部～口縁部	口径(11.8) 器高(3.2)	内 灰色 外 灰色 灰黑色	細砂粒微量	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ	良	

第5表 遺物観察表

第13図

No	出土地点	層	器種・部位	法量 (cm)	色調 (内/外)	胎土	調整・文様			焼成	備考
							外器面	内器面	口唇・底部		
17	59号建物跡 43,44 b G	黒色土	須恵器環底部	底径 5.0 器高 (2.2)	灰白色	細砂粒少量	ヨコナデ	ヨコナデ	ヘラ切り	やや良	
18	59号建物跡 43,44 a G	黒色土	須恵器環底部	底径 5.2 器高 (2.0)	灰白色	細砂粒中量	ヨコナデ	ヨコナデ	ヘラ切り →ナデ	やや良	
19	59号建物跡 43,44 b G	黒色土	須恵器環底部	底径 (7.6) 器高 (1.9)	灰色	細砂粒少量	ヨコナデ	ヨコナデ	ヘラ切り	良	
20	59号建物跡 43,44 a G	黒色土	須恵器環底部	底径 (7.8) 器高 (1.9)	灰色	細砂粒多量	ヨコナデ	ヨコナデ	ヘラ切り →ナデ	良	
21	59号建物跡 43,44 b G	黒色土	須恵器皿	口径 (17.6)	灰色	細砂粒少量	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ	良	
22	59号建物跡 36G西ベルト	黒色土	須恵器高台付环 底部・一部	高台径 (8.0) 高台高 0.4 器高 (1.7)	灰色	細砂粒少量	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ	良	
23	59号建物跡 43,44 a G	黒色土	須恵器高台付环	高台径 (8.2) 高台高 0.8 器高 (1.8)	灰色	細砂粒多量	ヨコナデ	ヨコナデ	ヘラ切り →ナデ	良	
24	59号建物跡 43,44 b G	黒色土	須恵器高台付环 底部	高台径 (7.0) 高台高 0.9 器高 (2.6)	灰白色	細砂粒少量	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ	やや良	
25	59号建物跡 61G南ベルト	Ⅲ層	須恵器高台付环 底部・一部	高台径 (8.4) 高台高 0.4 器高 (1.9)	内 赤茶褐色 外 灰黑色 黑色自然釉	細砂粒少量	ヨコナデ	ヨコナデ	自然釉で 凸凹	良	
26	59号建物跡 11-BG 南ベルト	黒色土	須恵器高台付环 底部	高台径 (9.6) 高台高 0.5 器高 (1.9)	灰褐色	細砂粒微量	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ	良	
27	59号建物跡 東南隅	褐土	須恵器壺?	底部	高台径 (9.0) 高台高 0.7 器高 (3.2)	内 灰褐色 外 灰褐色	中型砂粒少量	ヨコナデ ナデ	ヨコナデ	良	
28	59号建物跡 43,44 b G	黒色土	須恵器高台付环 底部・一口縫部	高台径 (9.0) 高台高 1.1 口径 (16.2) 器高 4.8	内 灰色 外 淡灰黑色	細砂粒微量	ヨコナデ ナデ	ヨコナデ ナデ	底部 ナデ 口唇部 ヨコナデ	良	
29	59号建物跡 43,44 a G	黒色土	須恵器高台付环 底部	底径 (6.4) 器高 (1.3)	灰色	細砂粒少量	ヨコナデ	ヨコナデ	ヘラ切り →ナデ	良	
30	59号建物跡 43,44 b G	黒色土	須恵器高台付环 底部	高台径 (6.0) 器高 (1.6)	灰色	細砂粒少量	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ	良	
31	59号建物跡 43,44 b G	黒色土	須恵器高台付环 底部	高台径 8.3 器高 (1.6)	内 灰黑色 外 灰褐色	細砂粒微量	ヨコナデ	ヨコナデ	ヘラ切り	良	高台接合 の為1mm 幅の沈線
32	59号建物跡 43,44 b G	黒色土	須恵器高台付环 底部・一部	高台径 8.0 器高 (2.6)	内 灰色 外 灰白色	細砂粒微量	ヨコナデ	ヨコナデ	ヘラ切り	やや良	
33	59号建物跡 東南隅	Ⅲ層	須恵器平底 口縫部	口径 (8.0) 器高 (6.3)	内 灰白色 外 灰白色	細砂粒微量	ヨコナデ ナデ	ヨコナデ ナデ	ヨコナデ	良	
34	59号建物跡 43,44 a G	黒色土	須恵器平底 口縫部	口径 (8.5) 器高 (6.8)	内 灰白色 外 灰黑色	細砂粒微量	ヨコナデ ナデ	ヨコナデ ナデ	ヨコナデ	良	
35	59号建物跡 43,44 b G	黒色土	須恵器高环 环部	口径 (11.0) 器高 (4.5)	内 灰色 外 灰黑色	細砂粒微量	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ	良	
36	59号建物跡 42G	Ⅲ層	須恵器高环 脚部	脚径 (10.6) 器高 (2.6)	内 淡灰黑色 外 灰黑色	細砂粒微量	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ	良	
37	59号建物跡 43,44 a G	黒色土	須恵器高环 脚部	脚径 (10.6) 器高 (4.5)	内 灰色 外 灰白色	細砂粒少量	ヘラ記号 ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ	良	
38	59号建物跡 13—a G	Ⅲ層	須恵器高环 环部	口径 (12.6) 器高 (4.0)	内 灰黑色 外 灰色 灰黑色	細砂粒少量	ヨコナデ ヘラ削り →ナデ	ヨコナデ	ヨコナデ	良	

第6表 遺物観察表

第14図

No	出土地点	層	器種・部位	法量 (cm)	色調 (内/外)	胎土	調整・文様			焼成	備考
							外器面	内器面	口唇・底部		
1	59号建物跡 南東側	Ⅲ層	須恵器壺 頭部・口縁部	口径 (19.4) 器高 (5.6)	灰白色	細砂粒多量	ヨコナデ 平行タタキ→ ヨコナデ 格子目タタキ ヨコナデ	ヨコナデ 同心円文 当て具痕 ヨコナデ	ヨコナデ 同心円文 当て具痕 ヨコナデ	良	赤流き?
2	59号建物跡 24G	Ⅲ層	須恵器壺 頭部・口縁部	口径 (19.2) 器高 (6.2)	赤茶色	細砂粒多量	ヨコナデ 格子目タタキ ヨコナデ	ヨコナデ 同心円文當て具 痕→ヨコナデ	ヨコナデ	やや良	
3	59号建物跡	整地層	須恵器壺肩部	器高 (5.9)	灰黒色	細砂粒少量	格子目タタキ ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ	良	
4	59号建物跡 18G-a	黒色土	須恵器壺 口縁部	口径 (24.6) 器高 (5.6)	内灰 灰黒色 外灰 外灰黒褐色	細砂粒多量	ヨコナデ ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ	良	
5	59号建物跡 東側 46G-a	Ⅲ層 黒色土	須恵器壺 口縁部	口径 (20.2) 器高 (3.9)	内淡黒褐色 外赤褐色	細砂粒少量	ヨコナデ ヘラ彫跡	ヨコナデ	ヨコナデ	良	接合

第15図

No	出土地点	層	器種・部位	法量 (cm)	色調 (凹/凸)	胎土	調整・文様			焼成	備考
							凹面	凸面	側面		
1	59号建物跡 44G-b	黒色土	平瓦端部	現存長 11.6 現存幅 9.1 最大厚 2.7	凹 淡褐色 凸 赤褐色	細砂粒多量 大型砂粒少量 黒雲母微量	布目压痕 ヘラ調整	ナデ	切削痕 未調整 突起痕	良	
2	59号建物跡 23G	整地層	平瓦端部	現存長 11.3 現存幅 10.6 最大厚 2.5	茶褐色	細砂粒多量 大型砂粒中量 黒雲母微量	布目压痕 ナデ	布目压痕 ナデ	切削痕 ヘラ調整	良	
3	59号建物跡 12a G	Ⅲ層	平瓦端部	現存長 11.7 現存幅 13.7 最大厚 2.2	凹 淡褐色 凸 灰色 底 黑褐色	細砂粒多量 大型砂粒中量 黒雲母微量	模骨痕 布目压痕 ヘラ調整	ナデ	未調整 切削痕 ヘラ調整	良	
4	59号建物跡 16G	黒色土	平瓦端部	現存長 18.0 現存幅 12.5 最大厚 2.6	淡茶褐色	細砂粒多量 大型砂粒中量 黒雲母微量	模骨痕 布目压痕 ヘラ調整	細長格子タタキ →ナデ	切削痕 未調整	良	
5	59号建物跡 41G西ベルト	Ⅲ層	平瓦端部	現存長 10.9 現存幅 13.0 最大厚 2.5	灰褐色	細砂粒多量 大型砂粒少量	模骨痕 布目压痕 ヘラ調整	布目压痕 ナデ	切削痕 未調整	良	
6	59号建物跡 11G北ベルト	黒色土	平瓦端部	現存長 10.4 現存幅 11.0 最大厚 2.0	灰黑色	細砂粒多量 大型砂粒少量	模骨痕 布目压痕 ヘラ調整	細長格子タタキ →ナデ	切削痕 ヘラ調整	良	
7	59号建物跡 南側	Ⅲ層	平瓦端部	現存長 14.2 現存幅 17.2 最大厚 2.7	灰色	細砂粒多量 大型砂粒少量	模骨痕 布目压痕	正方形格子 タタキ	切削痕 ヘラ調整	良	
8	59号建物跡 16G	黒色土	平瓦端部	現存長 17.7 現存幅 13.4 最大厚 3.0	凹 淡茶褐色 凸 灰色	細砂粒多量 大型砂粒少量 黒雲母微量	模骨痕 布目压痕 ヘラ調整	大型正方形格子 タタキ→ナデ	未調整 切削痕	良	
9	59号建物跡	整地層	平瓦端部	現存長 22.6 現存幅 11.0 最大厚 2.7	凹 淡灰色 凸 灰白色 底 黑褐色	細砂粒多量 大型砂粒少量 黒雲母微量	模骨痕 布目压痕 ヘラ調整	大型正方形格子 タタキ→ナデ	切削痕 未調整 突起痕	良	
10	59号建物跡 16G	黒色土	丸瓦上端部	現存長 15.2 現存幅 10.1 最大厚 2.3	凹 淡茶褐色 凸 淡灰黑色	細砂粒多量 黑雲母微量	模骨痕 布目压痕	ナデ	未調整 切削痕	良	
11	59号建物跡	整地層	丸瓦下端部	現存長 10.1 現存幅 7.2 最大厚 2.1	淡褐色	細砂粒多量	模骨痕 布目压痕 ヘラ調整	ナデ	未調整 切削痕	やや良	
12	59号建物跡 周辺	表面 採集	丸瓦上端部	現存長 9.8 現存幅 6.8 最大厚 2.2	凹 淡茶褐色 凸 淡白色	細砂粒多量 大型砂粒中量	模骨痕 布目压痕 ヘラ調整	ナデ	切削痕	良	

第16図

No	出土地点	層	器種・部位	法量 (cm)	色調 (凹/凸)	胎土	調整・文様			焼成	備考
							凹面	凸面	側面		
1	59号建物跡 南東側	Ⅲ層	軒丸瓦下端 瓦当接合部	現存長 7.1 現存幅 5.7 最大厚 1.8	灰白色	細砂粒少量	布目压痕 瓦当接合部	ナデ	ヘラ調整	良	

第7表 遺物観察表

第17図

No.	出土地点	層	種別	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	備考
1	59号建物跡 24G	Ⅲ層	鐵錐	12.8	1.0	0.9	42.5	片丸造り
2	59号建物跡 44G-a	黑色土	鉄釘	4.8	1.0	0.7	12.0	先端部が折れ曲がる
3	59号建物跡 46G-b	黑色土	鉄釘	5.9	0.8	0.7	7.5	
4	59号建物跡 16G	黑色土	鉄釘	4.4	1.2	1.4	16.0	
5	59号建物跡 35G	Ⅲ層	鐵刀子	9.5	1.0	0.4	12.0	背面は先端部が細くなる 若干のマチがつく
6	59号建物跡 47G南ベルト	Ⅲ層	鐵刀子	4.5	1.1	0.5	5.0	7と接合しないが出土地点・形態から 同一の可能性がある
7	59号建物跡 47G南ベルト	Ⅲ層	鐵刀子	3.5	1.1	0.4	2.5	6と接合しないが出土地点・形態から 同一の可能性がある

第17図

No.	出土地点	層	種別	石材	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	備考
8	59号建物跡 43,44G	黑色土	砾石	砂岩	5.2	4.5	2.7	120.0	

第25図

No.	出土地点	層	器種・部位	法量 (cm)	色調 (内/外)	胎土	構築・文様			備考
							外表面	内表面	口唇・底部	
1	64号建物跡 E-1 G溝	覆土	土師器壺	口径(26.4) 高さ(6.3)	赤褐色	金需母多量	ヨコナデ ナデ	ヨコナデ ナデ	ヨコナデ ナデ	やや 良
2	64号建物跡 D-E-6 G	Ⅲ層	土師器小型壺	口径(10.8) 底径(5.3)	褐褐色	大型砂粒少量 金需母少量	ヨコナデ ナデ	ヨコナデ ナデ	ヨコナデ ナデ	不良
3	64号建物跡 E-4, 5 Gベルト 溝	覆土	上部器壺	口径(19.4) 高さ(4.8)	黄褐色	大型砂粒少量 中型砂粒多量	ナデ	ナデ	ナデ	やや 良
4	64号建物跡 -溝	Ⅲ層	土師器壺	底径(6.8) 口径(11.0) 高さ(3.2)	橙褐色	大型砂粒少量 中型砂粒多量 金需母少量	ヨコナデ ヨコナデ	底盤 ヘラ切り 口唇	ヨコナデ ヨコナデ	良
5	64号建物跡 E-1 G溝	覆土	土師器壺蓋	器高(1.7) 口径部	内 黄褐色 外 黄褐色 赤色顔料	細砂粒少量	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ ヨコナデ	良
6	64号建物跡 D-3 G	堅地層	頸部器壺蓋	口径(15.4) 口縁部-底部	黄褐色	細砂粒微量	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ	不良
7	64号建物跡 E-1 G溝	覆土	頸部器壺蓋	口径(17.4) 口縁部-底部	青灰色	細砂粒多量	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ	良
8	64号建物跡 D-E-6 Gベルト	Ⅲ層	頸部器壺蓋	口径(12.8) 口縁部-底部	青褐色	細砂粒多量	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ	不良
9	64号建物跡 E-2 G溝	覆土	頸部器壺蓋	つまみ紐 4.0	橙褐色	中型砂粒少量	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ	良
10	64号建物跡	Ⅲ層	頸部器壺蓋	つまみ紐 (2.4)	灰青色	細砂粒少量	ヨコナデ	ヨコナデ	つまみ紐 ナデ	不良
11	64号建物跡 E-4 G溝	覆土	体部	器高(2.3)	青灰色	細砂粒微量	ヨコナデ	ヨコナデ		良
12	64号建物跡 E-5 G	Ⅲ層	頸部器壺蓋	器高(2.3)	灰青色	細砂粒少量	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ	不良
13	64号建物跡 南側-溝	Ⅲ層	頸部器壺蓋	器高(1.6)	青灰色	細砂粒微量	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ	良
14	64号建物跡 E-3 G	Ⅲ層	頸部器壺蓋	器高(1.7)	青灰色	細砂粒少量	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ	良
15	64号建物跡 E-3 G	Ⅲ層	頸部器壺蓋	器高(1.6)	青灰色	中型砂粒少量	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ	良
16	64号建物跡 E-3 G	Ⅲ層	頸部器壺蓋	器高(1.2)	青灰色	細砂粒微量	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ	良

第8表 遺物観察表

第25図

No	出土地点	層	器種・部位	法量 (cm)	色調 (内/外)	胎土	調整・文様			焼成	備考
							外器面	内器面	口唇・底部		
17	64号建物跡 D-3 G	Ⅲ層	須恵器環蓋 口縁部	器高 (2.0)	茶褐色	細砂粒多量	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ	良	
18	64号建物跡 D-3 G	Ⅲ層	須恵器環蓋 口縁部	器高 (1.4)	棕褐色	細砂粒微量	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ	良	
19	64号建物跡 E-1 G 滅	覆土	須恵器高台付环 底部~全体	高台径 (8.5) 高台高 0.9	青褐色	細砂粒多量	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ	良	
20	64号建物跡 No.26	整地層	須恵器环 底部~全体	底径 (7.9) 器高 (1.9)	黄灰色	中型砂粒微量	ヨコナデ	ヨコナデ	ナデ	不良	磨耗している
21	64号建物跡 E-4 G 滅	覆土	須恵器高环 脚部	脚中央径 4.6 器高 (9.5)	青灰色	細砂粒多量 中型砂粒少量	ヨコナデ	斜め方向ナデ	ナデ	良	
22	64号建物跡 D-2 G D-2-3 G ベット	Ⅲ層	須恵器高环 脚部	脚端径 (10.6) 器高 (2.6)	青灰色	細砂粒少景	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ	良	接合
23	64号建物跡 E-4 G	Ⅲ層	須恵器はう 全体	体部最大径 (8.6) 器高 (3.9)	青灰色	中型砂粒多量	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ	良	
24	64号建物跡	Ⅲ層	須恵器大型 口徑	口径 (27.2)	内 喷青灰色 外 深灰色	細砂粒少景	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ	良	

第26図

No	出土地点	層	部位	法量 (cm)	色調 (凹/凸)	胎土	調整・文様			焼成	備考
							凹面	凸面	側面		
1	64号建物跡 D-E-6 G ベット	Ⅲ層	平瓦底端部	現存長 34.0 最大幅 17.0	青灰色	白色砂粒多量	布目压痕 模音痕	ナデ	切削痕 未調整	良	
2	64号建物跡 C-1 G 滅	覆土	平瓦側縫部	現存長 23.0 最大幅 16.2	青灰色	細砂粒多量	布目压痕 模音痕	長方形格子 タタキ→ナデ	切削痕 未調整	良	
3	64号建物跡 D-6 G	Ⅲ層	平瓦側縫部	現存長 17.0 最大幅 15.0	茶褐色	大型砂粒微量 細砂粒多量	布目压痕 模音痕	長方形格子 タタキ→ナデ	切削痕 未調整	やや 良	
4	64号建物跡 E-1 G 滅	覆土	平瓦底端部	現存長 14.8 最大幅 17.8	橙赤色	大型砂粒少量 中型砂粒多量	布目压痕 模音痕	ナデ	未調整 ヘラ調整	不良	
5	64号建物跡 No.2	整地層	平瓦側縫部	現存長 12.4 現存幅 15.7	青灰色	細砂粒中量	布目压痕 模音痕	布目压痕 長方形格子 タタキ→ナデ	未調整 切削痕	良	
6	64号建物跡 D-E-6 G ベット	Ⅲ層	平瓦底端部	現存長 15.7 最大幅 14.3	灰白色	細砂粒多量 金雲母少量	布目压痕 模音痕	正方形格子 タタキ→ナデ	未調整 切削痕	不良	
7	64号建物跡 E-4-5 G ベット 溝	覆土	平瓦 上端~下端部	現存幅 16.2 最大幅 2.3	茶褐色	細砂粒中量 赤色砂粒少量 金雲母少量	布目压痕 模音痕	ナデ	ヘラ調整	不良	
8	64号建物跡 D-E-6 G ベット	Ⅲ層	平瓦底端部	現存長 25.8 現存幅 18.6	黄褐色	大型砂粒微量 細砂粒少景	布目压痕 模音痕	ナデ	ヘラ調整 未調整	不良	

第27図

No	出土地点	層	部位	法量 (cm)	色調 (凹/凸)	胎土	調整・文様			焼成	備考
							凹面	凸面	側面		
1	64号建物跡 B-1 G 滅	覆土	丸瓦下端部	現存長 23.0 現存幅 15.6	青灰色	細砂粒多量 金雲母少量	布目压痕 突起痕	ナデ	切削痕 未調整	良	
2	64号建物跡 E-6 G D-E-6 G	Ⅲ層	丸瓦側縫部	現存長 10.3 現存幅 15.4	茶褐色	大型砂粒中量	布目压痕	ナデ	ヘラ調整	やや 良	接合
3	64号建物跡 E-6 G 滅	覆土	丸瓦下端部	現存長 22.8 現存幅 9.9	青灰色	大型砂粒少量 細砂粒多量	布目压痕 突起痕	ナデ	切削痕 未調整	やや 良	
4	64号建物跡 E-4 G 滅	覆土	丸瓦側縫部	現存長 13.7 現存幅 13.2	黄褐色	大型砂粒多量 金雲母微量	布目压痕 突起痕	ナデ	切削痕 ヘラ調整	不良	
5	64号建物跡 西側	Ⅲ層	丸瓦側縫部	現存長 13.6 現存幅 9.2	暗灰色	大型砂粒多量 細砂粒多量	布目压痕	ナデ	切削痕 未調整	良	

第9表 遺物観察表

第28図

No.	出土地点	層	部位	法量 (cm)	色調 (凹/凸)	胎土	調整・文様			焼成	備考
							凹面	凸面	側面		
1	64号建物跡 E-4 G溝	覆土	軒丸瓦下端 瓦当接合部	瓦当径 15.4 最大厚 4.4	茶褐色	大型砂粒中量 細砂粒多量	表面 単弁八葉 蓮華文	表面 刺繡痕 押痕 ナデ	ナデ	やや 良	
2	64号建物跡 E-5 G溝	覆土	軒丸瓦下端 瓦当接合部	現在長 7.8 現存幅 7.2	黄灰色 赤褐色	中型砂粒少量 細砂粒多量	接合滑 接合粘土上	ナデ	ナデ	不良	
3	64号建物跡 D-6 G溝	覆土	軒丸瓦下端 瓦当接合部	現存長 4.5 現存幅 4.4	赤褐色	大型砂粒多量 細砂粒多量	接合滑	ナデ	ナデ	やや 良	
4	64号建物跡 E-2・3 Gベルト	目層	軒丸瓦下端 瓦当接合部	現存長 6.9 現存幅 6.5	茶褐色	大型砂粒中量 細砂粒多量	接合滑	ナデ	ナデ	やや 良	

第29図

No.	出土地点	層	種類	法量 (cm)	重量 (g)	色調 (凹/凸)	胎土	調整・文様			焼成	備考
								凹面	凸面	側面		
1	64号建物跡 E-4 G	擾乱	瓦二次 加工品	直径 (7.6) 最大厚 2.7	160.0	淡黃褐色	細砂粒多量 中型砂粒少量	模倣滑	ナデ	ナデ	やや 良	上端または下端部を残して加工、磨耗している
2	59号建物跡 E-4 G-b	黑色上 4 G-b	瓦二次 加工品	直径 (6.0) 最大厚 2.4	112.0	灰白色	中型砂粒少量	板状压痕	ナデ	格子目 タタキ	やや 不良	側縫部を残して加工、主に凹面からの加壓、磨耗している
3	59号建物跡 南側溝	覆土	瓦二次 加工品	直径 (5.6) 最大厚 2.6	75.0	黄白色	細砂粒多量 中型砂粒少量	布目压痕 絞状压痕	ナデ	ナデ	やや 不良	円形に残る加工、縫隙部が磨耗している
4	長者原Ⅲ区 No.819	要地層 東	瓦二次 加工品	直径 (5.5) 最大厚 2.8	80.0	灰 色	細砂粒多量 細砂粒多量	布目压痕 模倣骨直	ナデ	ナデ	良	凹面からの加壓
5	池1トレント	不明	瓦二次 加工品	直径 (5.4) 飛天厚 2.5	50.0	淡赤褐色	赤色砂粒少量	不明	不明	ナデ	良	全面が磨耗している
6	64号建物跡 E-1・1Cベルト	Ⅲ層	瓦二次 加工品	直径 (4.4) 最大厚 2.3	45.0	淡黃褐色	細砂粒少量	模倣滑	ナデ	ナデ	やや 良	主に凸面からの加壓、磨耗している
7	64号建物跡 E-2 G溝	覆土	瓦二次 加工品	門面直径 (5.5) 凸面一辺 (5.0) 最大厚 2.1	82.5	灰 色	大型砂粒微量 小型砂粒中量	布目压痕	ナデ	ナデ	良 良好	兩面からの加壓、凹面は円形、凸面は方形に見える
8	長者原Ⅲ区 No.684	Ⅲ層	瓦二次 加工品	直径 (5.9) 最大厚 2.0	70.0	淡褐色	細砂粒多量 黒雲母少量	布目压痕 タタキ→ ナデ	タタキ ナデ	ナデ	良	主に凹面からの加壓

第30図

No.	出土地点	層	種類	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	備考			
								外面部	内面部	口唇・底部	
1	64号建物跡 A・B-3 Gベルト	藍地層	鉄釘	最大刃部長 18.0	最大刃部幅 2.9	最大刃部厚 0.3	117.5	柄面部断面は長方形	ヨコナデ		
2	長者原Ⅲ区	Ⅲ層	鉄刀子	7.0	1.4	0.3	17.0	柄部断面は内側に曲がる			
3	64号建物跡 E-1 G溝	覆土	鉄釘	12.8	0.6	0.4	12.5	断面形方形			
4	64号建物跡	藍地層	鉄釘	3.1	0.6	0.4	5.0				
5	64号建物跡 E-1 G溝	覆土	鉄釘	4.3	0.6	0.4	6.0	断面形方形			

第31図

No.	出土地点	層	種類・部位	法量 (cm)	色調 (内/外)	胎土	調整・文様			焼成	備考
							外面部	内面部	口唇・底部		
1	長者原Ⅲ区 4号溝	覆土	須恵器坏蓋 体部	天井部径 (6.6) 脇高 (1.3)	灰黑色 茶褐色	細砂粒少量	ヘラ削り ヨコナデ			良	
2	長者原Ⅲ区 4号溝	覆土	須恵器坏 底部・体部	天井部変化点徑 (9.3) 脇高 (3.6)	灰色	細砂粒少量	ヨコナデ	横方向ナデ ヨコナデ ヘラ削り	ヘラ削り→ ナデ	良	
3	長者原Ⅲ区 4号溝	覆土	須恵器蓋 体部	脇高 (8.5)	内灰色 外灰褐色	細砂粒多量	平行タタキ	同心円文當て具痕		良	

第10表 遺物観察表

第31図

No	出土地点	層	器種・部位	法量 (cm)	色調 (問/凸)	胎土	調整・文様			焼成	備考
							凹面	凸面	側面		
4	長者原X区 4号溝	覆土	平瓦側縫部	現存長 5.9 現存幅 8.5 最大厚 2.2	灰褐色	細砂粒多量	布目灰痕	小型正方形タタキ 小型長方形タタキ	切断痕 ヘラ調整	良	

第34図

No	出土地点	層	器種・部位	法量 (cm)	色調 (内/外)	胎土	調整・文様			焼成	備考
							外表面	内表面	口唇・底部		
1	長者原X区 3号溝	覆土	青磁文書筒 体部~口縫部	口径 (14.8) 器高 (4.6)	素地 灰白色 釉 灰綠色	細砂粒少量	蓮弁文 雷文		ヨコナデ ナデ	良	
2	長者原X区 3号溝	覆土	瓦器すり体 体部~口縫部	口径 (6.0)	内 灰色 外 灰色 青灰色	細砂粒中量 大量砂粒微量			ヨコナデ	良	
3	長者原X区 7号土坑	覆土	青磁碗底部	高台径 5.6 高台高 0.6 器高 (1.9)	素地 灰色 灰白色 白綠色	細砂粒微量			ヘラ切り	良	
4	長者原X区 6号土坑	覆土	青磁碗底部	高台径 (6.6) 高台高 1.1 器高 (2.1)	素地 淡青灰色 釉 灰綠色	細砂粒微量	印花文	施はが取り		良	
5	長者原X区 8号土坑	覆土	瓦器火合体部	内 茶褐色 スス付着 外 茶褐色 淡赤褐色	細砂粒多量	ヨコナデ 火審	ヨコナデ			やや 良	

第36図

No	出土地点	層	器種・部位	法量 (cm)	色調 (内/外)	胎土	調整・文様			焼成	備考	
							外表面	内表面	口唇・底部			
1	池1トレンチ 一括	耕土	楕円輪期浅鉢 形土器上縫部	器高 (4.1)	内 黒色 外 橙色	細砂粒中量	柔焦	ナデ	ナデ	良		
2	池1トレンチ 一括	耕土	楕円中期深鉢 形土器底部?	底径 (10.2) 器高 (2.8)	内 黑褐色 外 赤褐色	中型砂粒微量	黒雲母微量	ナデ	ナデ	やや 良		
3	池1トレンチ	青灰色 粘土	楕円中期深鉢 形土器底部?	底径 (8.7) 器高 (2.3)	内 灰色 外 赤褐色	細砂粒少量	黒雲母少量	ナデ	ナデ	良		
4	池1トレンチ 一括	耕土	楕円中期深鉢 形土器底部?	底径 11.2 器高 (3.4)	内 灰黑色 外 淡褐色	細砂粒中量	黒雲母微量	ナデ	ナデ	やや 良		
5	池1トレンチ 不明	楕円中期深鉢 形土器底部?	底径 (10.6) 器高 (2.6)	内 黑褐色 外 赤褐色	中型砂粒多量	黒雲母微量	ナデ	ナデ	ナデ	良		
6	池1トレンチ 一括	耕土	楕円中期深鉢 形土器底部?	底径 (12.0) 器高 (3.9)	内 淡褐色 外 淡褐色	細砂粒多量	黒雲母微量	ナデ	ナデ	良		
7	池1トレンチ 一括	耕土	土器壊坏 底部~体部	底径 (13.0) 器高 (2.8)	内 淡褐色 外 赤褐色	細砂粒中量	ヨコナデ	ヨコナデ	ヘラナデ	良		
8	池2トレンチ	粘土層	楕円中期深鉢 形土器底部?	底径 (9.9) 器高 (2.8)	内 灰褐色 外 淡褐色	細砂粒少量	中型砂粒多量	黒雲母微量	ナデ	ナデ	良	
9	池7トレンチ	粘土層	須恵器高台付 坏 底部~体部	高台径 8.8 高台高 0.6 器高 (2.9)	内 灰白色 外 灰色	細砂粒少量	黒雲母微量	ヨコナデ ヘラナデ	ナデ ヘラ記号	ヘラ切り→ ナデ	良	
10	池18トレンチ	青灰色 粘土	須恵器高台坏 脚部~口縫部	脚径 9.4 口径 13.8 器高 (2.9)	内 灰色 外 青灰色 黒灰色	細砂粒少量	ヨコナデ	ヨコナデ	底部 ヨコナデ 口唇部 ヨコナデ	良		
11	池19トレンチ	青灰色 粘土	上部器壊 口縫部	口径 (29.3) 器高 (3.2)	茶褐色	細砂粒多量	大型砂粒微量	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ	良	
12	池19トレンチ	青灰色 粘土	上部器壊 体部~口縫部	口径 (23.2) 器高 (9.7)	内 淡褐色 外 淡褐色 赤色顔料	細砂粒少量	ヨコナデ ハケ目 ナデ	ヘラ削り?	ヨコナデ	ヨコナデ	良	
13	池19トレンチ	青灰色 粘土	黑色土器B坏 底部~口縫部	底径 (7.0) 口径 (2.8) 器高 (2.8)	茶褐色 黑色	細砂粒多量	黒雲母微量	ヘラ削研	ヘラ削研	ヘラ磨研	良	

第11表 遺物観察表

第36図

No.	出土地点	層	器種・部位	法量 (cm)	色調 (内/外)	粘土	調整・文様			焼成	備考
							外器面	内器面	口唇・底部		
14	池19トレンチ	青灰色 粘土	土師器高台付 环 底部	高台径 (11.4) 高台高 0.6	赤褐色 赤色顔料	細砂粒 多量 赤色砂粒微量	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ	良	
15	池19トレンチ	青灰色 粘土	土師器高台付 环 壁部	高台径 (12.2) 高台高 0.8	内 赤褐色 外 淡褐色	細砂粒 多量 黒泥母少量	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ	良	
16	池19トレンチ	青灰色 粘土	土師器瓶 把手	器高 (9.0)	茶褐色 赤褐色	細砂粒 多量 赤色砂粒少景	ナデ			良	
17	池19トレンチ	青灰色 粘土	須恵器环蓋 つまみ部	つまみ径 3.4	内 灰色 外 灰色	細砂粒 少量 金雲母少量	ヨコナデ	ヨコナデ	つまみ部 ヨコナデ	良	
18	池19トレンチ	青灰色 粘土	須恵器高台付 环 底部~体部	高台径 (8.4) 高台高 1.0	灰白色 灰白色	黑色砂粒多量	ヨコナデ	ナデ	ヨコナデ	良	
19	池19トレンチ	青灰色 粘土	須恵器高台付 环 底部~口唇部	高台径 (9.2) 高台高 1.4 口径 (14.2)	灰色	細砂粒 少量 中型砂粒多量	ヨコナデ	ヨコナデ	底部 ヘラ切り 口唇部 ヨコナデ	良	
20	池19トレンチ	青灰色 粘土	須恵器大甕 口唇部	口径 24.0 器高 3.9	内 灰黑色 外 黑灰色	細砂粒 极量	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ	良	

第36図

No.	出土地点	層	種別	石材	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	備考
21	池19トレンチ	青灰色 粘土	打製石斧	安山岩	11.4	4.7	2.0	130.0	刃部欠損

第37図

No.	出土地点	層	器種・部位	法量 (cm)	色調 (内/外)	胎上	調整・文様			焼成	備考
							外器面	内器面	口唇・底部		
1	池21トレンチ	青灰色 粘土	土師器环 体部~口唇部	口径 (12.0) 器高 (3.3)	内 黄褐色 外 黄褐色	細砂粒少景 黒雲母微量	ナデ	ナデ	ナデ	やや 不良	
2	池21トレンチ	青灰色 粘土	黒色土器B环 体部~口唇部	口径 (12.2) 器高 (3.6)	内 褐色 外 褐色	細砂粒多量 黒雲母少量	ヘラ磨研	ヘラ磨研	ヘラ磨研	良	
3	池21トレンチ	青灰色 粘土	土師器皿 底部~口唇部	底径 (14.6) 口径 (16.8) 器高 (2.3)	淡褐色 外、外底部 赤色顔料	細砂粒中量 金雲母微量	ヨコナデ	ヨコナデ ナデ	ヨコナデ	やや 不良	
4	池21トレンチ	青灰色 粘土	土師器皿 頂部~口唇部	口径 (14.0) 器高 (5.2)	内 淡褐色 外 褐色	細砂粒少量	ヨコナデ	ナデ	ナデ	良	
5	池21トレンチ	青灰色 粘土	須恵器高台付 环 高台部	高台径 (8.4) 器高 (0.8)	黑色	細砂粒微量	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ	良	坏部接合 面に滑
6	池21トレンチ	青灰色 粘土	須恵器高台付 环 底部~体部	高台径 (7.2) 高台高 0.9	内 黑色 外 黑黑色	細砂粒微量	ヨコナデ	ヨコナデ →ナデ	ヨコナデ	良	
7	池21トレンチ	青灰色 粘土	須恵器高台付 环 底部	高台径 (10.4) 高台高 0.6	青灰色	中型砂粒微量	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ	良	
8	池21トレンチ	青灰色 粘土	須恵器环蓋 口唇部~体部	口径 (13.2) 器高 (1.7)	内 茶褐色 外 灰色	細砂粒少量	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ	良	
9	池21トレンチ	青灰色 粘土	須恵器环蓋 口唇部~体部	口径 (12.2) 器高 (2.1)	内 灰色 外 灰色	細砂粒微量	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ	良	
10	池21トレンチ	青灰色 粘土	須恵器高台付 环 体部	体部最大径 (14.0) 器高 (4.6)	内 黑色 外 黑灰色	細砂粒少景 淡灰黑色	ヨコナデ	ヨコナデ 横・斜めの ナデ	ヨコナデ	良	
11	池21トレンチ	青灰色 粘土	須恵器大甕 口唇部	口径 (31.0) 器高 (3.9)	灰黑色	細砂粒多量	ヨコナデ	ヨコナデ 平行沈線 螺旋波状文	ヨコナデ	良	

第12表 遺物観察表

第37図

No	出土地点	層	器種・部位	法量 (cm)	色調 (内/外)	胎土	調整・文様			焼成	備考
							外器面	内器面	口唇・底部		
12	池28トレンチ	粘土	縄文中期深鉢 彩土器底?	底径 11.2 器高 (3.0)	明褐色	細砂粒少量	ナデ	ナデ	ナデ	良	
13	池28トレンチ No26	粘土	縄文中期深鉢 彩土器底部	底径 9.9 器高 (3.4)	明褐褐色 黒褐色 茶褐色	大型砂粒少量 細砂粒多量	ナデ	ナデ	ナデ	良	
14	池28トレンチ No169	粘土①	黑色土器B環 底部~口様部	口径 14.2 器高 3.8~4.5	茶褐色 黒色	細砂粒中量 金雲母微量	ヘラ磨研	ヘラ磨研	底部 不定方向 ヘラ磨研 口唇部 ヘラ磨研	良	
15	池28トレンチ No172	粘土②	黑色土器B環 体部~口様部	口径 (12.8) 器高 (3.1)	灰黑色 灰白色	細砂粒少量	ヨコナデ	ヘラ磨研	ヨコナデ	良	
16	池28トレンチ No92	粘土	土器器高环 脚部~口様部	口径 (14.8) 器高 (9.9)	淡赤褐色	細砂粒少量	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ	良	
17	池28トレンチ No145	粘土①	土器器高 体部~口様部	口径 (21.0) 器高 (10.3)	内 黒褐色 有機物付着 外 茶褐色	細砂粒多量 大型砂粒少量	ヨコナデ タキ→ナデ	ヨコナデ	ヨコナデ 斜め方向 ヘラ削り	良	
18	池28トレンチ No236	粘土③	須恵器高台付 环 底部~口様部	高台径 (7.5) 高台高 0.7 口径 (11.8) 器高 3.9	スズ付着 灰色 灰青色	細砂粒少量	ヨコナデ ヘラナデ	ナデ ヨコナデ	底部 ヘラ切り ヨコナデ 口唇部 ヨコナデ	良	
19	池28トレンチ No245	粘土②	土製支脚	最大長 17.2 最大幅 6.0 最大厚 7.3	赤褐色 灰黑色 スズ付着	細砂粒多量 黑雲母多量	指オサエ 指オサエ →ナデ			良	二次焼成 剥離

第37図

No	出土地点	層	種別	石材	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	備考	
20	池28トレンチ	砂礫層	磨製石斧	蛇紋岩	13.1	6.9	4.0		刃部と基部欠損	
21	池28トレンチ No69	砂礫層	打製石斧	安山岩	8.1	5.6	1.3	77.5	刃部が欠損	

第38図

No	出土地点	層	器種・部位	法量 (cm)	色調 (内/外)	胎土	調整・文様			焼成	備考
							外器面	内器面	口唇・底部		
1	池28トレンチ No196ほか	砂礫層	須恵器大甕 底部~体部	器高 (14.7)	灰黑色 底部	細砂粒少量	平行タキ	同心円文 当て真痕	ナデ	良	接合
2	池28トレンチ No143	粘土①	須恵器大甕 体部~口様部	器高 (14.1)	内 灰黑色 灰白色	細砂粒少量	ヨコナデ 掏出波状文	ヨコナデ	ヨコナデ	良	瓶は10本 単位
3	池28トレンチ No200	粘土	須恵器大甕 体部~頸部	器高 (17.0)	内 灰黑色 外 灰黑色	細砂粒少量	ヨコナデ	ヨコナデ 同心円文 当て真痕	ヨコナデ	良	
4	池28トレンチ No164	粘土①	土製器皿 底部~口様部	口径 17.0 器高 (30.1) 厚 1.0~1.8	茶褐色	大型砂粒多量 中型砂粒多量 金雲母多量	ヨコナデ ナデ スズ付着	ヨコナデ ヨコナデ ナデ(縦) ナデ(横) 焦げ痕	ヨコナデ	良	底部穿孔 瓶に転用

第39図

No	出土地点	層	部位	法量 (cm)	色調 (内/外)	胎土	調整・文様			焼成	備考
							凹面	凸面	側面		
1	池28トレンチ No144	粘土①	平瓦広縫部	現存長 29.2 現存幅 16.2 最大厚 3.8	灰色	中型砂粒多量	有目圧痕 横骨痕	ヘラナデ	切断痕 未調整	良	接合
2	池19トレンチ No157	青灰色 粘土	平瓦端部	現存長 21.3 現存幅 19.1 最大厚 2.4	赤褐色	細砂粒多量 全雲母多量	有目圧痕 横骨痕	ヨコナデ		やや 良	接合
3	池24トレンチ No21	青灰色 粘土	平瓦狭縫部	現存長 22.3 現存幅 18.4 最大厚 3.9	黄灰色	中型砂粒少量 細砂粒微量 全雲母微量	有目圧痕 模様痕 ヘラ調整	ナデ	ヘラ調整	やや 良	磨耗

第13表 遺物觀察表

第39図

No.	出土地点	層	部位	法量 (cm)	色調 (門/凸)	粘土	調整・文様			備考
							門面	凸面	御面	
4	池18トレンチ	青灰色 粘土	丸瓦下端部	現存長 36.8 下端幅 16.9 最大厚 2.7	青灰色	細砂粒少量	布目压痕	ヘラ痕整 ナデ	切断痕 未調整	良
5	池19トレンチ	青灰色 粘土	丸瓦下端部	現存長 12.8 下端幅 12.6 最大厚 2.2	青灰色	細砂粒中量	布目压痕	ナデ	切断痕 未調整	良

第40図

No.	出土地点	層	種別	材質	大きさ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	備考
1	池28トレンチ No.105	粘土	角材	モミ箆	現存長 (11.0)	現存幅 (9.1)	最大厚 (7.3)	
2	池28トレンチ No.103	粘土	板材	ヒノキ	現存長 (27.1)	5.9	1.1	
3	池28トレンチ No.283	粘土③	横桿	ヒサカキ	全長 35.0 柄部長さ 14.5 敲打部長さ 20.5	柄部幅 3.4~7.0 敲打部幅 7.0~7.5	柄部最大厚 2.7 敲打部最大厚 6.3	工具軸 約2.2cm
4	池28トレンチ No.326	粘土③	建築部材	広葉樹 (歛孔材)	現存長 22.1	現存幅 13.9	最大厚 14.7	止めの仕口?
5	池28トレンチ No.256	砂礫層	銀勝柄	広葉樹 (歛孔材)	87.9	3.0	4.0	
6	池28トレンチ No.357	粘土①~ 砂礫層	平鋸(鉛?)	クリ	59.3	22.7	5.0	
7	池28トレンチ No.356	粘土①~ 砂礫層	平鋸(鉛?)	コナラ箆 アカガシ箆	55.1	22.0	4.0	

### 第Ⅲ章　まとめ

#### 40号建物跡・6号溝跡・7号溝跡・整地層について

長者原Ⅲ区では、40号建物跡・6号溝跡・7号溝跡と整地層を確認した。40号建物跡・6号溝跡・7号溝跡には遺構の切り合い関係があり、整地層には層の上下関係がある。切り合い関係を整理すると、築造順序は40号建物跡→6号溝跡→7号溝跡となる。また、7号溝跡の上面には整地層が存在し、7号溝跡も整地の土で埋められている。この整地層は礎石との関係から36号建物跡に伴うものである。それで、遺構の切り合い関係と土層の上下関係を合わせて考えると次のような築造関係になる。40号建物跡（掘立）→6号溝跡→7号溝跡→36号建物跡（礎石）。6号・7号溝跡は37号建物跡（礎石）・38号建物跡（掘立）・39号建物跡（掘立）の何れかに伴うと考えられるので、4時期の建物跡の変遷が確認できた。

これらの建物跡で時期が明確なのが36号建物跡で、鞠智城跡終末期の9世紀末に考えられている（熊本県文化財調査報告第130集－第14次調査報告－）。のことより推定すると、4時期の建物変遷の中で最も古い40号建物跡は、鞠智城跡の創建期かそれに近い時期が想定できる。40号建物跡の掘方は、他の建物の掘方と比べて大型であり、長者原X区の60号～63号建物跡の掘方とはほぼ同じ大きさである。40号建物跡と63号建物跡とは、同じ規模の掘方をもつ掘立柱建物跡であり、建物の主軸方向が同じであるので、同時期と考えられる（第2図）。

#### 59号（65号）建物跡について

59号建物跡と65号建物跡には、それぞれの建物跡に伴う整地層があり、両者には上下関係がある。このことより、65号建物跡→59号建物跡の築造順序が把握できた。

#### 59号建物跡の構造

建物跡の構造では周溝跡が巡ることが特徴的である。溝跡を設けるのは建物跡が最も低い箇所に立地することに起因すると考えられる。周溝跡は全面が掘り込んでなく、南東端部が土橋状になっており、入口としての機能をもつものと思われる。この部分を建物跡の方向に伸ばすと、梁行3間の中央部に至る。入口と考えられる部分が南東側にあるのは、三カ所の門跡が城域の南端にあり、それらの周辺と建物跡が存在する長者原地区の地形環境によるものであろう。

59号建物跡の主流な礎石は溶結凝灰岩で、大型である。

#### 59号建物跡の時期

59号建物跡の東側に隣接して56号建物跡があり、両者の関係は土層ベルトで把握することができた。56号建物跡の調査では、整地Ⅰ層・整地Ⅱ層を確認した。整地Ⅰ層は56号建物跡に伴うもので、その層の下面に整地Ⅱ層が存在する。整地Ⅱ層は56号建物跡の下層にある建物跡に伴う。この整地Ⅱ層と59号建物跡の整地層が土層関係より同時期と考えられる。

整地Ⅰ層及び56号建物跡礎石掘り込み出土遺物の中で、56号建物跡の築造時期・使用時期を示すものが8世紀後半～9世紀前半に考えられる（熊本県文化財調査報告第164集－第18次調査報告－）。それで、56号下層建物跡は8世紀後半以前のものと考えられる。59号建物跡は56号下層建物跡と同時期と考えられるので、同様の築造年代が推定できる。

#### 65号建物跡の構造

65号建物跡が59号建物跡と明確に異なるのは礎石の大きさと石材である。65号建物跡の主流な礎石は花崗閃緑岩であり、59号建物跡の礎石より小型である。

#### 65号建物跡の時期

65号建物跡は59号建物跡の下層にあるので、59号建物跡より一時期古い。59号建物跡が8世紀後半以前の

築造と考えられるので、65号建物跡は8世紀中頃～後半以前の築造時期が推定できる。また、長者原Ⅲ区で確認した4時期の切り合い関係のうち、最も古いのが掘立柱建物跡である。創建期かそれに近い時期の建物が掘立柱建物跡と仮定すると、礎石建物である65号建物跡は7世紀後半以降の築造と考えられる。まとめると、65号建物跡の築造時期は7世紀後半以降で、8世紀中頃～後半以前が推定できる。

#### 60号～65号（66号）及び4号溝について

長者原X区に位置する建物群のうち、60・61号建物跡の主軸はともにN-0°-Wで真北である。建物間を見ても、柱列と柱列で4mの間隔をもつ。この2棟の建物は同時期に並立したものと考えてよさそうである。

63号建物跡は、その主軸がN-11°-Wである。62号建物跡の主軸を見ると、63号建物跡と直角に建てられている。この2棟は同時期に並立したといえる。60・61号建物群と、62・63号建物群は、その主軸のずれから同時期並立の可能性は低い。その新旧関係は、掘立柱の掘り込みの切り合いがなく、さらに遺物の出土もなかったため判定はできない。

前述した40号建物跡と、62・63号建物跡は主軸が一致することから、同時期であると思われる。また、この建物群は鞠智城の4時期の建て替えの中で、最も古い時期のものとなる。

60・61号建物跡が、もし62・63号建物跡に先行するならば、鞠智城は5時期にわたり、建て替えられたと変更せざるを得なくなる可能性も出てきた。

また、4号溝とそれに付随する杭列の性格を、その位置関係から見ると、62・63号建物群とのセットがうかびあがる。

64号建物跡も、この群の中に含まれる礎石建物跡である。鞠智城で確認された礎石建物跡と比較しても、3間3間の規格の礎石建物は唯一であり、特殊な建物跡である。さらに、軒丸瓦の瓦当が出土したことも特筆すべき事であろう。

これらの建物群の性格を考えると、主になる63号建物跡は、3間7間の側柱の掘立柱建物であること。正方形の大型の掘り方で、直径が40cmにおよぶ柱痕跡を有すること。配列では、直角に配置された建物群であること。さらに、杭列を備えた区画の溝を伴うことなどの特徴から、単に山城の防衛施設の一つとみるには、無理があるようと思われてならない。

さらに、池跡からの木簡の出土、刀子、墨書き器等の出土との関連をも考慮すると、役所的な役割をもつた施設が存在した可能性も指摘できるのではないだろうか。今後の資料の増加を待ち、さらに検討を重ねる必要がある。

#### 池跡について

第19次調査において、池跡の発見のいきさつは前述したとおりである。32本のトレンチにより、その範囲の確定ができたことは、これから調査の目的、方法及び成果の分析等において、多くの課題を提供したといえる。

今回の調査では、木簡を含め、多くの木製品や土器等が出土したが、トレンチ調査ということで、層序に基づく年代及び、鞠智城の年代に関する相関関係等、まだ詳しい分析はおこなえていないのが現状である。調査はこれからも継続して実施する予定であり、発掘成果もさらに充実したものになるとおもわれる。

今回の報告は、池跡の発見にいたる経緯や、出土した遺物の説明についてのみおこなったが、次回以降からの報告では、年代の確定や、鞠智城の創建期の時期を断定する遺物の出土、修治時期の遺物、終焉時期の

遺物等の検証が可能になってくるものと期待している。さらに古代山城として機能したことを確定する確かな遺物の発見とともに、鞠智城の果たした、別の性格や機能をも実証する、新たな発見の可能性が高いことを、ここに記してまとめとしたい。

#### 瓦二次加工品について

瓦二次加工品は現在の時点では総数32点出土しており、第14表に集計した結果などから、その特徴をあげ、列記しておく。

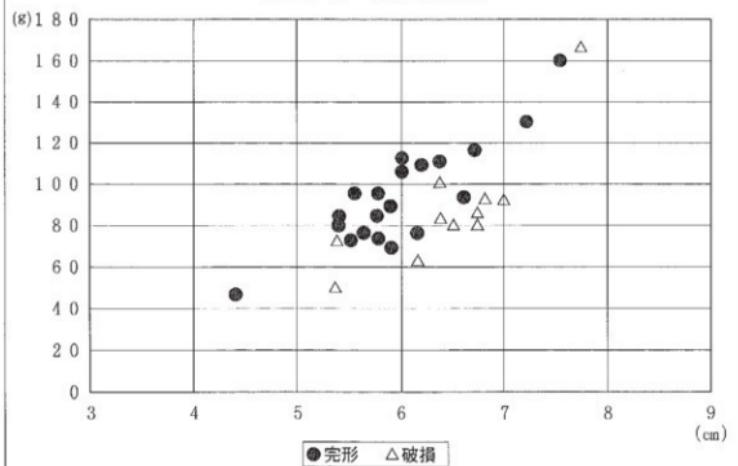
瓦二次加工品は平瓦を打ち欠き加工や、研磨加工によって平面凹形、あるいは方形に整形している。加工の多くが凹面や凸面からの打ち欠きであるが、研磨加工（あるいは使用）によって、打ち欠き加工の痕が見えなくなっている資料も認められる。また、瓦の端部や側縁部をそのまま残して加工している資料も多い。これは、打ち欠き加工の手間を省いたものであろう。

第14表では、完形資料だけを見ても、復元直径5.4~6.7センチ、重量60~117.5gの範囲に集中している。破損している資料についても、重さを復元し、表の垂直方向へかさ上げすると、さらにまとまるものと考えることができよう。まとまりが見られる、復元直径6センチ前後というのは、ちょうど手のひらに収まるほどの大きさである。

瓦二次加工品は、布目瓦の利用に限られている。布目瓦の厚さは2センチ前後で、須恵器や土師器の厚さ1センチ前後という数値を比べると、瓦はかなり厚い。製品として必要だった要素に、平面で見たとき円形または方形で直径6センチ前後、60~117.5gの重さという要素のほかに、厚さ2センチ前後という要素もあったと推測できる。

瓦二次加工品の年代について、『興善寺I』（熊本県文化財調査報告第45集）で、瓦器質土器による製品が出土していることから、年代の一端が推定される。ただし、鞠智城跡では、現在のところ布目瓦を加工した製品しか見つかっておらず、瓦質土器の年代まで下げるることはできない。

第14表 瓦二次加工品計測表



# 熊本県 鞠智城跡出土木簡

国立歴史民俗博物館

平川 南

## 1. 積文

「秦人忍口五斗」

〔米<sub>5</sub>〕

1 3 4 × 2 6 × 5

0 3 2 形式

## 2. 形状

ほぼ半分の位置で折損し若干欠損部があるが、完型木簡とみてよい。裏面はわずかに刃物を入れて割ったままであり面調整を施していない。

## 3. 内容

上部の左右から切り込みを入れた形状と「人名 + (米) 五斗」の記載様式から判断すれば、荷札木簡とみて間違いない。米五斗=一俵に付した荷札である。秦人というウジ名は肥後国では初見である。この荷札には貢進者の本貫地が記載されていない。

## 4. 年代

建物が集中する地域に近接した北西側に、谷の自然地形を利用した池（約 5300 m<sup>2</sup>）が確認され、木簡はその池の粘土層より出土した。粘土層には 7 世紀後半～8 世紀前半の土師器・須恵器が包含されていることから、一応、木簡の年代を 7 世紀後半から 8 世紀前半の間とみておきたい。

## 5. 木簡の製作技法と形状

本木簡の製作法について、二つの特徴を指摘することができる。

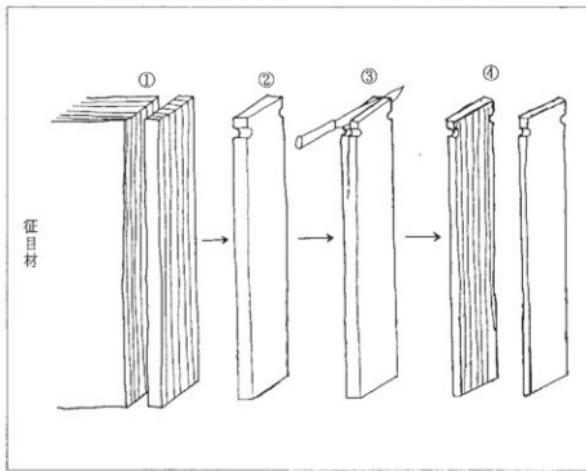
(1) 裏面は、上部からわずかに刃物を入れて割り、面調整を施していない。これは、おそらく荷札木簡の製作にあたり、次のような技法が想定できるであろう。

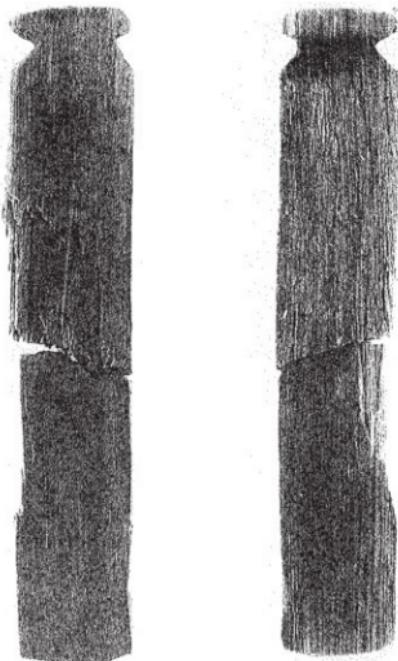
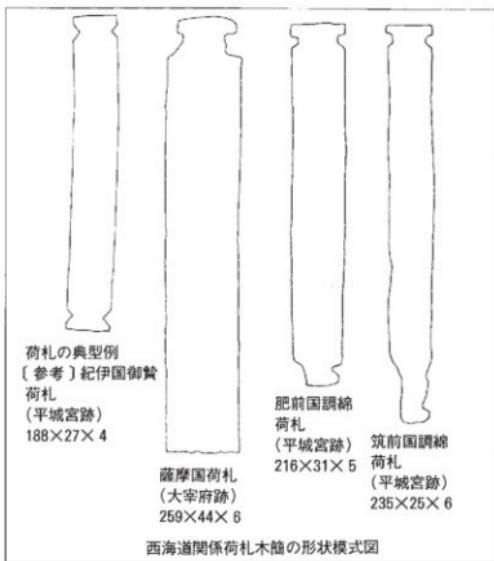
まず、一定の厚さの短冊を用意し、次に表裏両面を調整し、上部の左右から切り込みを入れたのちに上部から刃物をわずかに入れて割り裂いて、二つあるいはそれ以上の荷札を作り出す方法である。

(2) 上・下端部を表裏から刃物を入れて、面取りを施したのちに、上端部分に表からわずかに切り取った面（カット面）が認められる。この技法は、各地の出土木簡で確認することができ、木簡の表・裏の表現として意識的なされたものであると考えられる。

この点については、すでに拙稿「いわき市大猿田遺跡出土木簡について」（福島県文化センター『いわき市大猿田遺跡』1997年）において同様の特徴を指摘した。古代の木簡の製作および使用上、きわめて重要な所作として、今後注意深く観察する必要があると改めて強調しておきたい。

さらに、荷札木簡の形状については、次の点に注目しておきたい。右図に示すように、荷札の上部の左右から切り込みが入るが、その切り込みの形状（通常の V 字状に対して U 字状に近い形）と位置（通常よりやや上端部に近い）が、平城宮跡出土の諸国の荷札の中で特異な形状とされている西海道関係の調縫の荷札と類似した特徴を有している。さらに大宰府跡出土の荷札にも共通した形状のものがみられるだけに、一応留意する必要があろう。





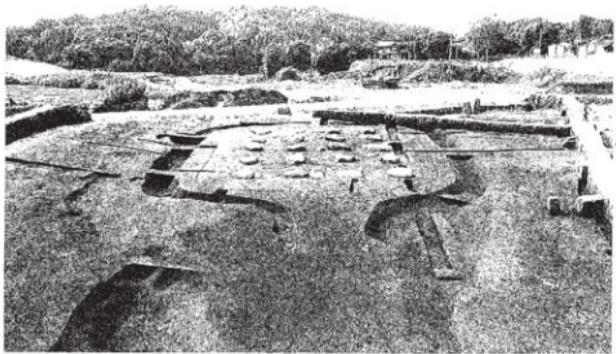
# 図版



長者原地区航空写真（北西上空から）



6号溝跡  
7号溝跡  
土層断面A—B地点  
(南から)



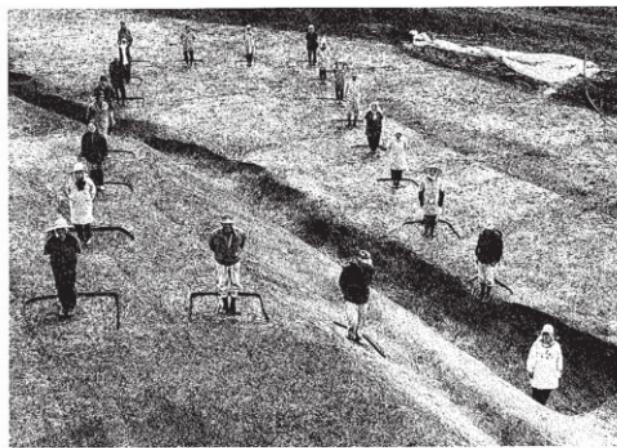
59号(65号)建物跡  
(南から)



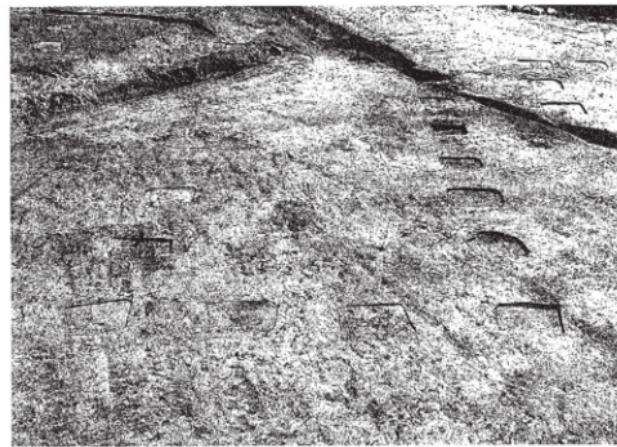
59号(65号)建物跡  
(西から)



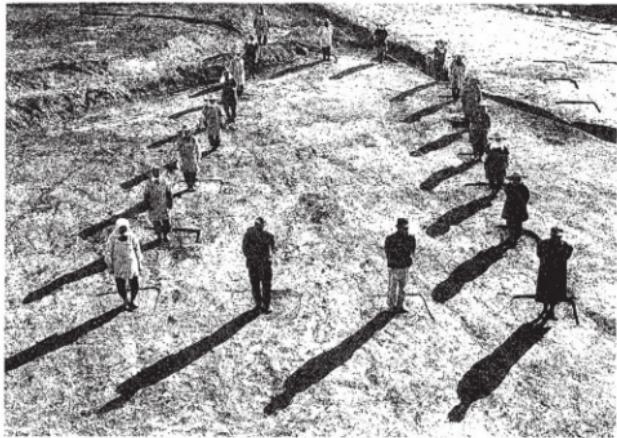
60号建物跡  
(北から)



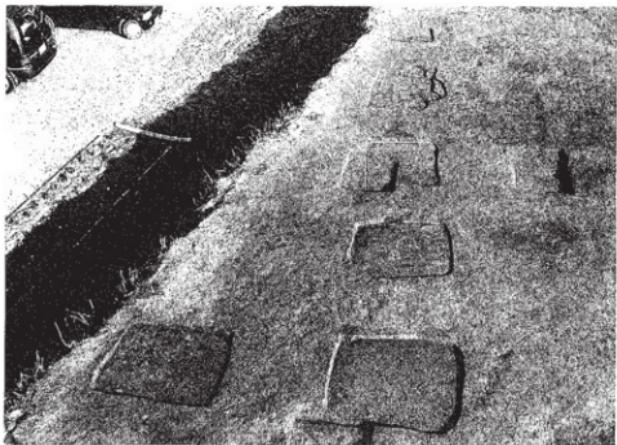
60号建物跡  
(北から)



61号建物跡  
(北から)



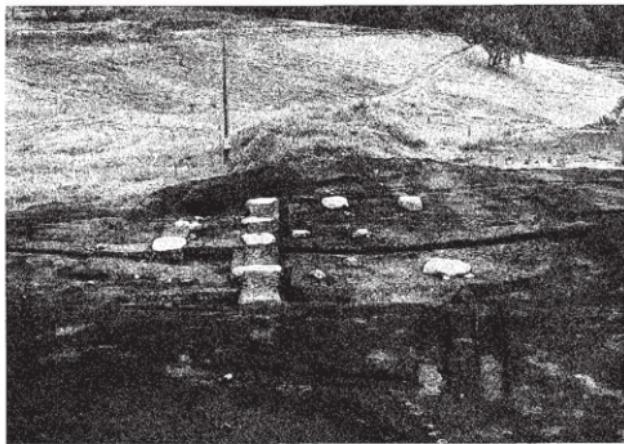
6 1号建物跡  
(北から)



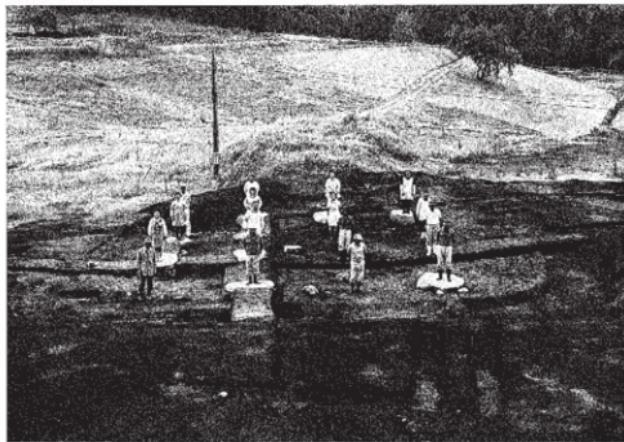
6 2号建物跡  
(西から)



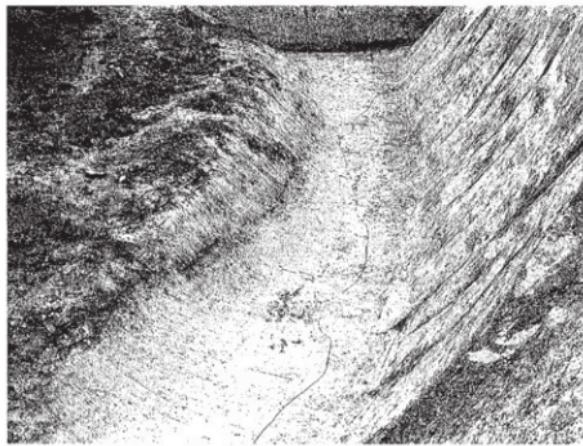
6 3号建物跡  
(北から)



64号（66号）建物跡  
（東から）



64号（66号）建物跡  
（東から）



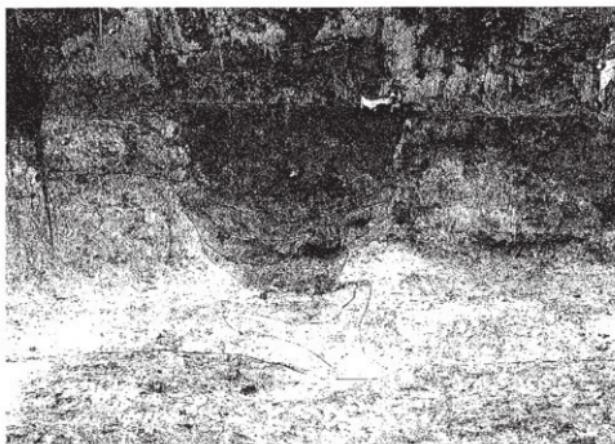
池跡 6 トレンチ  
（西から）



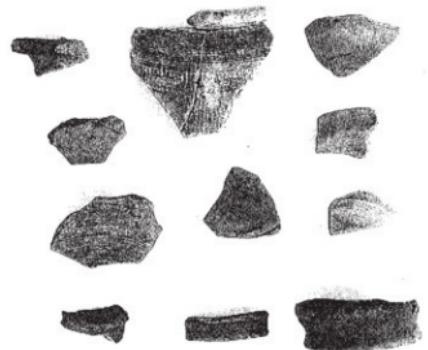
池跡 6・7 トレンチ  
(北西から)



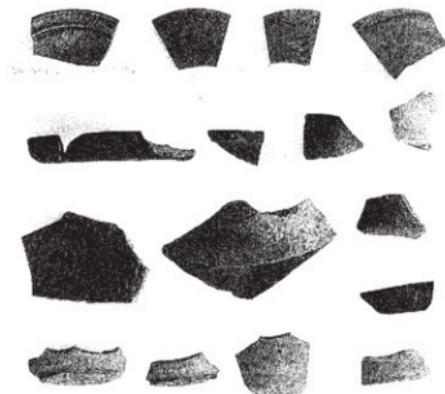
池跡 4・5・22 トレンチ  
(北西から)



池跡 7 トレンチ  
取水口と池跡端部



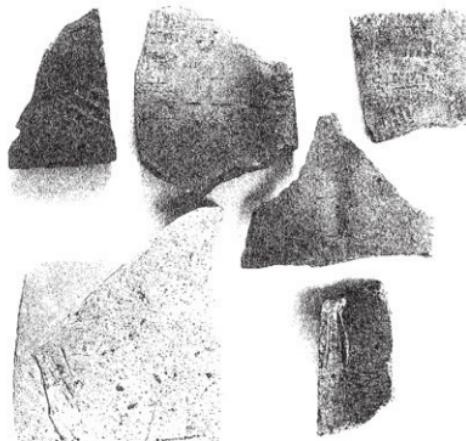
第6図 長者原III区出土土師器



第6図 長者原III区出土須恵器



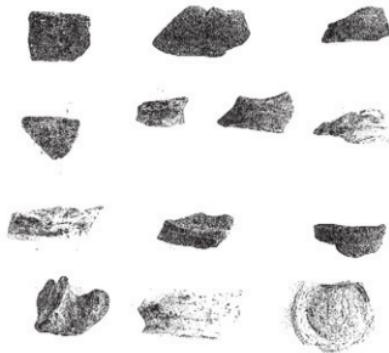
第7図 長者原III区出土  
平瓦凹面・丸瓦凸面



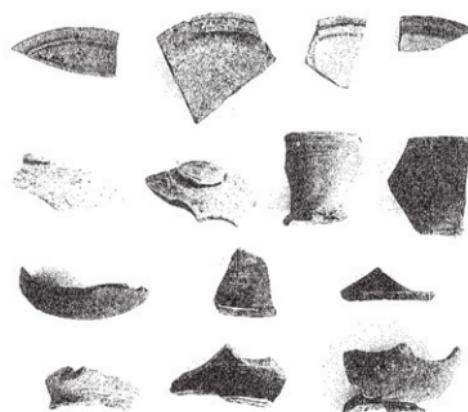
第7図 長者原Ⅲ区出土  
平瓦凸面・丸瓦凹面



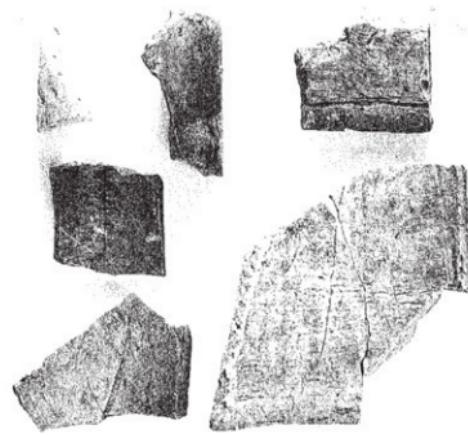
墨書き土器



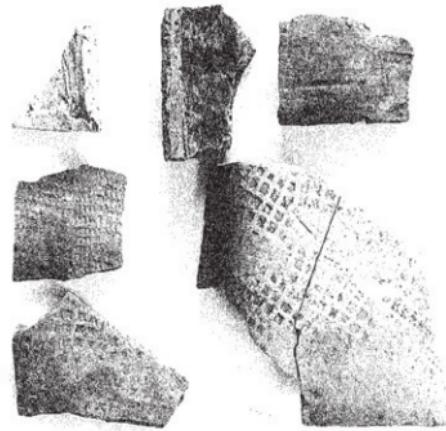
第12図 59号建物跡出土  
土器



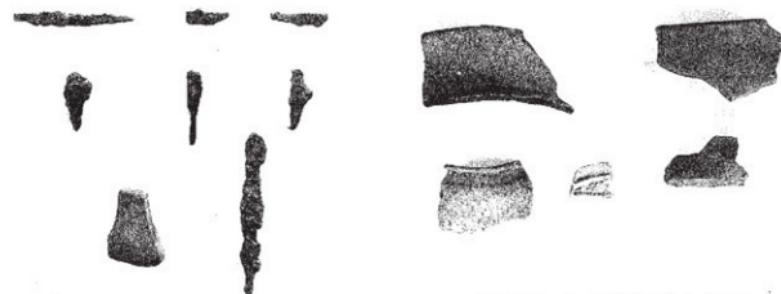
第13図 59号建物跡出土  
須恵器



第15図 59号建物跡出土  
平瓦凹面・丸瓦凸面



同上 平瓦凸面・丸瓦凹面



第25図 64号建物跡出土土篩器

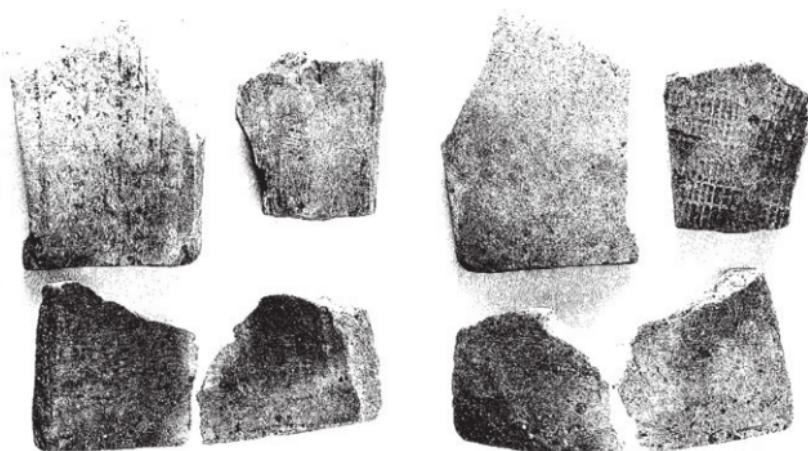
第17図 59号建物跡

出土鉄製品・砥石



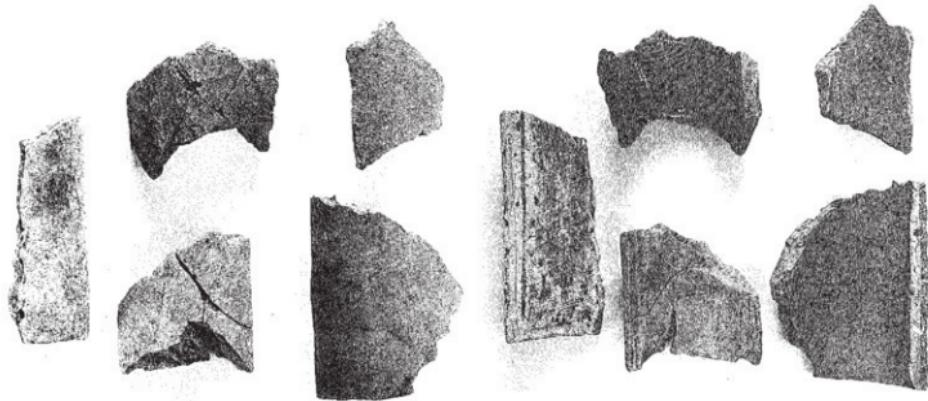
第25図 64号建物跡出土

須恵器の一部



第26図 64号建物跡出土平瓦凹面

同左 凸面



第27図 64号建物跡出土丸瓦凸面

同左 凹面

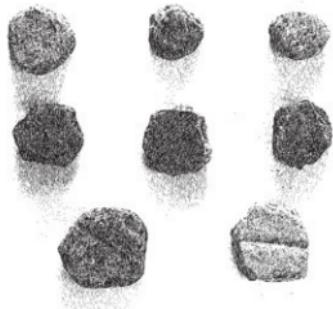


第28図 64号建物跡出土軒丸瓦表面

同左 裏面



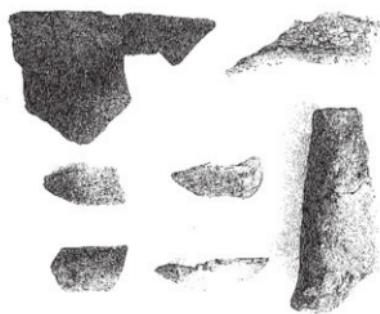
第28図 64号建物跡出土  
軒丸瓦凹面



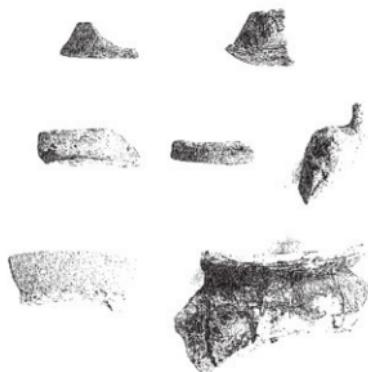
第29図 瓦二次加工品



第30図 64号建物跡出土鉄製品



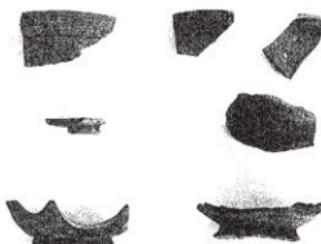
第37図 池跡出土土師器の一部



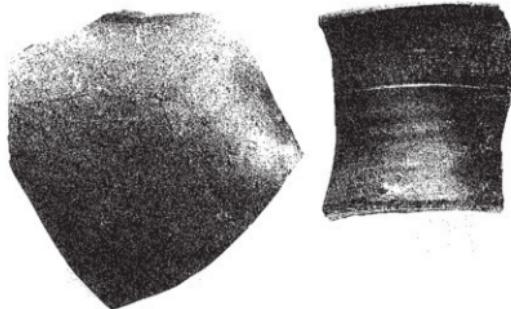
第36図 池跡出土土師器の一部



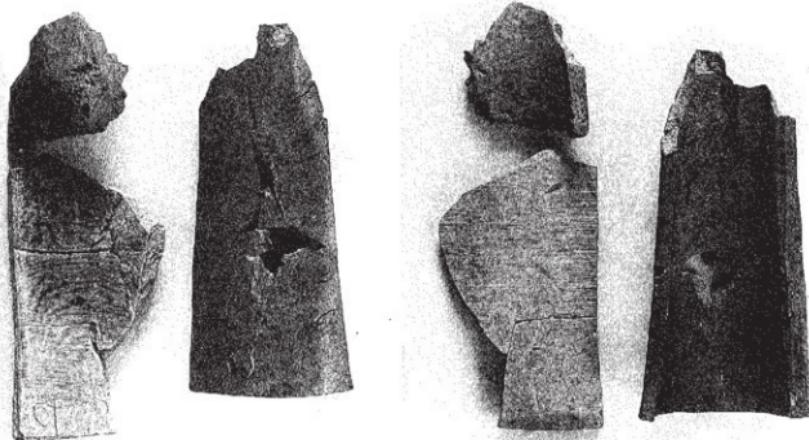
第38図 池跡出土土師器



第37図 池跡出土須恵器の一部



第38図 池跡出土  
須恵器

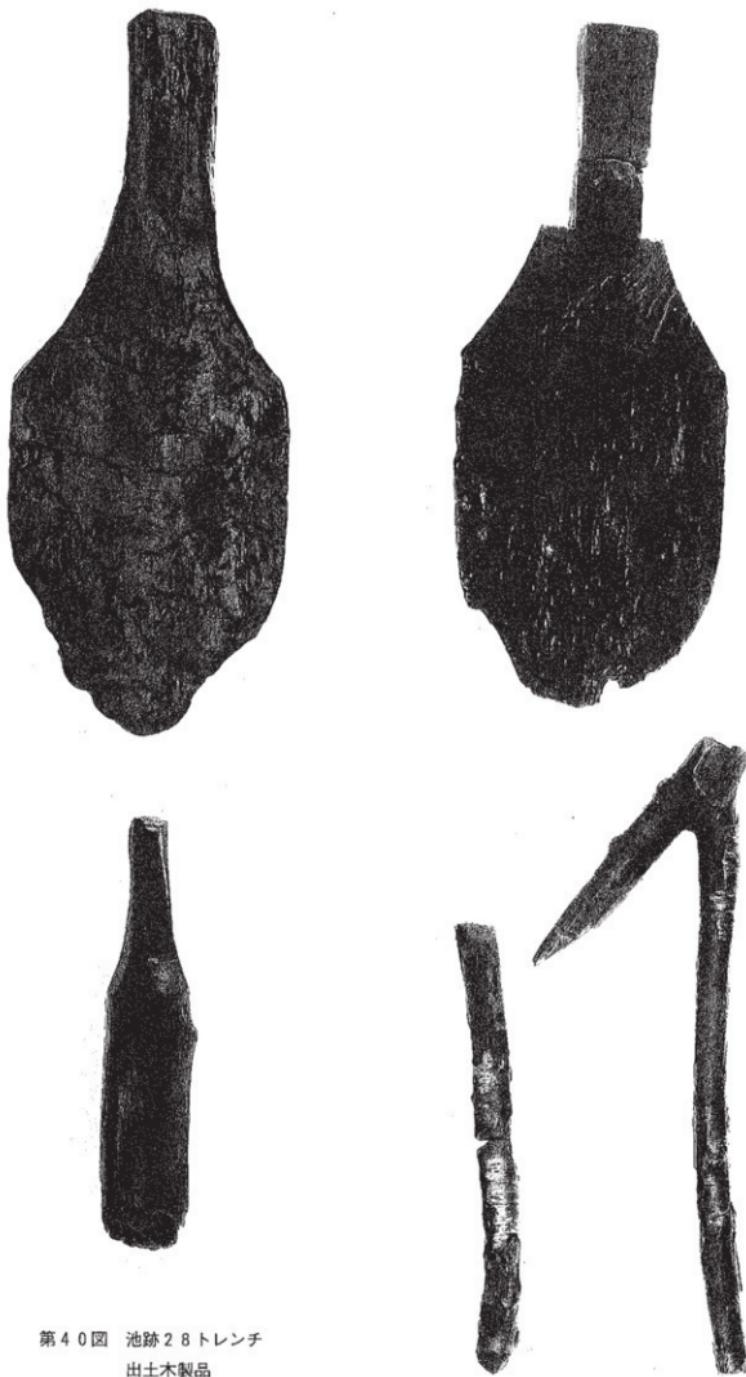


第39図 池跡出土平瓦凹面・丸瓦凸面

同左 平瓦凸面・丸瓦凹面



第40図 池跡28トレンチ  
出土木製品



第40図 池跡28トレンチ  
出土木製品

# 報告書抄録

書名	鞠智城跡
シリーズ名	熊本県文化財調査報告
シリーズ番号	第169集
編著者名	園村辰実・西住欣一郎
編集機関	熊本県教育委員会
所在地	〒862-8609 熊本市水前寺6丁目18番1号
発行年月日	1998年3月31日

所収遺跡名	所在地	コード 市町村：遺跡番号	調査期間	調査面積	調査原因
鞠智城跡	鹿本郡菊鹿町大字米原		199704 ～199803	約5,000m <sup>2</sup>	遺跡整備

主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
奈良時代 から 平安時代	礎石建物跡 4 掘立柱建物跡 4 溝跡 1 池跡 土坑 3 溝跡 1	布目瓦・須恵器 土師器  須恵器  木簡・木製品 青磁・瓦質土器 土師質土器	整地層が確認され、その上に礎石を据える。  方形の掘方・柱痕跡  建物群を区画する。  古代山城では全国初
中世			

熊本県文化財調査報告 第169集  
**鞠智城跡**

——第19次調査報告——

平成10年3月31日

編集発行  
熊本県教育委員会  
〒860-8609 熊本県熊本市水前寺6丁目18-1  
TEL (096) 383-1111 (代表)  
文化財整備係 (内線 6714)

印 刷  
㈱大和印刷所  
〒862-0931 熊本県熊本市戸島町920-11  
TEL (096) 380-0303

この電子書籍は、熊本県文化財調査報告第 169 集を底本として作成しました。  
閲覧を目的としていますので、精確な図版などが必要な場合には底本から引用  
してください。

底本は、熊本県内の市町村教育委員会と図書館、都道府県の教育委員会と図  
書館、考古学を教える大学、国立国会図書館などにあります。所蔵状況や利用  
方法は、直接、各施設にお問い合わせください。

書名：鞠智城跡

発行：熊本県教育委員会

〒862-8609 熊本市中央区水前寺 6 丁目 18 番 1 号

電話： 096-383-1111

URL : <http://www.pref.kumamoto.jp/>

電子書籍制作日：2015 年 12 月 24 日